

寄贈  
No. 150

# 鹿兒島県史料

旧記雑録追録

三

明治百年記念館建設調査室



## 例言

一本書は、東京大学史料編纂所蔵本「薩藩舊記雑録」を底本とし、そのうち追録巻四十六から巻七十までを収めて、「鹿児島県史料 旧記雑録 追録 三」として継続刊行するものである。年代は正徳二年四月から享保十四年十二月までの十八年間である。

一文書・記事を通じ、底本の順序に従い、通し番号を文首に付した。また巻末に文書・記事目録を掲げた。

一文書、または記事が数種の内容に分かれる場合には、小番号を付した。

一刊行に当って、文書の体裁を、おおよそ次のように統一した。

イ 文書の所在などを示す原注は、一字下げて首部に付した。

ロ 猶々書は、二字下げにし、その位置は底本どおりにした。

ハ 文書・記事には適宜に読点「、」および並列点「・」を付した。

ニ 附（付記）、但（但し書）は改行した。

ホ 文書の年月日、差出、宛所の位置などは、底本の体裁にあわせて、ある程度の統一をした。

ヘ 書状は、底本の体裁に従うが、包紙の封じ目は「 $\text{A}$ 」に統一し、包紙への注記は底本にならった。

ト 花押は（花押  $\text{Na}^x$ ）と番号を付し、適宜人名を傍注するほか、巻末に花押集を掲げた。

一漢字は原則として底本の用字に従い、改める場合はなるべく正字を使用するが、底本の文意体裁をそこなわないものは一部当用漢字新字体を使用した。

一異・略・俗体文字は、大部分を普通の字に改めたが、次のような字は特にこれを残した。

尔(爾) 早(畢) 吳(異) 玠(珍) 弥(彌)

一特殊文字としては、次の字だけを残した。

ノ(しめ) ㇿ(より) 𠂔(まいる) く(々々) 𠂔(候)

一変体仮名は、普通の平仮名に改めたが、ニ、ホ、ヌ、ハ、ハだけはそのまま残した。

一人名・地名および難解な語句などには、適宜傍注を付した。地名は旧薩藩領域外は国名のみ、また領域内は現在(昭和四十六年四月一日)の郡・市名で表わした。

但し、国・市の字はこれを省略した。

一原注には括弧を付さず、新たに注を付する場合には、( )で囲んで原注と区別した。

一欠所部の原注 本マ、欠、スリキレ等は、その部分を□で囲み、本マ、欠、スリキレ等と傍注した。

一文意の通じない字、またはその箇所は□で囲み、(ママ)、(○○カ)と傍注を付した。

一挿入、付紙、押札等は、右肩に(挿入)、(付紙)等と傍注し、他とまぎらわしい場合には「」で囲んだ。

一朱書は(朱)と傍注し、その箇所を「」で囲んだ。

一行間の書き込みは、底本の体裁にあわせたが、書き込みが多すぎてまぎらわしい場合は、その位置を示し、関連箇所の文末にまとめた。

一本文書の行間に朱書された返書は、年月日と差出・宛所の関係を示す「上」「下」の位置は底本の体裁どおりとした。

一闕字・平出等は、原則として底本の体裁にしたがった。

一漢文は、返り点・送り仮名等不統一または不正確に用いられているが、底本通りとした。

一当時一般に使用された用字のうち、次のようなものはそのまま用いた。

百姓・(百姓) 小姓・(小姓) 陳・(陣) 蜜・(密) 養性・(養生) 次・飛脚(継) 太儀・(大儀) 日用・(日備)・

日履) 烈・(列) 咲止・(笑止) 騷働・(騷動) 會尺・(会釈) 諏方・(諏訪) 麿・(鹿兒) 船・(船) 相摸・

(相模) 訴詔・(訴訟) 飛彈・(飛驒)

一文字および文書を、原文書で補正する場合には、(〇〇)によって補う)と補注した。

一訂正された文字には、左傍に「、」を付し、訂正文字を右側に付した。

舊記雜錄 追録卷三 目次

題字

鹿兒島県知事  
金丸三郎

例言……………一  
目次……………四

卷四六	正徳	二年	四月	八月	(吉貴公)	一
卷四七	正徳	二年	九月	同	(吉貴公)	四一
卷四八	正徳	三年	四月		(吉貴公)	八六
卷四九	正徳	四年	一月		(吉貴公・繼豊公)	一三二
卷五〇	正徳	四年	二月	同	(繼豊公)	一八〇
卷五一	正徳	五年	一月		(吉貴公・繼豊公)	二〇一
卷五二	享保	一年	一月	同	(吉貴公・繼豊公)	二四七
卷五三	享保	二年	四月	同	(吉貴公・繼豊公)	三一
卷五四	享保	二年	九月	同	(吉貴公・繼豊公)	三五八
卷五五	享保	四年	三月	同	(吉貴公・繼豊公)	四〇八
卷五六	享保	六年	一月		(吉貴公・繼豊公)	四五三
卷五七	享保	六年	六月	同	(繼豊公)	五〇一
卷五八	享保	七年	一月		(吉貴公・繼豊公)	五二三
卷五九	享保	七年	七月		(吉貴公・繼豊公)	五六二
卷六〇	享保	八年	一月		(吉貴公・繼豊公)	六〇五

卷六一	享保	九年	一月	——	二月	(吉貴公・繼豊公)	六三六
卷六二	享保	一〇年	一月	——	二月	(吉貴公・繼豊公)	六八一
卷六三	享保	一一年	一月	——	二月	(吉貴公・繼豊公)	七一
卷六四	享保	一二年	一月	——	二月	(吉貴公・繼豊公)	七四一
卷六五	享保	一三年	一月	——	二月	(吉貴公・繼豊公・宗信公)	七六九
卷六六	享保	一四年	一月	——	四月	(吉貴公・繼豊公・宗信公・重年公)	八一二
卷六七	享保	一四年	五月	——	六月	(吉貴公・繼豊公・宗信公)	八四七
卷六八	享保	一四年	七月	——	一〇月	(吉貴公・繼豊公・宗信公)	八八九
卷六九	享保	一四年	一月	——	二月	(吉貴公・繼豊公・宗信公)	九三九
卷七〇	享保	一四年	二月			竹姫君様御入興之件	九八八
花押集							一〇一九
文書・記事目録							一〇二三

(表紙)

吉 貴 公 正 德 二 年 自 四 月 至 八 月

追 舊 記 雜 錄 卷 四 十 六

(原寸縦二四・ニセンチ、横一六・七センチ)

1 吉貴公御譜中

正文在志布志即心院

志布志即心院事考

(伊集院忠國女)

御家六代之 太守氏久公并御簾中敬外様御兩靈之御石塔被建、御牌及御安置付、御高拾五石被附置外處、惡地故年貢不全、其外餘計無之付、御佛餉且又寺役不相調段吉貴公達 貴聞、米八石宛年々可有御增加旨、此節被仰出外間、猶以無怠慢奉備御餉、如法可有勤行外、仍如件、

2 吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、目出度被存旨得其意外、將又來未年 正德五年乙未ニ當ル

權現様百回御忌御法事御執行付、日光山可被遊 御參詣由、被仰出外段被承之、恐愧旨尤外、依之被差越使者外紙面之趣、各申談及言上外、恐々謹言、

正德二年 四月六日

大久保加賀守

忠増判

松平薩摩守殿

正德二年辰四月朔日

肝付主殿 兼柄判

種子嶋彈正 伊時判

嶋津帶刀 仲休判

嶋津將監 久當判

嶋津大藏 久明判

即心院方山西堂

3 全上

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、正月廿四日増上寺 御佛殿

御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣各申談及 上聞

外、恐々謹言、

朱力キ

正徳二年 四月六日

大久保加賀守

忠増判

松平薩摩守殿

4 全上

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、正月廿四日増上寺 御佛殿

御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣令承知外、恐

々謹言、

朱力キ

正徳二年 四月七日

本多中務大輔

忠良判

間部越前守

詮房判

松平薩摩守殿

5 全上

御札令披見外、

6 全上

公方様益御機嫌能被成御座、正月廿四日増上寺 御佛殿

御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣各申談及 高

聞外、恐々謹言、

朱力キ

正徳二年 四月七日

井上河内守

正岑判

松平薩摩守殿

7 全上

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、目出度被存旨得其意候、將

又來未年

正徳五年乙未ニ當レリ

權現様百回御忌御法事御執行付る、日光山可被遊 御參

詣由、被 仰出外段被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣令承

知外、恐々謹言、

朱力キ

正徳二年 四月七日

井伊掃部頭

直該判

松平薩摩守殿

7 全上

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、目出度被存旨得其意外、將



又來末年 權現様百回御忌御法事御執行付、日光山可被遊 御參詣由、被 仰出外段被承之、恐悦旨尤候、紙面之趣令承知外、恐々謹言、

朱カキ  
正徳二年 四月七日

本多中務大輔  
忠良判

間部越前守  
詮房判

松平薩摩守殿

8 吉貴公御譜中

正文在文庫

尚々御機嫌よく御さなされり、御めてたくそんしま

いらせり、めてたくかしく、

三月朔日の御ふみ下され、まつく

御ふた御所様御機嫌よく御さなされ、めてたく思しめし

外由、さてハ未ノ年

權現様御百年忌御法事御しゆ行御さりニ付、

公方様日光山へ 御參詣被遊りむね 仰出されり御事き

かせられ、めてたく思しめしり由、此たん仰上られり由

にて御ふみ下されり、則申あけまいらせり御事にて御さ

り、めてたくかしく、

正徳二年 四月七日

松平

御返事  
さつまの守さま  
人々御中

とよ原  
ときはる  
みむろ  
たかせ  
川しま

9 吉貴公御譜中

御札令披見り、

公方様益御機嫌能被成御座、正月廿四日増上寺 御佛殿

御參詣之儀被承之、恐悦旨尤り、紙面之趣得其意候、恐

々謹言、

朱カキ  
正徳二年 四月七日

井伊掃部頭  
直該判

松平薩摩守殿

10 全上

去月廿九日之貴翰乍御報致拜見り、先達る申上り朝鮮國

に致漂着り御領内(大島郡)方瀬之中村權兵衛儀、御吟味被成り

處、弥御領内之者紛無御座り由、依之請取之者追る御差

越可被成旨、猶又御家來中より委細被申越致承知候、恐

惶謹言、

朱力年

正徳二年 四月七日

(長崎奉行)

大岡備前守

清平判

(同)  
駒木根肥後守

政方判

松平薩摩守様

11

吉貴公御譜中

同年四月十八日、執政下<sub>二</sub>奉書於鳥居丹波守忠利<sub>一</sub>曰、可<sub>レ</sub>

明日代<sub>二</sub>吉貴<sub>一</sub>登<sub>レ</sub>城云云、繇<sub>レ</sub>緊翌日忠利登<sub>レ</sub>營

將軍家宣公出<sub>二</sub>御于白書院<sub>一</sub>、松平若狹守吉治・忠利吉貴代・

(伊達)松平陸奥守吉村・松平攝津守義行・松平出雲守義昌一同

拜禮、各召<sub>二</sub>御前<sub>一</sub>、賜<sub>二</sub>領國安堵之<sub>一</sub> 御判物<sub>一</sub>、忠利

奉<sub>レ</sub>拜<sub>二</sub>受之<sub>一</sub>退去、是故家老鳥津内記久貫飛<sub>二</sub>脚力<sub>一</sub>達<sub>二</sub>此

事于麿府<sub>一</sub>、既而五月朔日、用人黒葛原源左衛門忠雄、記

録奉行田中五右衛門國明及輕士七人・步卒七人宰<sub>二</sub>領之<sub>一</sub>、

發<sub>二</sub>江府<sub>一</sub>、經<sub>二</sub>過東海・中仙・山陰・九州之驛路<sub>一</sub>各護<sub>二</sub>送

之<sub>一</sub>、六月十五日到<sub>二</sub>著于麿府<sub>一</sub>、吉貴奉<sub>レ</sub>遊<sub>二</sub>虎之間<sub>一</sub>、於<sub>二</sub>

對面所上壇<sub>一</sub>、謹頂<sub>二</sub>戴之<sub>一</sub>、即日教<sub>二</sub>家臣鳥津左衛門久

健<sub>一</sub>爲<sub>二</sub>謝禮使<sub>一</sub>差<sub>二</sub>于江府<sub>一</sub>、八月二日久健詣<sub>二</sub>執政之館<sub>一</sub>、

而述<sub>二</sub>所<sub>一</sub>合來<sub>二</sub>之旨趣<sub>一</sub>上奉<sub>レ</sub>謝<sub>レ</sub>之、同六日應<sub>レ</sub>徵久健登<sub>レ</sub>

12

寫正文在文庫

猶以熨斗目拾麻半上下可有着用<sub>レ</sub>、以上、

御用之儀<sub>レ</sub>間、松平薩摩守爲名代、明十九日五半時可有

登<sub>レ</sub>城<sub>レ</sub>、以上、

朱力年

正徳二年 四月十八日

阿部豐後守

(正峯)  
井上河内守

(忠雄)  
大久保加賀守

鳥居丹波守殿

13

寫正文在文庫

猶以熨斗目拾麻半上下着用可仕之旨奉得其意<sub>レ</sub>、以

上、

御用之儀御座<sub>レ</sub>間、松平薩摩守爲名代、明十九日五半時

登

城可仕之旨、御書面之趣奉畏存候、恐惶謹言、

朱力年  
正徳二年 四月十八日

鳥居丹波守

(金利) 居判

大 加賀守様

井 河内守様

阿 豊後守様

參入、御中

吉貴公御譜中

寫正文在文庫

一昨十八日七時、大久保加賀守様・井上河内守様・阿部

豊後守様御連名之以御書付、鳥居丹波守様は被仰渡り

趣、別紙之通御座り、依之丹波守様は則御受被仰上り、

右之趣丹波守様は被仰下り付、森川理(武) 爲居(共)伊賀守様

は差上、右之譯申上置り、丹波守様は及阿多六郎右衛

門差上、明日御登 城被成り儀、御判物御渡可被成と

の御事ニ有可有御座と奉存り、弥御勤可被下儀奉頼り

通申上、相應之御返答被仰下り、

一今十九日五時、丹波守様御登 城被成りニ付、森川理

右衛門御供相勤り、左り丹波守様 御前は御出之次

第左ニ荒増申達り、

一白御書院 出御、松平若狹守様・此御方様御名代丹波

守様・松平(伊達) 攝津(義行)守様・松平(義) 雲守(忠)様御

五人御壹所ニ御出、御禮御申被成り節、是へと 上意

有之、御五人共ニ 御前は御進被成り時、御領知御書

付被下之旨又 上意有之、御大老様・御老中様は御取

成御申被成、御判物五廣蓋ニ受、 御前被備置、自加

賀守様御銘々御渡、御頂戴首尾能相濟申り、右通此御

方様御組合を初御頂戴、夫方段々爲被成御頂戴之由ニ

御座り、

一右通御頂戴相濟り付り、即日御大老様・御老中様・若

御年寄様迄ハ、御在府之御方様御自身御勤可被成り、

御名代ニ有御頂戴御方ハ、名代被相勤り人、右御方々

は可被相勤旨御差圖有之り付、丹波守様右通御勤被成

り、御側は及御使者ニ有御勤可被成り、尤 御判物方

兩御奉行様へ及御留守居勤之筈ニ、於 御城いつれも

様被仰談り條、其通可仕由丹波守様被仰下り付、御差

圖之通御使者之御勤相濟申り、

一丹波守様此御方御屋敷に直ニ御出、 御名代御勤被成

り首尾、且又

太守様・又三郎様・御前様は御祝儀被仰入度り條、宜

申上旨被仰聞り付、早速被仰聞段ハ御國元は可申上旨

申上、 御名代御勤付り者、旁御首尾能於御國元被聞

召、御滿悅可被成<sub>レ</sub>趣御挨拶申上置<sub>レ</sub>、右御出之節奏御前之御様子具被仰聞、右之通御座<sub>レ</sub>、

一伊賀守様・丹波守様に御名代御勤被成<sub>レ</sub>付、御式臺迄私參上仕、忝奉存<sub>レ</sub>旨申上置<sub>レ</sub>、

右者 御判物御頂戴付<sub>レ</sub>、無殘所御首尾宜相濟申、

頂上至極奉存<sub>レ</sub>、早々此段爲可申上飛脚兩人差立申<sub>レ</sub>付、委細不得申上<sub>レ</sub>得共、先爲御落着荒増申上<sub>レ</sub>付、

委細右一卷之儀者追<sub>レ</sub>可申上<sub>レ</sub>付、御判物ニ相附<sub>レ</sub>御高御目錄ハ、御法事以後可被相渡旨、松平備前守様御家來<sub>レ</sub>森川理右衛門<sub>(武)</sub>迄内々申聞<sub>レ</sub>、然者 御判物御當地差立申時節之儀者、未いつ比とも難申越<sub>レ</sub>條、追<sub>レ</sub>御目錄被相渡<sub>レ</sub>ハ、則何日御當地出足仕<sub>レ</sub>、

追<sub>レ</sub>御目錄被相渡<sub>レ</sub>ハ、則何日御當地出足仕<sub>レ</sub>、

追<sub>レ</sub>御目錄被相渡<sub>レ</sub>ハ、則何日御當地出足仕<sub>レ</sub>、

追<sub>レ</sub>御目錄被相渡<sub>レ</sub>ハ、則何日御當地出足仕<sub>レ</sub>、

追<sub>レ</sub>御目錄被相渡<sub>レ</sub>ハ、則何日御當地出足仕<sub>レ</sub>、

追<sub>レ</sub>御目錄被相渡<sub>レ</sub>ハ、則何日御當地出足仕<sub>レ</sub>、

追<sub>レ</sub>御目錄被相渡<sub>レ</sub>ハ、則何日御當地出足仕<sub>レ</sub>、

追<sub>レ</sub>御目錄被相渡<sub>レ</sub>ハ、則何日御當地出足仕<sub>レ</sub>、

追<sub>レ</sub>御目錄被相渡<sub>レ</sub>ハ、則何日御當地出足仕<sub>レ</sub>、

追<sub>レ</sub>御目錄被相渡<sub>レ</sub>ハ、則何日御當地出足仕<sub>レ</sub>、

追<sub>レ</sub>御目錄被相渡<sub>レ</sub>ハ、則何日御當地出足仕<sub>レ</sub>、

御國元  
御家老中

朱カキ  
正徳二年 四月十九日  
嶋津内記<sub>(久喜)</sub>

正文在文庫

一筆致啓上<sub>レ</sub>、弥御堅達被成御休息珍重奉存<sub>レ</sub>、然者御

手前様爲御名代、今日被爲 召、致登 城、於御前御判

物頂戴之、萬端首尾能相動申<sub>レ</sub>、委細者嶋津内記方<sub>レ</sub>申

談<sub>レ</sub>、右之趣爲可申上如此御座<sub>レ</sub>、恐惶謹言、

朱カキ  
正徳二年 四月十九日  
鳥居丹波守 忠利判

松平薩摩守様

參人、御中

愚考、綱貴公ノ御妹近江水口城主爲居播磨守忠救ノ夫人トアレハ、丹波守忠利ハ忠救ノ恩男ナラン、左スレハ吉貴公ノ御從弟ニ当レリ

吉貴公御譜中

正文在文庫

薩摩國領薩摩・大隅兩國之地并日向國諸縣郡中百六拾四

箇村等地、都合六拾萬五千石餘、此外琉球國拾貳萬三千

七百石事<sub>(目録具、贖別紙)</sub>、任寛永以來之舊規、充行之訖、宜有領知

之狀如件、

正徳二年四月十一日  
(徳川家宣)  
(花押 No.1)

在十字通  
薩摩中將殿

正文在文庫

目錄

薩摩一國

伊佐郡 五拾貳箇村

高三萬八千四百壹石三斗六升貳合四夕七才

薩摩郡 三拾三箇村

高四萬貳千七百拾九石壹斗三升四合七夕五才

鹿兒嶋郡 貳拾七箇村

高三萬三百三拾九石六斗九升四合貳夕

日置郡 四拾八箇村

高五萬千六百四拾八石四升三合九夕

阿多郡 貳拾箇村

高貳萬三千五百七拾石四斗七升五夕

河邊郡 三拾五箇村

高三萬五千四拾五石七斗壹升八合

甌嶋郡 貳箇村

高貳千七百九拾壹石三斗八升五合

穎娃郡 七箇村

高壹萬五千九百三拾九石三斗八升四合七夕

揖宿郡 七箇村

高壹萬六千八百五拾七石五升六合七夕

給黎郡 六箇村

高壹萬四百六拾四石貳斗七合

谿山郡 六箇村

高壹萬五千四拾七石八斗九升五合五夕

出水郡 七箇村

高貳萬三千七百三拾五石貳斗五升六合

高城郡 八箇村

高八千四百四拾五石九斗九升壹合四夕

大隅一國

菱刈郡 拾三箇村

高九千九百八拾六石八斗五升六合

栗原郡 三拾貳箇村

高貳萬千八百貳拾四石四升三合

始羅郡(始) 三拾九箇村

高貳萬六千六百四拾三石四斗六升貳合

贈喉郡 六拾三箇村

高四萬三千八百八拾四石四斗八升

肝屬郡 三拾八箇村

高四萬貳千拾五石九斗八升八合

大隅郡 三拾貳箇村

高貳萬九拾貳石三斗壹升三合

熊毛郡 九箇村

高五千貳百五石七斗壹升九合

馭謨郡 四箇村

高千八拾石五斗九升

日向國

諸縣郡之内百六拾四箇村

向名村 昌明寺村

上下田村 内豎馬場村

岡松村 岡本村

裏村 嶋中村

柳水流村 榎田村

中福良村 吉村

長山村 湯田村

中福良村 灰塚村

宮原村 原田村

坂本村 大明司村

池嶋村 今西村

北方村 東方村

十日町村 大豆別府村

温水村

堤分村

奈佐木村

大牟田村

入木村

笛水村

浦之名村

入野村

北方村

山内村

大裏村

深歲村

内山村

五町村

柚木崎村

有田村

新橋村

原田村

内之藏村

志布志村

西方村

水流追村

高原村

繩瀬村

朝倉村

三箇村

紙屋村

南方村

切畑村

上床村

樋渡村

田尻村

去川村

川上村

花見村

藏永村

尾野見村

野神村

井崎田村

槻野村

眞方村

須木村

浦牟田村

江平村

前田村

麓村

漆野村

廣澤谷村

樋渡村

目黒村

北俣村

向高村

飯田村

倉岡村

小山田村

高濱村

堀内村

夏井村

野井倉村

安樂村

野方村	益丸村	今村	田之浦村	五十町分村	原口村
大裏村	永吉村	勝岡村	井藏田村	木前村	後校村
野々見谷村	郡本村	中裏村	安久村	田邊村	鷺巢村
栴山村	寺柱村	河東村	宮丸村	早水村	屋敷村
溝之口村	山之口村	花木村	下川内村	石山村	下川内村
梅北村	屋敷村	下財部村	上川村	田尻村	宮原村
今平村	石寺村	富吉村	大井手村	穗滿坊村	櫻木村
下財部村	横市村	金田村	餅原村	高木村	薄谷村
前川内村	下財部村	屋敷村	梶原村	水流村	上中原村
東霧嶋村	岩滿村	安永村	水流村	大西村	岩滿村
水流村	岩滿村	安永村	水流村	岩滿村	岩滿村

持留村 岡別府村 藍之原村

假宿村 横瀬村

高拾貳萬貳拾四石五斗八升

都合六拾萬五千八百六拾三石六斗三升

外

琉球國諸嶋 拾五嶋

高拾貳萬三千七百石

右今度被差上郡村之帳面相改及 上聞、如 御先代之高

所被成下御判物也、此儀兩人奉行依被仰付、執達如件、

正德二年四月十一日

(判物奉行) 松平備前守 正久判

(同) 安藤右京亮 重行判

在年字通 松平薩摩守殿

上包 領知目錄

18 日置邑主左衛門久健譜中

正德二年之夏

大樹家宣公以薩隅日三州案堵之 (安) 御判物、惠給 太守

吉貴公、以故久健爲謝使、馳東武勤使事、

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、正月廿四日増上寺 御佛殿

御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣令承知外、恐

々謹言、

朱力キ

正徳二年

四月十一日

間部越前守

詮房判

松平薩摩守殿

20 御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又妻女に歳

暮之御祝儀被下之、難有由紙面之趣得其意候、恐々謹言、

朱力キ

正徳二年

四月十二日

本田中務大輔

忠良判

間部越前守

詮房判

松平薩摩守殿

21

吉貴公御譜中

正文在文庫

貴札致拜見外、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦之旨尤奉存外、將又爲

歳暮之御祝儀、御奥方に御目錄之通被下之、難有思召旨、

依之被入御念外御紙面之趣承知仕候、恐惶謹言、

朱力キ

正徳二年

四月十三日

秋元但馬守

喬知判

松平薩摩守様

御報

22

吉貴公御譜中

正文在平田袈裟次郎

加冠

平田平藏

兵十郎

宜爲

正徳二辰四月十五日



23

吉貴公御譜中

正文在島津右膳

加冠

仁十郎

宜爲

正徳二辰

四月十五日

吉貴(花押 No.2)



24 吉貴公御譜中

正文在文庫

爲端午之賀儀、帷子單物十到來祝着、委曲土屋相摸守可述之外也、

朱力キ  
正徳二年 五月三日



薩摩中將殿

御參詣之儀被承之、恐悦旨尤、紙面之趣各申談及上

聞、恐、謹言、

朱力キ  
正徳二年 五月十三日 井上河内守 正岑判

松平薩摩守殿

27 吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見、

公方様益御機嫌能被成御座、先頃山王社・根津社 御參詣之儀被承之、恐悦旨尤、兩通紙面之趣令承知、恐

、謹言、

朱力キ  
正徳二年 五月十五日 井伊掃部頭 直該判

松平薩摩守殿

25 吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見、

公方様益御機嫌能被成御座、先頃山王社・根津社 御參詣之儀被承之、恐悦旨尤、兩通紙面之趣各申談及上

聞、恐、謹言、

朱力キ  
正徳二年 五月十三日 井上河内守 正岑判

松平薩摩守殿

28 全上

御札令披見、

公方様益御機嫌能被成御座、二月廿八日東叡山 御佛殿御參詣之儀被承之、恐悦旨尤、紙面趣令承知、恐、

謹言、

御札令披見、

公方様益御機嫌能被成御座、二月廿八日東叡山 御佛殿

朱力<sup>キ</sup>  
正徳二年  
五月十六日

本多中務大輔  
忠良判

間部越前守  
詮房判

松平薩摩守殿

29  
吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見<sup>レ</sup>、

公方様益御機嫌能被成御座、先頃山王社・根津社 御參詣之儀被承之、恐悦旨尤<sup>レ</sup>、兩通紙面之趣令承知<sup>レ</sup>、恐

々謹言、

朱力<sup>キ</sup>  
正徳二年  
五月十六日

本多中務大輔  
忠良判

間部越前守  
詮房判

松平薩摩守殿

30  
全上

御札令披見<sup>レ</sup>、

公方様益御機嫌能被成御座、二月廿八日東叡山 御佛殿御參詣之儀被承之、恐悦旨尤<sup>レ</sup>、紙面之趣令承知<sup>レ</sup>、恐

々謹言、

朱力<sup>キ</sup>  
正徳二年  
五月十八日

井伊掃部頭  
直該判

松平薩摩守殿

31  
吉貴公御譜中

正文在文庫

今度

<sup>(家綱)</sup>嚴有院様御遠忌之御法事御執行付<sup>ル</sup>、以使者御香爨被獻之<sup>レ</sup>、於東叡山首尾能奉納之事<sup>レ</sup>、右之趣及 上聞候、

恐々謹言、

朱力<sup>キ</sup>  
正徳二年  
五月廿五日

阿部豊後守  
正喬判

松平薩摩守殿

32  
吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見<sup>レ</sup>、

公方様益御機嫌能被成御座、先頃濱御殿被爲 成<sup>レ</sup>儀被承之、恐悦旨尤<sup>レ</sup>、紙面之趣各申談及 上聞<sup>レ</sup>、恐々謹

言、

朱カキ  
正徳二年 六月十五日  
秋元但馬守 喬知判

松平薩摩守殿

全上

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、先頃濱御殿被爲 成外儀被

承之、恐悦旨尤外、紙面之趣令承知候、恐々謹言、

朱カキ  
正徳二年 六月十六日  
井伊掃部頭 直該判

松平薩摩守殿

34 吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、先頃濱御殿被爲 成外儀被

承之、恐悦旨尤外、紙面之趣令承知外、恐々謹言、

朱カキ  
正徳二年 六月十八日  
本多中務大輔 忠良判

間部越前守 詮房判

松平薩摩守殿

35 全上

御札令披見外、就酷暑之節

公方様御機嫌之御様躰以使者被相同之外、益御安全御儀

外間、可御心易外、隨而琉球布十卷并砂糖濱天門冬一器、

赤貝塩辛一器・泡盛酒二壺被獻之外、各申談遂披露外處

一段之御仕合外、恐々謹言、

朱カキ  
正徳二年 六月十九日  
秋元但馬守 喬知判

松平薩摩守殿

36 全上

御札令披見外、就酷暑之節

公方様御機嫌之御様躰被相同之外、益御安全御儀外間、

可御心安外、隨而目錄之通被獻之外、紙面之趣令承知外、

恐々謹言、

朱カキ  
正徳二年 六月廿一日  
井伊掃部頭 直該判

松平薩摩守殿

37 全上

御札令披見外、就酷暑之節

公方様御機嫌之御様躰被相伺之外、益御安全御儀外間、

可御心易外、隨而目錄之通被獻之外、紙面之趣令承知外、

恐々謹言、

朱力キ  
正徳二年  
六月廿三日

本多中務大輔  
忠良判

間部越前守  
詮房判

松平薩摩守殿

38  
吉貴公御譜中

正文在文庫

貴翰拜見仕外、先達而被仰聞外御領國知覽内門之浦に致漂着外來朝之廣南出唐船一艘、警固被差添、當津に御差越被成外付、御紙面被入御念儀奉存外、委細御家來中右被申越之由致承知外、恐惶謹言、

朱力キ  
正徳二年  
六月廿七日

(長崎藩)  
大岡備前守  
清平判

(同)  
駒木根肥後守  
政方判

松平薩摩守様  
貴報

39  
全御譜中

正文在種子島彈正久基

種子嶋彈正

久

正徳二辰六月廿八日

(島津書)  
(花押 No.2)

40  
吉貴公御譜中

扣寫在江戸家老座

嶋津大藏殿此節嶋津内記代に被差越候付、御目見之御願可有御座事外、早晚 太守様御在府中ニ御願御座外、

御暇之御禮被仰上外節、御留守居御家老 御目見被仰付外、此節之儀ハ、御在國之御事外間、御國元右御願可有

御座旨申越外處、被達 貴聞、大藏殿被罷登外節申談、

御願之御口上書、於御當地相調差出可然外、左外右一三

(田宮殿)  
又者壽見なとを以、御國元右之御願被仰出外次第之儀、御老中様に御内所承合置、大藏殿出府之節成合外様

可申談旨、御意之趣肝付主殿殿より被申越外、依之左之通御口上書相調、七月廿一日先土屋相摸守様に、一三を

以御内意申上御願之趣具申上、大藏儀先月十五日國元罷立外由ハ、頃日申來外得共、未着不仕外、不致參着内願

申上外儀ハ如何こと外得共、先相摸守様に老御内意先達

御願之趣具申上、大藏儀先月十五日國元罷立外由ハ、頃日申來外得共、未着不仕外、不致參着内願申上外儀ハ如何こと外得共、先相摸守様に老御内意先達

り可申上旨申越外由内記申聞、書付相渡外付、持參仕外  
 通申上、書付懸御目候處、得と御覽被成外、御願之趣御  
 尤被思召外、御口上書之内満君方と有之外ハ、誰ニあり  
 哉と御尋被成外付、薩摩守娘 近衛攝政殿御猶子ニ被仰  
 付、満君方と唱可申由、爲被仰渡由ニ御座外通申上外得  
 考、如何ニも御存爲被成由御挨拶御座外、左外御紙面  
 成ほと宜此上思召寄無之、御紙面ニ相見得外通、當分留  
 守居ニ被差置外嶋津内記、満君方御上京付、御用被仰  
 付置、直ニ京都迄御供いたす筈外由、就夫嶋津大藏代ニ  
 被差越段、具被聞召達外、右躰半代合之儀跡ニ例格表有  
 之外哉、此節御願ハ新規之様ニ相見得外付、何様ニ可相  
 濟哉、御落着難被成外、爲相知儀共ハ無之外哉と御尋外  
 付、一三申上候考、其段ハ何分ニも内記不申聞外得共、  
 私相考申外考、古キ家柄ニハ外得共、攝政殿御猶子ニ爲  
 被仰付躰之儀、終有之間敷と存申外、此節内記大藏代合  
 申付外儀表、満君方上京供申付置候付、半途之代合ニ  
 いたさせ申事外、跡々之通薩摩守御暇被下外節、留守居  
 家老 御目見被仰付外儀ハ、先例ニ御座外得考、分ケ外  
 奉願ニハ不及事外故、留守居差置外と申迄之一通申上、  
 御目見被仰付事外得共、跡無之、此節代合申付儀ニ外故、

其趣奉願ニ有可御座と、一三相考申外段申上外得ハ、  
 成程御聞取被成外、相州様ニ考御落着被成候間、幸當月  
 阿部豊後守殿御用番之事外間、直ニ彼御方ニ致參上御口  
 上書懸御目、御内意可申上旨被仰付外付、豊後守様ハ一  
 三致參上、御願之趣御直ニ申上外處、相州様御尋御同様  
 之儀ニ有、一三御答も同前申上外、右通外ハ、三日中  
 留守居を以表より口上書差上可申哉、此段も御意次第奉  
 存外通申上外處、一三持參ニ有得と被成御覽外上、最早  
 留守居持參ニ不及外、直ニ此書付御請取被召置外、追外  
 御用表外ハ、一三ニ可被仰下外條、左様相心得可罷居旨  
 被仰、御兩所様共、能御受込ニ有御座外、且又土屋様被  
 仰外考、先例無之、新規之御願之趣ニ外得考、委細之譯  
 間部越前守殿に申込可然之由被仰外付、一三申上外考、  
 如何様油斷ハ仕間敷外條、彼御方ニ爲申上ニ有可有之哉  
 と存申外通申上外ハ、弥申置可然旨、再三被仰外通是  
 又申聞外付、豊後守様ニ被差出外御書付同前相調、森川  
 理石衛門を以、里見武左衛門に委細申聞、武左衛門了簡  
 次第奥村治右衛門に相達、間部様被聞召外様仕筈ニ理右  
 衛門に申合置外、左外七月廿一日武左衛門に自理右衛  
 門問合、武左衛門所に參、得と取合、段々右之趣申達、

御書付相渡、御用番豊後守様は昨日御書付御請取置被成  
り付るハ、早々越前守様に被仰上、大藏 御目見仕り様  
ニ被添御心被下度趣、未大藏不致着段も申達り得者、今  
日者在宿仕事り間、明日越前守に具御内意之趣申聞、追  
る何分にも可申越旨武左衛門申り由、左り同廿六日武  
左衛門より申越りハ、先日之御書付早速爲申聞り御書付  
受取置被申り、大藏殿追り御着府之節、御沙汰之上不及  
御挨拶旨被申り付、差扣御答不申上り、猶大藏殿御着り  
ハ、早々被仰聞り様にと存り由、武左衛門申越り、

41 口上覺

私國許に之御暇被下り節、留守居に差置り家老 御目見  
被仰付被下度旨奉願、去年御暇之御禮申上り砌、嶋津内  
記 御目見被仰付、當日迄留守居差置申り處、近衛攝  
政殿御猶子滿君方當秋上京之供申付置り、依之内記代留  
守居家老嶋津大藏と申者此節差越申り、先規之通 御目  
見被仰付被下度奉願り、宜御沙汰奉願り、以上、

朱力キ  
正徳二年 六月 御名

42 吉貴公御譜中

正文在文庫  
御札令披見り、  
女院 (新上四門院) 崩御之段被承之、被絶言語由得其意外、依之  
公方様御機嫌之御様躰以使者被相伺之り、益御勇健御儀  
り間、可御心安り、紙面之趣各申談及 上聞り、恐々謹  
言、

43 全上

朱力キ  
正徳二年 七月朔日  
松平薩摩守殿  
秋元但馬守  
喬知判

御札令披見り、  
公方様益御機嫌能被成御座、四月廿二日東叡山 御佛殿  
御參詣之儀被承之、恐悦旨尤り、紙面之趣各申談及 上  
聞り、恐々謹言、

朱力キ  
正徳二年 七月三日  
阿部豊後守  
正喬判  
松平薩摩守殿

44 吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

女院 崩御之段被承之、被絶言語由得其意外、依之

公方様御機嫌之御様躰被相伺之外、益御勇健之御儀ニ付

間、可御心安外、紙面之趣令承知候、恐々謹言、

朱力キ  
正徳二年 七月四日

松平薩摩守殿

井伊掃部頭  
直該判

45 全上

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、四月廿二日東叡山 御佛殿

御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣得其意候、恐

々謹言、

正徳二年 七月五日

松平薩摩守殿

井伊掃部頭  
直該判

46 全上

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、四月廿二日東叡山 御佛殿

御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣得其意候、恐

々謹言、

朱力キ  
正徳二年 七月五日

本多中務大輔  
忠良判  
間部越前守  
詮房判

松平薩摩守殿

47 全上

御札令披見外、

女院 崩御之段被承之、被絶言語由得其意外、依之

公方様御機嫌之御様躰被相伺之外、益御勇健之御儀外間、

可御心安外、紙面之趣令承知外、恐々謹言、

朱力キ  
正徳二年 七月五日

松平薩摩守殿

本多中務大輔  
忠良判  
間部越前守  
詮房判

48 吉貴公御譜中

正文在文庫

貴札致拜見外、弥御堅固被成御座之旨珍重之御事御座外、  
然者四月十九日爲御名代、同氏丹波守<sup>(忠利)</sup> 御前被 召出、

御領國之 御判物頂戴仕御安堵之由、依之御紙面之趣御  
慇懃之至奉存外、恐惶謹言、

朱力キ  
正徳二年 七月六日

鳥井伊賀守  
忠英判

松平薩摩守様  
貴報

49 全上

芳牒披閱、愈平安之由珍重外、此方無異變外、今度大閤  
歸洛之事相聞、因茲被伸祝詞、且如目錄惠賜之令満足外、  
餘期後音外、謹言、

朱力キ  
正徳二年 上秋初六

(五衛家紙)  
(花押 No.3)

薩摩中將殿

50 吉貴公御譜中

正文在文庫

貴札致拜見外、去年朝鮮國に漂着仕候御領内之者、長崎  
御奉行所に差送外處、無別條御受取被成候之由、珍重之  
御事外、依之被仰下之趣被入御念儀奉存外、恐惶謹言、

朱力キ  
正徳二年 七月廿二日

宗對馬守

義方判

51 全上

松平薩摩守様  
貴報

猶以彼所御城下方程遠候付、爲支配肝付主殿方被  
仰付、彼地に早速被差遣外間、追々從主殿方可被申  
越旨承知仕外、以上、

貴翰拜見仕候、御領内薩摩國串木野村之沖江、去十七日  
之晚異國船之様子に、白帆之船壹艘相見外處、追付及  
夜陰帆影相見不申、翌十八日風雨烈候、海上難相見、漸  
暮時分少雨止候間、彼船之あり哉、碇を爲卸躰に隣村  
(川内)  
寄田と申所之沖に相見外由、委細之儀若從御家來衆被申  
越外旨、御紙面之趣承知仕候、恐惶謹言、

朱力キ  
正徳二年 七月廿二日

(長崎奉行)  
大岡備前守  
清平判

(同)  
駒木根肥後守  
政方判

松平薩摩守様

貴報

52 全上

貴札拜見仕外、就御判物之儀、御書付一通五月七日御家



來江相渡ハ段御承知被成、依之被仰下之趣被入御念御事  
奉存ハ、恐惶謹言、

朱力キ  
正徳二年 七月廿二日 松平備前守 正久判

松平薩摩守様 貴報

53 全上

御札令披見ハ、

公方様益御機嫌能被成御座、今度 嚴有院様御遠忌之御  
法事、於東叡山御執行相濟、五月八日 御佛殿 御參詣  
之儀被承之、恐悦旨尤候、依之被差越使者ハ紙面之趣、  
各申談及 上聞ハ、恐々謹言、

朱力キ  
正徳二年 七月廿二日 阿部豊後守 正喬判

松平薩摩守殿

54 全上

御札令披見ハ、

公方様益御機嫌能被成御座、今度 嚴有院様御遠忌御法  
事、於東叡山御執行相濟、五月八日 御佛殿 御參詣之  
儀被承之、恐悦旨尤ハ、紙面之趣令承知ハ、恐々謹言、

朱力キ  
正徳二年 七月廿三日 本多中務大輔 忠良判

松平薩摩守殿

55 吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見ハ、

公方様益御機嫌能被成御座、今度 嚴有院様御遠忌之御  
法事、於東叡山御執行相濟、五月八日 御佛殿 御參詣  
之儀被承之、恐悦之旨尤ハ、紙面之趣令承知ハ、恐々謹  
言、

朱力キ  
正徳二年 七月廿三日 井伊掃部頭 直該判

松平薩摩守殿

56 全上

貴札致拜見ハ、五月七日於松平備前守宅、御判物御文

言之儀付カ、書付渡之相達ハ由、因茲御紙面之趣被入御  
念儀御座ハ、恐惶謹言、

朱力キ  
正徳二年 七月廿三日 大久保加賀守 忠増判

松平薩摩守様

57 吉貫公御譜中

扣寫在江戸家老座

松平薩摩守罷居申外、芝下屋敷、殊之外迫申外付、嶋津淡

路守三千四百九拾坪餘之屋敷差次御座外、故致借地、内々

者一團仕、家來差置申外、去々年琉球使者薩摩守召列外

節及致借地置外付、乍漸人數相納、御用相達申外、淡路

守方より右屋敷之儀者書上外得共、借地仕置外付、此段

申上外、以上、

朱力年 正徳二年 七月

松平薩摩守内

森川理右衛門 (武意)

大久保加賀守

忠増判

秋元但馬守

喬知判

松平薩摩守殿

59 全上

尊札致拜見候、

公方様益御機嫌能被成御座、奉恐悅候、將亦四月十九日

御領知御判物頂戴之被成外付、右爲御禮以嶋津左衛門方

被仰上外旨、依之被入御念被仰下外之趣奉得其意、忝次

第御座外、猶期後音之時外、恐惶謹言、

朱力年 正徳二年 八月三日

安藤右京亮

重行判

松平薩摩守様

參尊報

58 吉貫公御譜中

正文在文庫

爲八朔之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被

獻之外、遂披露外處、一段之御仕合外、恐々謹言、

朱力年 正徳二年 八月三日

阿部豊後守

正喬判

井上河内守

正岑判

60 全上

貴札拜見仕外、

公方様益御機嫌好被成御座奉恐悅外、將又四月十九日爲

御名代、鳥居丹波守殿被召出之、以上意御領知之御判

物被成下之、於御國許御頂戴難有被思召之旨御尤御事御

座外、依之爲御祝嶋津左衛門方被指上ニ付、御紙上之趣  
被入御念御儀奉存外、恐惶謹言、

朱力キ 正徳二年 八月三日 松平備前守 正久判

松平薩摩守様 貴報

61 吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又爲名代鳥  
居丹波守儀 御前ニ被召出、領知之 御判物頂戴難有由、  
紙面之趣承届外、恐々謹言、

朱力キ 正徳二年 八月五日 井伊掃部頭 直該判

松平薩摩守殿

62 貴札致拜見外、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦之旨尤之御事外、將亦四  
月十九日爲名代鳥居丹波守 御前ニ被 召出、以 上意  
領知之 御判物被成下、於國許頂戴難有被思召之由、依  
之爲御禮以嶋津左衛門就被仰達外御紙面之趣承知仕外、

恐惶謹言、

朱力キ 正徳二年 八月五日

(若年寄) 大久保長門守 教重判  
(同) 鳥居伊賀守 忠英判  
(同) 水野監物 忠之判  
(同) 久世大和守 重之判

松平薩摩守様

御報

63 扣寫在江戸家老座

覺

松平薩摩守留守居ニ差置外家老嶋津大藏(父明)、昨四日到着仕  
外、此段申上外、以上、

松平薩摩守内

八月五日 森川理右衛門(武尊)

右之御届阿部豊後守様ニ森川理右衛門致參上申上外處、  
御取次山田傳太夫ニ被聞召届外間、當月之御月番大久  
保加賀守様ニ 御目見之御願書可差出外、大藏着之段豊  
後守承届外間、御用番ニ此旨可申出旨申外通、取次ニ而  
相達可申旨、御差圖有之付、加賀守様ニ理右衛門致參

上、御取次星見作太夫ニ委細申上、御願書差出外處、御受取被成外由被仰聞外、且又大藏殿惣髮之儀申上外得者、被聞召届外得共、何之年惣髮ニ御目見被仰付、御老中様ハ誰様ニ御沙汰被成外由を切紙ニ書付、御献上物書付も明晚同前可差上旨、作太夫ヲ承外故、其通可仕旨申達置候由、理右衛門申出外、

64 覺

嶋津大藏（欠明）丑年 御目見被仰付外節、惣髮ニ御禮申上外、今以惣髮ニ罷有外、此段申上外、以上、

朱力キ  
正徳二年 八月六日

右之書付并献上伺目錄辰八月六日大久保加賀守様ニ森川理右衛門致持參、御用人青木庄右衛門ニ差出外處、加賀守様御見届御受取外由理右衛門申出外、左外ニ同十四日加賀守様より御切紙を以、御留守居ニ明十五日五時過嶋津大藏 御城ニ可差出旨被仰渡候付、理右衛門則加賀守様ニ罷出御受申上置、翌十五日理右衛門案内ニ大藏殿 御城ニ被罷出外處、於御白書院 御目見被仰付、御奏者番高木主水正様御披露、首尾能 御目見相濟、獻

上物先例之通相納外、左外ニ即日御大老様を始、若御年寄様方ニ御禮ニ參上、御太刀・御馬代銀壹枚ツ、被致進上外、

65 全上

貴札拜見仕外、弥御堅達被成御座之旨珍重之御事御座外、然者今度 御判物、路次無恙六月十五日御國元到着、被成御頂戴外由、委細御紙上之趣致承知、於私安堵仕外、隨ニ預御使者御太刀・馬代黄金十兩并御目錄之通被掛御意忝奉存外、恐惶謹言、

朱力キ  
正徳二年 八月六日

鳥居丹波守 忠利判  
松平薩摩守様 貴報

御札令披見外、公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又爲名代鳥居丹波守儀 御前ニ被召出、領知之 御判物頂戴、難有由得其意外、依之爲御禮嶋津左衛門被差越之外、紙面之趣及 上聞外、恐々謹言、

66 全上

大藏久明譜中

正徳二年在江府、監芝華亭、依之八月十五日拜二謁

朱力キ  
正徳二年 八月六日

阿部豊後守  
正喬判

井上河内守  
正岑判

大久保加賀守  
忠増(判ナシ)

秋元但馬守  
喬知判

松平薩摩守殿

67  
全上

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又爲名代鳥居丹波守 御前に被召出之、領知之 御判物頂戴、難有由得其意外、紙面之趣令承知外、恐々謹言、

朱力キ  
正徳二年 八月七日

本多中務大輔  
忠良判

間部越前守  
詮房判

松平薩摩守殿

將軍家、進獻如三先例一矣、

69  
吉貴公御譜中

正文在文庫

貴翰拜見仕外、然者御領國琉球大嶋に去年十一月十七日歸唐船壹艘漂來、碇卸船損外付る、宇天と申所に挽入、修復仕外由、且又唐人壹人病死之者有之、依願土葬取置、其後順風無御座、當三月十六日出帆仕外由、將又琉球國之内大宜味間切に去年十一月廿日福州出歸唐船一艘漂着碇卸外、逢難風船損外故、計羅摩と申嶋に遣之、修補爲仕、當三月十日出帆仕之旨、右兩條從中山王被申越外付、御紙上之趣承知仕外、猶又委細者御家來中より被申聞承届外、恐惶謹言、

朱力キ  
正徳二年 八月廿二日

大岡備前守  
清平判

本マ、駒木根ノ誤ナルヘン  
駒木肥後守  
政方判

松平薩摩守様

貴報

70

吉貴公御譜中

正文在文庫

貴札致拜見、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤之御事存、將又

五月十九日於松平備前守宅、領知目錄相渡付、入御

念御紙面之趣承届候、恐惶謹言、

朱力キ

正徳二年 八月廿三日

大久保加賀守

忠増判

松平薩摩守様

71 吉貴公御譜中

正文在文庫

一 満君様去年御登 城之節考、御用番様・間部越前守様

に御留守居を以御登 城被 仰出、御届御座付、此

節考御留守之儀御座付得共、御届なしに如何之儀と

申談、御留守居を以御用番様・間部様に御届申上置、

且又去年考御下り以後御留守居御使者に、井伊掃部

頭様・御老中様方・間部様・本多様は一通り之御禮被

仰達、翌日御自身御廻り被遊、此節之儀ハ

大守様より之御禮ハ御國元は被聞召上、御使札に御

勤之善御座付、此段ハ左に相記、御目見首尾能相濟

御下り被遊、御届、最前御登 城之御届申上置、御

方様迄御留守居を以申上、

一 此節御登 城付、從井伊様御老中様方・間部様・本

多様に御使札を以御勤有之、右御使者被差上、節、且

御二御所様に三種二荷ツ、御内證方御文を以被獻、且

又 御部屋様方に鮮肴一折ツ、御進上可有御座付、右

(正勝)

之段、堀山城守様・早川佐渡守様・本間豊前守様に得

御差圖付處、其通可然旨被仰下、間、此旨被達 貴聞、

御書・御文可被差越、御使者之儀考、爰元詰御馬廻

之内より相勤、様可申渡、

一 此節考去年御登 城之節相替、諸事御丁寧之御取持、

、

公方様より於御座之間、御能被 仰付、

御臺様より表分ケる御懇之御挨拶共、御座付、御

連署御格狀并御文之内、満君様 御城に被爲 召

御二御所様に首尾好 御目見被遊、御懇之 上意段、

御拜領物有之、御能迄被仰付、段被聞召、難有被 思

召、趣被書加可宜、此旨可申上由、佐渡守様より内

記に被仰聞、間、右之段被達 貴聞、御書相調御案文相

添可被差越、左ハ、右御案文を以飯高様に得御差圖、

相替譯表御座付ハ、於爰元御判紙に御書相認差出

、様、可仕、此節御案文申受差上申、得共、急、

御案文相渡可申儀及難計外故、先此段申上外、

一 御臺様より 太守様は 上意之趣、表御局承知仕外、  
此儀若御局方書付外直ニ申上善御座外、右 上意之  
趣御承知被遊外段、御文之内ニ御受可被仰上儀と奉存  
外、

一 堀様・早川様・本間様は此程段々御苦勞被成外付而ハ  
被成御禮、一種千疋ツ、被進可然と申談外、弥被進事  
外ハ、御書被遣ニハ及申間敷外哉、乍然去年御登  
城之節とハ御取持格別之儀御座外得ハ、御取持之御様  
子委曲被 聞召上、御大慶被思召外趣を以 御書被相  
添ニても可有御座外哉、御書ハ被差扣、御使者被遣儀  
外ハ、御留守居御使者ニ有、右之段被仰進ニ有も可  
有御座哉と於爰元申談外、

一 内記を始、御用人其外御供中は拜領物被仰付外付而者、  
右御三人様迄御禮可被仰遣儀と申談外、何分ニも御堅  
慮次第奉存外、

一 大閣様(基懸)・攝政様(家懸)は若、 太守様より以御書御祝詞被仰  
進可然と申談外、去年御登 城之節ハ、  
大閣様御當地に被遊御座外付、干鯛一箱・御樽代千疋  
御使者を以被進外、 攝政様は之 御書を以被仰進、

72

御祝儀物無御座外、依之此節 御兩公様は若 御書迄  
を被進ニ有及可有御座哉と申談、右之通相しらへ申外、

一 満君様よりハ 大閣様は一種五百疋 攝政様は一種千  
疋御進上有之可然と申談、京都御留守居御使者相勤外  
様ニと此節申越外、

右之段々可被達 貴聞外、以上、

八月廿五日

鳴津内記(公賢)

鳴津大藏(久懸)

比志嶋隼人殿(龜勇)

名越右膳殿(信慶)

全御譜中

正文在文庫

八月廿三日期四時

満君様御登 城被遊

御城ニ有之次第、且又從

御二御所様御拜領物、御城女中より進上物左ニ申上外、  
一 御城御奥御客座に被成御入候處、御老女衆御出被成、  
同御座御上段ニ被成御座外様ニと被仰、御着座被成、  
少之間御休息被成、御老女衆御差圖ニ有別御座に御直

被成り處、御支度等御繕可被成り、追付

御二御所様御對面可被遊由御老女衆被仰、右御座に御  
扣被遊り、

一 公方様與 御上段に被爲成

滿君様御老女衆御奏者なる御下段より

御目見被遊り處

公方様是にと 御直に 上意御座り付、御上段に御上  
り御禮被 仰上り、

公方様より御側近ク御參被成りへと

上意に付、御側に御參被成り得ハ、目出たいと

上意なる、御手自御熨斗 御給被遊り、

(朱)

〔押札〕

表御局 岡村 奥御局 大田 仲津

右五人一列に

公方様江御目見被仰候、今日ハ天氣も能目出たいと 上意御座候、

仲津儀ハ当年初而御目見被仰候、外四人ハ去年戌御目見被仰候

(以上本ヶ条行間朱書)

一 色滑綸子三拾端

一 千鯛一箱

右從

公方様 御目見相濟り、則於御座御目錄御拜領、

一 公方様之御獻上物 御目見前、岩倉殿御取次なる、

御披露御座り、

一 公方様被成御座り節考、御下段に三之御部屋様御詰被  
成、

滿君様江ハ御禮被成り迄なる何共不被仰り、

一 公方様被遊 御立り、三之御部屋様及御供なる御立被

成り、

一 御臺様之御獻上物

御目見前、岩倉殿なる御披露相濟り、

一 御臺様御上段に被爲成、 滿君様御下段より御目見被

成り處に、上にと

御臺様 上意なる、御上段に御上り被成、御禮御申被

成り、

一 御引渡差上、御雜煮御上段なる御寄合、

一 大紋綸子三拾端

一 千鯛一箱

一 昆布一箱

一 御樽一荷

右御目通ならへ置

御臺様御側に御參被成り様こと



上意ニ有、御側近御參被成外處、目出たいたと  
上意ニ有、右之品御目錄御手自御拜領被成外、

(朱)

〔表御局 岡村 奥御局 大田 仲津

右御台様江一人ソ、御目見被仰付、目出たいたと 上意ニ而、御手自御

覽斗を被下候、仲津事ハ初而御目見被仰付候〕

(以上本ヶ条行間朱書)

一 右相濟赤之御食御かさ御膳ニして御上段之御座ニ有御  
寄合被遊、

一 右相濟御能被仰付り由

上意ニ有、何之間と申御座ニ有御座外哉、表御座御庭  
之内ニ舞臺御座外、御座に御簾構有之、

御臺様 満君様御同心ニ有、御簾之内ニ被遊 御入

御臺様と満君様同御座ニ有者御座外得共、被成御座外

御間ニちいさき兩面之金屏風を立、御能御見物被遊外、

御能之内御菓子段ニ差上ル、御能組別紙有之、

(朱)

〔一中老三人・表使一人一列ニ 御臺様御目見被仰付候、右中老・表使御

目見被仰付候儀、何方ニ而も無之候、

八重姫君様・松姫君様御登城之節茂右妹之女中 御目見無之候得共

満君様御上京被遊 近衛様御一所ニ被成御座候付、御取分 御目見被

仰付候間、別而難有奉存、於京都 満君様江身をはめ疎意不奉存、御

奉公相動候様ニとの 思召ニ而、右之通候間、忘却仕間敷旨、御中年

寄衆被仰聞候由〕 (以上本ヶ条、右行間朱書)

一 満君様御側はハ、御老女衆替ルル御詰被成外、豊原殿  
御めいおてう殿と申外も、初め被懸御目、御側に相詰  
被罷居外、

一 御供女中御簾構御座次ニ簾構有之、御能拜見被仰付外、

一 御能三番相濟、御中入奥御上段之御座ニ有、

御臺様 満君様御膳御寄合被遊外、 満君様御膳御向

ハお龜之御方御勤被成外、

但 御向と申外ハ、此方ニ有御介添女中勤之事御座外、

一 御膳之上上り物段々、

一 右相濟御見物所ニ 御入、御能始ル、上り物最前之通、

一 御能二番ニ有相濟、又奥御上段之間ニ 御入被遊

公方様爲御暇乞被爲 成、最前之通

満君様御下段より御禮御申被成外處

公方様是はと 上意ニ付、御上段ニ御上り被成外、御

側はと 上意御座候付、御參被成外得ハ、

一 御料紙硯箱

一 八丈織三拾端

右之御目錄 御手自御給、今日ハ旁目出たいた、此料紙

硯箱者、又三郎にみやこと 上意ニ有、外 上意も無

御座御立被遊外、其節も 三御部屋様御供被成外、

一 御臺様御上段ニ被爲成、満君様最前之通御下段方御

禮御申被成り處、是はと 上意ニある、御上段ニ御上り

被成り得ハ、御側はと 上意御座りある、

一 色縮緬三拾端

一 縞子拾巻

一 色糸三十斤

一 御檜重一組

右御手自御目錄御給被遊り、

一 色羽二重拾疋

一 千鯛一箱

御部屋様より、

一 綸子染物拾端

右御同人様方御内ニある、

一 大紋之縮緬拾反

一 千鯛一箱

右おすめ様方、

一 紗綾染物拾反

右御同人様方御内ニある、

一 大紋羽二重拾反

一 千鯛一箱

左京様より、

一 縮緬染物拾端

右御同人様方御内ニある、

右之通被進り、

一 右相濟

御臺様御側は 満君様御參被成り得ハ、今日若終日祝

相濟目出たいと 上意あり、又三郎ハ當年いくつある

り哉と御尋御座り、當年十貳ニ成りと 満君様被仰上

りへハ、近年中 御目見之願可有り、旁目出たいなと

上意御座り、

一 御單十ヲ

一 御不洗貳十

但地綸子縫金糸入、

一 御香箱十ヲ

但黒塗高時繪内梨子地香箱十ヲ共調様相替り、

右 御臺様より御目錄なしニ御拜領、

一 右相濟、御暇可被遊由御老女衆被仰、御上段御退出被

遊りへハ、下段迄

御臺様御見送、上方道すから景氣も能、江戸ニ替、面

白キ所多り、道すから慰ニ可成り、隨分息才ニ京都は

被着外、左右御待被成り、京都ニあるハ、薩摩殿上り下

り共ニ對面も自由成事り、何事も爰元ニ不替り間、心

遣なく隨分息才ニ候様ニ身持等も被致、一段之儀り、

於京都内大臣殿被爲入り節ハ、物なと被申むつましく

外様ニ御座外へと、御懇御暇乞被遊り、

一 右相濟、最前御入被遊り御客御座に御出被成りへと御

老女衆被仰、御同心被成、御上段ニ御座被成り處、御

後段上り、引次ニ御湯漬差上りり、其節御膳之御向お

かよ様被成り、

一 右相濟御老女衆御客座に御列座ニあり、表御局・岡村・

奥御局・大田・仲津壹人ツ、罷出御目錄頂戴仕、五人

相濟外あり、中老・表使一人ツ、罷出、御目錄頂戴仕り、

被下物奥ニ相記り、

一 右相濟、

一 色羽二重貳拾疋

一 千鯛一箱

一 太守様は、

一 大紋紗綾貳拾反

一 千鯛一箱

御前様は、

一 大紋紗綾貳拾反

信證院様は、

右老御ミヤニ被進り様ニと御座外あり、

御臺様方 滿君様に御拜領、

(本)

〔相札

右御三人様江御ミヤとして御拜領物御座候ニ付而ハ、右之御札御文之

内ニ被書加可被仰上儀器存候〕 (以上本ヶ条行間朱書)

一 塗御重一組

右御前様御留守ニ被成御座、御さひしく可有御座り間、

被進候様ニと御座外あり

御臺様方 滿君様に御拜領、

一 御提重一組

右ハ今日御城ニあり可被進と被思召り得共、最早暮ニ及

候り御内ニ御持せ被成り様ニと御座外あり、從 御臺

様滿君様に御拜領、

右之品々御拜領、御取次海津殿、

一 右相濟、御老女衆に段々之御禮被仰上、

御城御退出被遊り、

一 御老女衆・御女中方進上物并御供女中は被下物、左ニ

相記り、

一千鯛一箱

一御樽代五百疋

豊原殿

一金子五百疋ツ、

常盤井殿

三室殿

おまち殿

高瀬殿

川鳴殿

岩くら殿

おかよ様

お龜殿

おふき殿

一金子三百疋ツ、

海洋殿

浦尾殿

高野殿

山路殿

たきつ殿

さ川殿

きよた殿

村井殿

さ山殿

川井殿

青井殿

岩城殿

みさか殿

音羽殿

菊川殿

一金子三百疋ツ、

三御部屋様御年寄

ゆら野殿

ひさ野殿

幾野殿

中津殿

駒井殿

かす野殿

いさ野殿

野村殿

梅田殿

江嶋殿

福井殿

右之通 満君様に進上御座り、

一 御拾一ツ、

一 御單一ツ、

一 銀五枚ツ、

表御局

岡村

奥御局

大田

清瀬

一 御單一

一 晒 一疋

一 金子 千疋

中津

一 ちりめん三卷ツ、

内糺二卷ツ、

中老

おいそ

おゆり

おそわ

表使

川野

一 晒貳疋ツ、

御末頭

一人

中居

一人

一 金子三百疋

表小便女

一人

一 金子貳百疋ツ、

六尺半下

八人

右之通拜領被仰付り、末頭を六尺半下迄ハ、一紙目錄

こゝ、川野に表使衆を被相渡り、

右之通段々去年

御登 城之節ニ相替、於 御前ハ

御臺様御同座こゝの御勤こゝ御座り故、

御前之御様子御供之女中見上ケ申儀こゝ無之候付、一

切存不申り、満君様被遊御覺り 御意を岡村に被

仰出、承知仕り次第野村源兵衛を書付差出申り間、寫

差上申り、御城こゝり御様子、御前より被 仰出り

付、御登 城被遊御首尾能御下り被遊り、御左右早速

申上り儀延引仕り、以上、

八月廿六日

嶋津内記

比志嶋隼人殿

名越右膳殿

鳴津大藏

御登 城被遊り付る被成御禮、昨廿五日御局御使ニ、御献上物御座外次第、左ニ相記外、

一 公方様江之御口上海津殿ニ申上外處、三室殿御出被成御禮之通申上、御献上物致披露外、御満悦ニ被思召外、宜申聞せり得と

上意御座外、  
一 満君様去年方御成人被遊、萬端御りはつ之御仕廻被成外とて

公方様昨日も今日も 上意御座外由被仰外、

一 御臺様江之御口上養海津殿ニ申上外處、早速達 上聞、おおよ様御出被成、此節之御禮被 仰上、殊御献上物被成 御満悦之御事御座外、 満君様御成人ニ御見かへ被遊外、萬事おとなしき御仕廻ニ、御立跡方毎度

御臺様御ほめ被成、殊之外御怡ニ御座外、此通罷歸委申上外様ことおおよ様被仰外、

一 御局目出度御使相勤外とて、縮緬三卷御局拜領被仰外、

御前様より之御禮、自分之御禮共ニ御局直ニ相勤外様こと、おおよ様御差圖ニ、御禮相濟申外、  
右之通御局罷歸申聞外由、野村源兵衛申出外、以上、

八月廿六日

正文在文庫

御能組

加 茂 〔松前〕 友之丞 平左衛門 安兵衛馬 与八衛門

末ひろかり 文在衛門

八 嶋 〔中条〕 丹波守 半九郎 忠右衛門 勝次郎

ねき山ふし 長兵衛

羽 衣 越前守 吉左衛門 信濃守 左平治

御中入

石 橋 〔藤元〕 筑後守 六十郎 新七郎 三郎次郎

橋辨慶 越前守 藤九郎 吉兵衛

八月廿三日

一 御時服五

内 單物二

帷子三

一 御檜重 一組

鳴津内記

一 御時服三宛

内 單物壹ツ、

帷子二ツ、

三雲新兵衛(定 徳)

高橋民部(備 忠)

一同二ツ、

内 單物壹ツ、

帷子壹ツ、

森川理右衛門

野村源兵衛

野元玄固

一 晒貳疋宛

御輿廻  
六人

一 銀五拾枚

一 檜重一組

惣御供相中

一 行器二荷

六尺中

右之通拜領被仰付々、以上、

八月

一 綿百把敷斗包添

但五拾把ツ、二臺受

一 御樽二荷

一 千鯛一箱

一 鯛一箱

一 昆布一箱

一 御目錄受臺二

公方様江 満君様、

一 麻御上下五拾具半長

但桐箱二三入、

一金紋紗拾端

但箱入、

一 檜御重一組

公方様に 満君様、

一 色綸子貳拾端敷斗包漆

一 御帶三拾筋右同

但拾五筋ツ、二臺受、

一 御鼻紙袋百右同

但桐白木箱二二入、一臺三受、

御臺様に 満君様、

一 羽二重貳拾疋紅敷斗包漆白

但臺壹三受、

一 御樽一荷

一 千鯛一箱

一 昆布一箱

但折御目錄受二、

御臺様に 満君様、

一 御樽一荷

一 千鯛一荷

一 昆布一箱

但折御目錄受一、

公方様に 御前様、

一 御樽一荷

一 千鯛一箱

一 昆布一箱

但右同斷、

御臺様に 御前様、

一 鮮肴一折宛

御三方

御部屋様に 御前様、

一 鮮肴一折宛

御二御所様に 信證院様、  
(續貴御室)

一 縮緬拾卷宛

但白五反紅五反、

一 御帶貳拾筋宛敷斗包漆

一 御樽一荷宛

一 千鯛一箱宛

御三方

御部屋様に

一 色羽二重七疋受敷敷斗包漆

一 銀子五枚付紙有

豊原様、



(朱) 「押札 鮮御看一折

右御二方様江首尾能被遊御目見候ニ付、豊原様江 満君様より御目録  
相添被進候」  
(以上本ヶ条行間朱書)

一色羽二重七疋宛 右同

一銀子三枚宛 右同

常盤井様

三室様

高瀬様

川鳴様

民部様

岩倉様

おかよ様

おまち様

おかめ様

おふき様

(朱) 「押札 羽二重三疋、おてう様」

一色羽二重五疋宛 受臺熨斗包添

一銀子貳枚宛 付紙有

海津様

浦尾様

中老御年寄衆九人

一色羽二重三疋宛 受臺熨斗包添

一銀子貳枚宛 付紙有

御中筋衆拾貳人

御小姓衆三人

御表使衆五人

一縮縮貳端宛 受臺熨斗包添

御祐筆衆七人

御次衆拾貳人

御呉服間頭衆貳人

一帯三筋宛 右同

御呉服間衆拾五人

一晒貳疋宛 右同

比丘尼衆三人

乙せ衆三人

一綿三把 受臺四

御廣座敷衆八人

御三之間衆貳拾五人

御末衆三人

火之御番衆六人

一綿二把宛受臺巻

御中居衆七人

一晒壹疋宛受臺三

御茶之間衆三人

御使番衆十人

一綿一把宛臺一

御半下貳拾九人

一色羽二重五疋ツ、受臺九

御部屋様御方

御年寄衆九人

一銀子五拾枚付紙有

但臺一銀子二箱二入

御女中惣中

一羽二重拾疋受臺のし包添

但箱入

間部越前守様

右御内々、御奥より御屈、

一紗綾五卷宛受臺熨斗包添

松前伊豆守様(嘉正)

松平主計頭様(近徳)

大嶋肥前守様(義也)

久貝因播守様(正志)

大久保淡路守様(教通)

三枝攝津守様(守想)

一銀子拾枚宛付紙有 受臺のし包添

堀山城守様(正勝)

早川佐渡守様(重好)

本間豊前守様(季孝)

一銀子五枚宛右同

富永喜右衛門様(景興)

小川左衛門様(義徳)

御廣敷御番頭衆九人

一紗綾三卷宛受臺のし包添

御留守居御番衆五人

一銀子五枚宛付紙兼有

一千鯛一箱宛

御部屋様御方御用人衆

諏方庄兵衛様(正孝)

青柳勘四郎様(孝也)

安藤助之進様(定知)

一 銀子三枚宛右向

玉田 忠四郎様(盛 勝)

川嶋 八右衛門様(重 四)

久保田 源右衛門様(政 孝)

御賄頭衆三人

御臺所頭衆三人

御侍衆十人

一 銀子貳枚宛右向

御用部屋

書役衆四人

一 金子三百疋宛右向

火之番組頭衆四人

一 銀子貳百枚打付箱ニ入のし添

御ノ戸之外惣中

但仕丁六尺迄

一 銀子三枚宛

進上御番頭衆四人

一 金子三百疋宛

右一番三拾貳人

一 金子貳百疋宛

右下番衆廿八人

一 青銅百疋宛

六尺六人

一 色羽二重五疋宛

御女中衆貳人

一 羽二重三疋

一 銀子貳枚

御小姓衆壹人

右二行八

(徳川家継) 銅松様御方御女中ニ由御座外處ニ入込被罷居外間、右

之通被遣度旨、堀様・早川様・本間様より被仰聞外付

被遣外、

以上

朱力キ 正徳二年 八月

77

正文在文庫

一筆申達外、

滿君様今月廿二日御登

城之筈被 仰出外段、御家老中迄先便ニ申上置外、然

處御日限被差延、去ル廿三日四時 御城に被爲 昇、

公方様 御臺様は 御目見 御懇之上意、御丁寧成  
御饗應、御能を被仰付、其上 御二御所様より品々御  
拜領物御頂戴被遊、段々重キ御勤御座り處、首尾能御  
仕廻、暮六半時 御下、御機嫌にも御別條不被遊御座、  
無殘所御仕合、 御前様ニ表別る御満悦被遊、末々迄  
恐悅至極奉存り、於 御前御勤之次第并御拜領物別紙  
横折帳ニ相記り、

一 御供嶋津内記・三雲新兵衛・高橋民部・野村源兵衛・  
森川理右衛門・野元玄固事御玄喚迄御供仕、直ニ掘様・  
早川様・本間様御用部屋に罷在り處、右御三人様御出  
會被成、今日者

満君様被爲入り付、御供被致、苦勞被 思召り、 御前  
之儀者成程御首尾宜有御座り間、左様可承置旨被仰聞  
り、左り御たはこ被出之、御雑煮・御吸物・御肴・  
御銚子三篇・御菓子・御薄茶被下之、其以後二汁七菜  
之御料理附、後段迄被下之、御菓子・御薄茶被下り、  
左り少間有之、早川様御出御廣敷に御用之由被仰下  
り付、右六人罷出り處、掘様・早川様・本間様御列座  
二、 從

御臺様御時服拜領被 仰付り通、山城守様被仰渡、御

目録ハ佐渡守様より銘々被成御渡頂戴仕、別る難有仕  
合奉存り由、内記より都る之御禮御相應ニ御三人様に  
申上、最前之御用部屋に罷在り内、右御三人様御替々  
御見廻被成、段々御丁寧之御挨拶共御座り、御菓子・  
御しめ物・うとん・御吸物等段々御馳走被下之り、  
一 御用部屋に罷居り處、早川様御出被成、從

御臺様 上意御座り、今日者

満君御方被爲 入、久々ニ御逢被成、御満足ニ被思召  
上り、私共御供仕太儀被 思召上り、相詰罷在徒然ニ  
可有之り、依之御檜重一組内記に拜領被 仰付り旨被  
仰、御用人を始御供中は右同前之 上意なる御檜重一  
組拜領被仰付り付、則佐渡守様迄是又御禮内記申上り、  
一 御供女中其外 御駕籠廻御供惣中は表段々拜領物被仰  
付、末々迄被下物有之、段々御懇ニ被仰付、難有仕合  
御座り、御献上物并御女中様方御役人様方に被遺物、  
御供中拜領物之品、且又御登 城御行列別紙書付差越  
り、御献上物も品々并御供廻大勢なる御座り處、何之  
故障者無之、諸事首尾好相濟、無殘所御仕合頂上之儀  
奉存り、

一 御二御所様に被成御禮

吉貴公御譜中

扣寓在家老座

琉球中山王より申越り者、琉球之儀大明洪武代より致進貢、寛文中に接貢船差渡り、然者持渡り銀高御免之員數差渡り處、新寶銀大清國に相改り得者、位惡敷、只今之通に者進貢使差渡り儀不罷成り、進貢無懈怠相勤申り處、新銀に者大分致不足り故、此已後大清國之勤難成、古來之例式相欠申り儀、中山王何共迷惑仕り通申越り、進貢及懈怠りハ、此以後何様之儀敷可有之と氣遣千萬之事存り、琉球に大清國に持渡り銀高之分、元錄

御前様 滿君様より昨廿五日御禮之儀御差圖御座り、御檜重一組ツ、女中御使に御献上被成り、右之次第別紙横折帳に相記り、右之段、太守様 おすま様に可被申上り、恐惶謹言、

八月廿六日

嶋津内記

久實判

嶋津大藏

久明判

比志嶋隼人殿

名越右膳殿

吉貴公御譜中

正文在文庫

朱カキ  
正徳二年 八月廿八日 御名

銀に吹直被仰付り様奉願り、渡唐銀之員數進貢船一ヶ年者八百四貫目、接貢船一ヶ年者四百貳貫目隔年持渡り、是者貞享年中被仰渡り員數に御座り、以上、

前より浦々高札相建、公儀之船者不及申、諸廻船共猥成儀無之様に被仰付り處、遭難風り節々、所之ものとも船之助にハ不相成、却る破船り様にいたし懸ケ、荷物を刎させ、或者上乘船頭と申合、不法之儀共有之様に相聞え不届に、御料者御代官、私領者地頭より常々遂吟味、毛頭不埒不仕様に急度可被申付り、若此上不埒之儀於有之者、後日相聞えり共、其ものハいふに及ず、所之者迄可被行重科、其上其所之御代官・地頭迄可爲越度事、

一御城米船近年破船多りに付、今般諸事相改、別る大切可仕旨申渡、船足之儀も深く不入様に大坂船者大坂奉行、其外國之船ハ其所支配之御代官より船足定之所に極印を打、船頭・水主之人數を不減少様に急度申付

令運漕管ニハ、依之湊ニ寄リ船之分ハ、船頭・水主人數并船足極印之通無相違哉、送狀に引合急度相改、帳面ニ記置、上乘船頭印形致させ、右書物其所ニ留置、御料者御代官、私領者地頭ニ差出之、御代官并地頭より御勘定奉行迄可被差出リ、且又極印より船足深ク入リ船有之ハ者、積リ俵數委細に改之、御城米之外船頭私之運賃を取、他之米穀或者商賣之荷物等積入リ歟、又者水主人數定之内令減少ハ者、私に積入リ荷物ハ其所ニ取揚置、水主人數不足之分ハ其所ニ有慥成水主を雇せ爲致出船、其上にて右之譯早速御勘定奉行に可訴之事、

一破船有之節、浦々之もの出會、荷物・船具等取揚リ刻盜取リ歟、又者不届之仕方於有之者、船頭より不隱置、有躰に早速可訴之事、

右之條々急度可相守、若違犯之輩於有之者、詮議之上可被行罪科、不吟味之子細もハ、其所支配之御代官又ハ地頭迄可爲越度者也、

辰八月

(表紙)

追 舊記雜錄 卷四十七	吉貴公 自正徳二年九月 至同三年三月
-------------------	--------------------------

吉貴公御譜中

正文在(霧降神宮別當寺)華林寺

一 義久公御寄進之寶刀長貳尺貳寸五分一振

一 義弘公御寄進之寶刀長三尺一振

右寶刀二振 兩公御寄進有之了、御志願之旨趣雖被記置、先是御寄進狀權祝融之災、失矣、今也不記、則御寄進之事亦遂至傳失、故及後年爲無傳失可副一書旨依御下知如件、

正徳二年壬辰九月六日

(寺社奉行)伊集院用之助

久富判

川上(同)久馬  
久東判

(北諸國郡高原)  
花林寺

賴尙法印御房

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様御機嫌之御様躰被相伺之外、益御安全御事外間、可御心易外、隨而御看一種被獻之外、紙面趣令承知外、恐々謹言、

朱九斗

正徳二年九月七日

井伊掃部頭

直該判

松平薩摩守殿

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様御機嫌之御様躰被相伺之外、益御安全之御事外間、可御心易外、隨而串蛇一箱被獻之候、各申談遂披露外處、一段之御仕合外、恐々謹言、

朱力年

正徳二年 九月十一日

松平薩摩守殿

井上河内守

正岑判

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様御機嫌之御様舛被相同之外、益御勇健之御儀外間、可御心安外、隨而御看一種被獻之外、紙面之趣承届外、恐く謹言、

朱力年

正徳二年 九月十一日

本多中務大輔

忠良判

間部越前守

註房判

松平薩摩守殿

84

吉貴公御譜中

(徳川綱重) 清揚院様御位牌不斷光院に御遷座之次第、

御用係

種子嶋彈正

嶋津帶刀

85

正文在文庫

吉貴公思召之旨有之、

清揚院様御位牌不斷光院被遊

御安置外付而、正徳二年辰九月十四日御位牌不斷光院

御牌堂に御遷座御作法之次第、

但御位牌面之御法名者、妙法院法親王御染筆也、依

之願王院權僧正方嶋津帶刀(仲休)之狀添置之、

一十四日末明 御遷座開眼、續而御供養之御法事、

一四ツ時 御佛詣、先書院に被爲 入、追而中之中門外

迄住持御案内に罷出外節、御牌堂に御進、御燒香御拜

禮、又書院に被爲 入外、

但御拜禮之節者住持御内亭に着座仕罷有外、

一御獻進之白銀前に御牌堂に備置外、

一又三郎様御名代嶋津周防殿支度長袴、 太守様御拜席

より半席下ニお拜禮、

但御名代拜禮之節迄者住持最前之席に罷有外、

一御獻進之白銀前に御牌堂に備置外、

一不斷光院住持 御目見被 仰付外、披露御用人、

一右過る 御歸館、

但此節者住持御法事ニ懸り罷有外故、被爲 入外節



(の1)

及又者御歸館之節及不及罷出外、追の 御佛詣之  
節者門外迄可罷出外、

一 右過の三部經讀誦、

一 不斷光院に銀三枚、長老之僧に銀壹枚ツ、平僧へ青

銅百疋ツ、御布施ニ被下外、

但 御法事相濟外以後、寺社奉行方申傳外、平僧に者

相中ニ被下外、

一 嶋津帶刀・種子嶋彈正・比志嶋隼人、寺社奉行并向井

(仲休)  
(久基)  
(龜房)  
市之丞相詰外、

一 御先番平日 御寺參之通、

一 御供折目ニ福昌寺に 御佛詣之節之通、

一 御獻進之銀子者 太守様より五枚、 又三郎様より三

枚、請臺白木付紙、

一 御布施、不斷光院に者御目錄、長老以下者一紙ニ覺書

ニ被下之、

一 不斷光院に 清揚院様御牌 御遷座被遊外故、門外迄

御乗物被爲 召外、

以上

御牌堂棟札左之通

天下和順 大願主薩隅日三州太守兼琉球國主左近權中將行從四位上源吉貴朝臣 奉行

島津帶刀藤原仲休

種子嶋彈正平久基

上棟奉造建 清揚院殿贈正一位大相國公牌堂薩州養泉山正徳二年歲次壬辰九月日

監督 向井市之丞惟宗友貞

判營 大山平右衛門源行好

日月清明 遷座供養導師不斷光院十一世信蓮社樂譽上人詮阿大和尚位觀烟

棟梁 野崎喜左衛門藤原兼重

一御位牌面之御法名 妙法院法親王御染筆之正筆表渡置  
外、

一御佛餉料等之儀者御勝手方に定置外故、此帳ニ不記、

以上

86

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又參勤時分

之儀以使者被相伺之外、及 上聞外處、來年六月中可致

參府由被 仰出外條、可被存其趣外、恐々謹言、

朱力年

正徳二年

九月十五日

阿部豊後守

正喬判

井上河内守

正岑判

大久保加賀守

忠増判

秋元但馬守

喬知判

松平薩摩守殿

87

吉貴公御譜中

正文在文庫

平等王院御再興ニ付、頼朝公 御位牌御安置被遊度

太守吉貴公被 思召候處、

頼朝公御法名分明不相知外間、 御位牌面何様被記可宜

哉、平松中納言時方卿に御考被成被遣度頼被 思召旨、

嶋津帶刀を以、寶永五年子五月 太守様江戸に爲御參勤

伏見に御着之節被仰遣外處、翌年七月爲御下國伏見に御

着被遊外處、同九日時方卿雜掌奥村助之進御使者ニ被遣

外序外ニ

頼朝卿御位牌面之儀被相考外由ニ、公卿補任建久十年

と被書始、掃部頭者

頼朝卿乳人と申外、石塔ニ書付ハ無之と書納外、古書付

之寫杉原貳枚折紙ニ時方卿御自筆ニ被遊、且又別紙折

紙ニ

一 頼朝卿之事と被書始、七月九日之御日付ニ帶刀を

御宛所ニ被成外、御自筆之一紙助之進に御持せ被遣外付、

太守様備 御覽外處、助之進迄重可申遣旨 御意外ニ

付、書通之序外ニ伏見より助之進に申遣外書狀之扣左記、

(の1)

追啓、一昨日從

(平松時方)

黃門様被下置外御書付 薩摩守に爲見

(02)

申外處、御用々多可有御座内 頼朝卿位牌面之儀、御丁  
寧御考被下、不大形忝奉存外、右寺之儀ハ、薩摩守元祖  
忠久より、父頼朝卿神靈を花尾權現と崇外節より號平等  
王院、頼朝卿より讓給外弘法大師一刀三禮之愛染明王を  
本堂之致本尊ニ取建置外寺御座外を、近年最前よりハ様  
子能仕外、此節再興仕と申譯ニる者無御座外、位牌之儀  
者弥 黃門様御考被下外通ニ此度位牌面ニ記、右平等王  
院ニ安置可仕と存外、乍然弥位牌安置仕外ハ、重る可申  
上旨、一昨日之御紙上ニ爲被仰下御事外間、此旨貴様迄  
可申上由、薩摩守申付外、且又宜御申頼存外、以上、

七月十一日

鳴津帶刀

奥村助之進様

右ニ付御國許より又々奥村助之進江申越外書狀之扣左  
ニ記

一筆致啓達外、 黃門様(平松時春)・少納言様益御機嫌能被成御座

外由、追々薩摩守致承知滿悅被仕事御座外、此方弥無別  
條被罷在外、然者先頃於伏見 頼朝卿御牌面之儀、委細  
從 黃門様御書付被下外、此儀

攝政様に被得御内意外處、御法名不相知上、位牌立於申

(03)

者如斯々可有之哉、猶靜可有御思案旨外、寺院建立之後  
位牌立可申以前今一度可申上外、重る可被同御命旨御書  
載被遊被下外付、右寺ハ以前有之外、近年再興仕外付、  
今迄位牌無之儀を近年吟味仕事御座外、右御紙上其節薩  
摩守ニ爲見申外處、弥御内意之通位牌面ニ記可申外、乍  
然今一往可申上旨被仰下事外間、右之件可申上由申付外  
付外、其段先頃伏見外貴様迄得御意外、弥先比被仰下外  
通、位牌面ニ記申ニる可有御座外、然共段々被爲入御念  
被仰下事外間、此旨又々得御意外様ニと薩摩守申付外、  
當分ハ取分御用多可有御座と恐察仕外得共、御序を以右  
之趣重る御伺被成、御意之旨乍御六ヶ敷被仰知被下度頼  
存外、恐惶謹言、

九月廿五日

鳴津帶刀

奥村助之進様

一右之通又々平松様雜掌奥村助之進迄申越外處、時方卿  
御自筆ニる家來奥村助之進方紙面之趣と被書始、十月  
十八日之御日付ニる帶刀宛所ニ被成外一紙被下置外ニ  
付、則 太守様達 貴聞置外處、弥其通 御位牌面ニ  
可記旨 御意外故、御勝手方申達外事、

一右ニ記外平松時方卿より七月九日之御日付ニ、嶋津帶刀に御宛所之横折御書付一通、

一公卿補任建久十年と被書出、奥ニ石塔書付老無之と被書留候横折御書付一通、是ハ横折貳枚也、

一十月十八日之御日付ニ、時方卿より帶刀に被下り横折御書付一通、

右之通 黄門様御書付并御狀差出外間、御記録所に被相渡置外、以上、

寅閏八月廿日

嶋津帶刀

佐多豊前殿

(の4) (朱)

「右墨書之通被 仰出置外得共、思召之旨有之外間、頼朝公御位牌御安置之儀被相止外由、名越右膳御取次ニ、正徳元卯十一月被仰出外故、後年紛敷爲無之、追而書付置外、以上、

正徳二年辰九月十六日

嶋津帶刀

嶋津備前殿(久遠)

88

吉貴公御譜中

正文在大乘院

厚智村之事、被對

花尾權現神靈百姓共村役等之儀、此節より谷山之内宇宿村同然被仰付候、至後年可被存其趣者也、仍如件、

正徳二年辰九月十八日

肝付主殿判

種子嶋彈正判

嶋津帶刀判

嶋津將監判

大乘院

存包紙

大乘院

89

吉貴公御譜中

同年九月十八日行装已成、爲婚姻ニ滿君發江都芝邸赴京師、家老島津内記久重、用人堀甚左衛門興昌・谷山角

太夫忠利、用人並高橋民部種長、側目附鎌田六郎大夫政

置、納戸奉行山口五太夫利信等此外多可慮從、此夕止宿

于川崎驛、時

將軍家宣公之

御臺君後稱天遣、上使早川佐渡守、賜于

鮮鯛一折・檜重一組於滿君、到箱根驛亦以貴价齎

90 吉貴公御譜中

正文在文庫

此度諸國浦々添高札御案文被 仰出外、只今迄高札有之  
 所左右之御文言札ニ認、其際ニ可被相建外、左外ハ、何  
 方ニ建外段、書付銘々ニ兩人方ハ可被差出外、高札間遠  
 之所表此御書付を以、急度相守外様ニ入念可被申付外、  
 則御案文寫遣之外、以上、

九月

（大目附）由松  
 横田備中守  
 （向）（趣）香  
 大久保大隅守

91 寫正文在文庫

追而浦々順達有之、留り右兩人之内ニ可被相返外、  
 以上、

此度浦々添高札御案文被 仰出外、只今迄高札有之所  
 左右之御文言札ニ認、其際ニ可相建、左外ハ、何方ニ  
 建外段、書付を以可注進、高札無之所表此御書付を以、  
 急度相守外様御料者御代官、私領者其所之領主・地頭  
 より入念可被申付外、

一 最前方浦々に相建外高札無之國々も外ハ、其段可被  
 申聞外、湊其外相建可然場所も外ハ、以書付繪圖追  
 可被相同外、

一 前々高札に有之通、沖にて刎荷いたし、又者破船之  
 儀其所之浦手形を以致吟味、荷主委承届事ニ外間、船  
 頭少々不實之仕形有之外ハ、其所ニ留置、其向々可  
 申通、不吟味之儀ニ手形於差出外可爲越度外、  
 一 添御高札案文則相廻シ外間、文字かな等迄無相違様寫  
 留、國切に一帳請取、認役人名之下ニ致印形、横田備  
 中守・大久保大隅守方ハ一帳宛早速可差差出外、以上、  
 （符之）

九月

正徳貳辰  
 （大久保忠香）  
 大隅守印  
 （横田）由松  
 横田備中守印

薩摩國

大隅國

日向國

浦々中

但御料私領共

吉貴公御譜中

扣寫在家老座

今度薩摩守願之儀被 仰出りに就て御尋條々

一 琉球國・大清國に進貢之料に、薩州より相渡し候銀子之事、定る薩摩守方之金子を以兩替仕、琉球に差渡りにて可有之候、琉球よりハ薩摩守方は右之銀の代りに如何様之儀有之歟の事、

一 琉球より大清國に銀子相渡り子細者、銀子を以て大清天子に貢物に仕り歟、又右之銀子之内貢物にも仕、其外にてハ調物等をも仕候歟の事、

一 大清天子より琉球に賜り物共如何り歟、又琉球より出り物等大清にて買求候物有之り歟の事、

一 琉球より大清國に使を遣し候様子次第、又調物等をも仕り候様子次第等、皆々定法可有之候、如何り歟の事、

一 大清國より琉球に使を賜り候様子次第、如何り歟の事、

附 琉球に相通し候國々有之歟之事、

右之趣委細申述べたき事も可有之候得共、琉球の事者古來より吳朝に及我朝に及兩方に相通り外國之事にり、又我國金銀之事ハ萬代迄之實に候處、吳國に相渡されり事ハ、後代のために大切之事にり、彼是以て聞召置るへき事共に候間、委細に書付可被差上り、以上、

宋カキ  
正徳二年  
十月

全御譜中

正文在惠燈院

條々

一 福昌寺之儀 御代々御尊敬各別之御寺、於一宗者近國之錄所にり故、從他國を鑑に可致事り處、近年大衆中勤疎略に成行り由、其聞得候、御領國中之僧侶宗門之法式不亂、道儀不衰様を可致接得旨當御代初被 仰出趣有之り處、今以不相守其旨者有之由、不可然儀り事、

一 惠燈院事、福昌寺後見職に被仰付置、今度三塔頭之内を被除、三ヶ寺之並に被仰付り條、第一自身如法に相

勤、於一派中存寄之儀者方丈に及不差置申達、山中者不及申、門末中に可加教戒、且又巡堂焼香を始、山主

雖爲職分無據隙入、他行、病氣之節者、相替可勤之事、

一 一宗之寺院住替之節者、住山僧侶之内戒禰を以衆評之上住持職申付由外、縱戒禰學文共ニ雖爲相應、兼而之

行儀不動、或我慢、或不和合有之、方丈之不用下知、

氣儘之於于僧侶者可除衆評事、

附 修學勤行拔群之於僧者、戒禰之不及沙汰可載衆評事、

一 不依何事、衆評可有之節者評席に致着座、衆議一決之趣致承達置外上、猶遂吟味方丈に可相達事、

一 舊式年中之行事不可有怠慢外、平日之勤行并掃除日等、

山主を始大衆中嚴密ニ相勤外様可致催促事、

右之趣を以三塔頭に申談、諸事廉直ニ沙汰有之、方丈

を令守護、法式興隆之心懸後見之可爲職分外條、可存

此旨者也、

正徳二辰年十月二日

(肝付兼柳)

主殿

(種子島久基)

彈正

(島津仲休)

帶刀

惠燈院

(島津久当) 將監

94

全御譜中

正文在月香院

條々寫

一 福昌寺之儀 御代々御尊敬各別之御寺、殊近國之錄所外故、於一宗者從他國及鑑可致事外處、近年大衆中勤疎略ニ成行不可然儀外事、

一 御領國中之僧侶宗門之法式不亂、道儀不衰様可致接得旨、當御代初被 仰出趣及有之外處、今以不相守其旨者及有之由、其聞得外、三塔頭之儀者於寺中及御取分有之事外間、專自身如法相勤、福昌寺山中者不及申、一派中及隨分可加教戒事、

一 寺院住替之節者住山僧侶之内戒禰を以衆評之上、住持職申付由外、縱戒禰學文雖爲相應、兼而之行跡不動、或我慢、或不和合有之、方丈之不用下知於于氣儘之僧侶可除衆評事、

附 修學勤行拔群之於僧侶者、戒禰之不及沙汰可載衆評事、

一不依何事衆評可有之節者、評席に致着座存寄之儀不差

置申出、衆議一決之上猶遂吟味、方丈に可相違事、

一舊式年中之行事不可有怠慢、平日之勤行并掃除日等  
遲參不參無之、嚴密相勤、可致催促事、

一巡堂燒香を始、其外山主雖爲職分、無據隙入、他行、  
病氣之節者、惠燈院事可相勤之、若惠燈院故障於有之

者三塔頭其外にても出世之僧に山主見合を以可被申付  
外間、無違背可勤之事、

一惠燈院事、今度福昌寺後見寺被仰付、寺格をも被相改  
外條、三塔頭之儀令一致、存寄儀者互に申談廉直

ニ沙汰有之、方丈を致守護、偏法式與隆之心懸可爲專  
要事、

右條々可相守此旨者也、

正徳二辰十月二日

主殿

彈正

帶刀

將監

月香院

95 全御譜中

正文在福昌寺

玉龍山福昌禪寺

石屋大禪師首創之道場而三州之魁刹也、夫惟覺照山東谷  
和尚其爲德踏先哲獨歩、今時大機妙用壓倒群英主盟之德  
具矣、故請早飛錫來植法幢紹繼玉龍之高蹤、是豈不國家  
之洪福士黎之大幸乎哉、至祝至祝、

正徳二年下辰十月六日

中將吉貴

有包紙

請疏

96 全御譜中

正文在文庫

返々御禮のとをり申あけまいらせ外御事ニ御さ  
外、めてたくかしく、

九月四日の御ふみ下され、まつく

兩御所様御機嫌よく御さなされ、めてたく思しめし外由、  
御尤にそんしまいらせ外、さては

みつ君さま此せつ御上京につき、



御臺様より近日御登城のやうこと 仰出されり御事きか  
せられり、忝思し召りよし、それにつき御禮仰上られた  
く、文のやう則ひろういたしまいらせり御事に御さり、  
めてたくかしく、

朱カキ  
正徳二年 十月六日

とよ原

カ

ときハる

みむろ

松平さつまの守さま  
御返事  
人々御中

たかせ

川しま

97 全上

能心得まいらせりて申せとの御事ニ御さり、なを  
く御ねんいらせられり御事ニそんしまいらせり、  
めてたくかしく、

九月四日の御ふみ下され、まつく

兩御所様御機嫌よく御さなされり御事、めてたく思しめ  
し由、御尤にそんしまいらせり、さては、

みつ君さま此せつ御上京ニ付 御臺様より近日御登城の  
やうにと 仰出されり御事きかせられ、かたしけなく思

召り由、それニ付御ふみ下され、則申あけまいらせりへ  
は御まんそくにおほしめしり、めてたくかしく、

朱カキ  
正徳二年 十月六日

カ

鳴津將けん殿

いは倉

同 帶 刀殿  
御返事

かよ

98 吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見り、去々年琉球中山王兩使差渡之處、首尾好  
御禮申上、從

公方様 御臺様品々被下之、其上兩使并從者等迄拜領物  
被 仰付、重疊難有旨得其意り、依之爲御禮其國迄以上  
間親方目錄之通獻上付る、以使者被差越之、遂披露返翰  
遣り條、可被相達り、恐々謹言、

朱カキ  
正徳二年 十月七日

阿部豊後守  
正喬判

井上河内守  
正岑(判ナシ)

大久保加賀守  
忠増判

秋元但馬守  
喬知判

正文在文庫

松平薩摩守殿

御札令披見<sub>レ</sub>、去々年琉球中山王兩使差渡之處、首尾能御禮申上、從

公方様 御臺様品々被下之、其上兩使并從者等迄拜領物被 仰付、重疊難有旨得其意<sub>レ</sub>、依之爲御禮其國迄以上間親方目錄之通獻上之付<sub>ル</sub>、以使者被差越之紙面之趣令承知<sub>レ</sub>、返簡遣<sub>レ</sub>條、可被達<sub>レ</sub>、恐々謹言、

朱力キ  
正徳二年 十月七日

土屋相摸守

政直判

松平薩摩守殿

御札令披見<sub>レ</sub>、去々年琉球中山王兩使差渡之處、首尾能御禮申上、從

公方様 御臺様品々被下之、其上兩使并從者等迄拜領物被 仰付之、重疊難有之旨得其意<sub>レ</sub>、依之爲御禮其國迄以上間親方目錄之通獻上之付<sub>ル</sub>、以使者被差越之紙面之趣令承知<sub>レ</sub>、返簡遣<sub>レ</sub>條、可被達<sub>レ</sub>、恐々謹言、

朱力キ  
正徳二年 十月七日  
井伊掃部頭 直該判

松平薩摩守殿

御札令披見<sub>レ</sub>、去々年琉球中山王兩使差渡之處、首尾能御禮申上、從

公方様 御臺様品々被下之、其上兩使并從者等迄拜領物被 仰付之、重疊難有旨得其意<sub>レ</sub>、依之爲御禮其國迄以上間親方目錄之通獻上之付<sub>ル</sub>、以使者被差越之、返簡遣<sub>レ</sub>條、可被達<sub>レ</sub>、恐々謹言、

朱力キ  
正徳二年 十月七日

本多中務大輔

忠良判

間部越前守

詮房判

松平薩摩守殿

正文在不斷光院

覺

(徳川綱憲)  
一清揚院様御牌此節不斷光院に被遊 御安置<sub>レ</sub>間、平日

勤行等無怠慢如法可相勤<sub>レ</sub>、

一被奉獻備り御靈曆等隨分清淨ニ可相調り、  
一御牌堂掃除可入念り、勿論中門より内ニ者掃除之者之  
外雜人曾入問敷り、

右之通往く無緩疎相勤り様不斷光院に急度可被申渡置  
り、以上、

正徳二年辰十月十八日

御家老座印

寺社奉行

103 右之通被仰渡り間、被得其意堅固ニ可被相勤り、以上、

正徳二年辰十月十八日

寺社奉行所印

不斷光院

104 吉貴公御譜中

正文在文庫

不肖之身

東照宮の神統を承しよりこのかた、天下の政事常に神徳  
に嗣ん事を以て心とす、然るに在世の日短くして其志の  
遂さる事、今に及ていふへき所をしらず、古より主幼く

國危き代々を見るに、其世の人、權を争ひ、黨をたて、  
其心相和らかずして相疑ふによらざるハなし、胡越の人  
も舟を同じくして水を渡るに、其心を一につにし、其力を

共にする時は、風波の難をもわたるへし、況や今の世の  
人、當家創業の後、治平百年の間に相生れ相長となる事、  
誰かハ東照宮の神恩によらざるものゝあるへき、人々其  
神恩に報ひ奉り、世のため人のためを存せは、古の主幼

く國危き代々の事共を以て深き戒とすへし、もし其志な  
からんにおゐてハ、當家厄難といふのミにハあらず、尤  
是天下人民の不幸たるへし、凡天下の貴賤大小よろしく  
相心得へき事に 思召者也、

正徳二年十月九日 御黒印

在包紙  
御書付之寫

105 吉貴公御譜中

寫正文在文庫

御書付之寫

被仰出之趣

上古以來我國にて金銀を生しり事、其數すくなく、天下

之財用とほしくひひし事共ハ、世の人傳承たる所にて、然るに

東照宮御治世の始、慶長七年に及びて、天運の時至り故歟、神徳の感しいたされり故歟、天下の寶山一時に開け、始めて金銀の生し出し事、我國の始よりこのかたまた其例を聞かす、これよりして、公私貴賤の財用ゆたかに事足りり外のミにあらず、我國の外よりも、金銀を求むべきために渡來り國々其數多く、これによりて又我國の資用もゆたかに事足りり外て今日に至り、皆是

東照宮の神恩にあらずとハ申すへからず、寛永年中我國に渡來り事を禁せられり國々多しといへとも、今に至る年々渡來り所も其數猶すくならず外を以て、我國の金銀ハ萬國の寶にすくれり事、世の人又推知へき所にて、然るに又慶長より以來、或者異國の中に流入、或者火災の度に焼うせ、或者神社佛閣・衣服・器財のために費やし用ひし所、凡九十餘年の間、我國の金銀大半を減しり故に、天下の財用相通しり事其始に及び難く、これによりて元禄年中金銀の法を改め造られ、我國通用の金銀又其數を倍しり、然れとも其金銀の品ハ

東照宮の定置れし所にハ大きに及はず外によりて、工商

の類あらたに造出されり金銀の價を賤し、各其利を失ふへからざる事を謀り、諸物の價を増し加へて商賣しり及びて、諸物の價八年々に貴く、金銀の價八年々賤くなり來りて、つるにハ公我貴賤(私カ)の難儀にハ至りぬ、異朝にしてハ、古より其寶貨の品高下同しからざる事共にて、就中古以來ハ寶鈔とて紙を以て金銀にかへりて天下に通用せしめり事、今にいたるのよし相聞えり、元禄以來の金銀たとひ其品ハ下りりとも、異朝の寶鈔にハくらふへからず、然れば我國の四民各其家業を相傳て、其財用を相通しり事、

東照宮より以來代々の國恩によりり所を存りハんにハ、金銀の價もさのミハ賤します、諸物の價もさのミハ貴はすして、今日の難儀にも及はしむへからず、しかれとも財を重んじ、利を争ひり事ハ、工商の類の習ひにり上ハ、あなかに咎むへからず、只偏に其餘公私貴賤の煩となりり事、今更是非を論するに及へからず、すへて此等の事共年久しく知召されり御事に候を以て 御代の始より常に 御心に掛られり所ハ、金銀の品もとのことくに諸物價も平かに、いかにもして天下の煩を除るへき 御本意にりへとも、凡ハ物一たひやふれり後、もとのことく

になし返し難き事ハ定れることハりにて、中にも今日金銀の品をもとのことくなし返されり事、尤以て難き事に於て、若然るへきいはれもなく、今の金銀を以てもとのことくなし返されりハんにハ、天下に通用し來りり金銀ハ、俄に其數の半を減し、天下の人各其家財の半を失ひ、又工商の類の、利を謀りり心ハもとのことくに於てハ、諸物の價ハ其半を減して商賣しり事も有へからず、然らば金銀の數ハ今迄の半を減し、諸物の價貴くり事ハ今迄のことくに於てハんにハ、公私貴賤の難儀只今よりハ猶甚しきに至りりへき歟、此等の義によりて卒尔の御沙汰にも及び難くりうちに、新金の事、或ハ火にあひりてハ流れうせ、或ハ物にふれりてハ折損し、其資を失ひり輩有之由聞召及はれ、やむ事を得られず、先其品をもとのことくに改造るへき由被 仰出り、其形の少しくり事ハ不可然りへとも、金銀の法もとのことくなし返されり迄ハ、天下に通用しり金の數、其半を減すへき事、尤以て不可然事に有之り故に於てはひき、然るに又新銀の法次第に其品下りりて、去年の冬に至て銀にて通用しり國々貴賤の難儀に及びり由 聞召され、殊に不可然事に 思召され候を以、新銀を造り出しり事をは停止せられり、

此上ハ猶更に金銀の品もとのことくなし返さるへき事、日々に 御心を盡されり、但天下の寶ハ天下と共に寶とすへき物に於てハ

思召にまかせて 御決定あそはされ難き御事に於て、たとひ今日金銀の品もとのことくなし返され、其數の半を減しりとも、慶長以前の代々にくらへりハ、天下の財用猶ゆたかなるへき事ハ萬々倍りりへし、然る上ハ天下の貴賤相共に存りり所、我國の金銀ハ萬國にすくれりて、萬代の後迄の寶とすへき物に於てハ、たとひ各其財寶の半を失りりとも、其品もとのことくなし返さるへき御事に存し、工商の類も相共に存りり所、金銀の品もとのことくなし返されりハ、たとひ其利を失りりとも諸物の價ハ其半を減して、商賣仕るへき事に於て存りりハ、年來の御本意のことく、すみやかに金銀の品もとのことくなし返され、天下の煩を除れりへし、もし天下の貴賤の存する所も、今日通用の金銀、其數の半を減せられん事も不可然御事と存、工商の類も其利の半を失りりハん事ハ、かなふへからずと存りりにおゐてハ、天下の人と共に其時を御待合せ可有之り、只いつれの道にも金銀の事ハ我國の萬代までのために 東照宮定置れし法

のことくになし返さるへき 御本意に叶間、天下の貴賤  
よろしく此旨を存すへき由、被 仰出外者也、

朱力年  
正徳二年 辰十月十一日

106  
櫻島(挿入)に遊山なとこ差越間敷、若無據用事にて差越外節ハ、

地頭に申斷、地頭證文持越、用事相濟、則可罷歸、其外  
船にて通船之者も船を付間敷、若依風波着岸外ハ、所  
役は申斷、書付を取、地頭方へ可差出外、且又御奉公相  
勤外者不依高下、遠方は釣なとこ差越間敷旨、主殿殿を  
被仰渡、

正徳二年辰十月十八日

107  
吉貴公御譜中

寫正文在文庫

寫

此御書付可相達旨、秋元但馬守殿被仰聞叶間、相廻之外、  
留りも仙石丹波守方に可被相返外、以上、

朱力年  
正徳二年 十月十九日 大目付

松平薩摩守殿奉

松平陸奥守殿

上杉民部太輔殿

松平丹後守殿

松平民部太輔殿

松平大和守殿

松平安藝守殿

松平肥前守殿

松平出羽守殿

右留守居

108  
正文在文庫

去十四日於

御城、井伊掃部頭殿被申渡外、

當上様に御家督の御叶間、此旨可申越外事、

朱力年  
正徳二年 十月十九日

在包紙

土屋相換守様より御渡被成り御書付

109  
吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見<sub>レ</sub>、

公方様御機嫌之御様躰被相伺<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>、益御勇健御儀<sub>レ</sub>間、  
可御心安<sub>レ</sub>、隨<sub>テ</sub>御看一種被獻<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>、各申談首尾好遂披  
露<sub>レ</sub>、恐<sub>ク</sub>謹言、

朱力半  
正徳二年 十一月十二日

秋元但馬守  
喬知判  
松平薩摩守殿

110

吉貴公御譜中

正文在文庫

一御遺言書、去ル十月十七日秋元但馬守様方御留守居御  
用之由申來、伊佐岡伊右衛門罷出<sub>レ</sub>處、御取次朝倉五  
郎左衛門を以御渡<sub>レ</sub>故、桂長左衛門(勝寄)之<sub>レ</sub>被差下、今日  
於大菊之間御拜見、以後御家老・若御年寄・大御目附  
拜見被 仰付<sub>レ</sub>、

一横切一通

土屋相摸守様方御渡被成<sub>レ</sub>、右之譯者

若君様<sub>レ</sub>御代被讓<sub>レ</sub>と御遺言書<sub>二</sub>不相見得<sub>レ</sub>付<sub>テ</sub>、於  
江戸嶋津大藏殿方相摸守様<sub>レ</sub>御尋被申上<sub>レ</sub>得<sub>テ</sub>、右之  
通御書付被下<sub>レ</sub>故、大藏殿方御遺言書一所<sub>二</sub>被差下<sub>レ</sub>、  
一御拜見之御請者御使札<sub>二</sub>之<sub>レ</sub>可被申上<sub>レ</sub>旨、被 仰渡<sub>レ</sub>

付<sub>テ</sub>、 御書去ル十三日之御日付<sub>二</sub>之<sub>レ</sub>、來ル十八日有

馬次右衛門爲御使者被召立<sub>レ</sub>事、

朱力半  
正徳二年 十一月十七日

(比志島綱房)  
隼人

111

吉貴公御譜中

正文在文庫

先頃滿君登城之處、萬端御懇之由、祝着同前<sub>レ</sub>、每事丁  
寧之程不淺思給<sub>レ</sub>、其邊弥勇健珍重<sub>ニ</sub>、此方無<sub>レ</sub>吳事<sub>(吳)</sub>、  
謹言、

朱力半  
正徳二年

孟冬十八日

基熙

松平薩摩守殿

112

全上

御札令披見<sub>レ</sub>、留守被差置候家來嶋津大藏(久明) 御目見被

仰付、難有之旨令承知<sub>レ</sub>、紙面之趣各一覽之事<sub>レ</sub>、恐<sub>ク</sub>

謹言、

朱力半  
正徳二年 十一月十八日

阿部豊後守  
正喬判

松平薩摩守殿

113 吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、留守被差置外家來 御目見被 仰付、難  
有旨得其意外、紙面之趣令承知候、恐々謹言、

朱力年  
正徳二年 十一月廿一日

本多中務大輔  
忠良判

間部越前守  
詮房判

松平薩摩守殿

114 全上

御札令披見候、先頃滿君於大奥 御目見被 仰付之、御  
懇之 上意、其上品々拜領、段々難有由其意外、依之  
使者被差越外紙面之趣各申談可及言上外、恐々謹言、

朱力年  
正徳二年 十一月廿二日

阿部豊後守  
正喬判

松平薩摩守殿

115 吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見候、先頃滿君於大奥 御目見被 仰付之、御  
懇之 上意、其上品々拜領、段々難有由其意外、紙面

之趣令承知外、恐々謹言、

朱力年  
正徳二年 十一月廿二日

井伊掃部頭  
直該判

松平薩摩守殿

116 全上

御札令披見外、  
公方様御不例御養生不被爲叶被遊 薨御、被絶言語之由  
令承知外、依之被差越使者候紙面之趣、各申談可及  
上  
聞外、恐々謹言、

朱力年  
正徳二年 十一月廿三日

阿部豊後守  
正喬判

松平薩摩守殿

117 全上

御札令披見外、  
公方様御不例御養生不被爲叶被遊 薨御、被絶言語外、  
依之被差越使者外紙面之趣令承知外、恐々謹言、

朱力年  
正徳二年 十一月廿三日

土屋相摸守  
政直判

松平薩摩守殿



118 全上

貴札致拜見外、

公方様薨御不例不被爲叶御養生被遊 薨御、被絶言語旨、依之御紙面之趣承知仕候、恐惶謹言、

朱力キ 正徳二年 十一月廿三日 井上河内守 正岑判

松平薩摩守様

御報

121 全上

公方様薨御付芳翰之趣入御念儀存外、恐々謹言、

朱力キ 正徳二年 十一月廿五日 紀伊中納言 吉宗判

松平薩摩守殿

御返報

119 全上

公方様薨御之御事、絶言語外、依之御札入御念儀存外、恐々謹言、

朱力キ 正徳二年 十一月廿四日 尾張中納言 吉通判

薩摩中將殿

御宿所

122 全上

御札令披見外、

公方様御不例御養生不被爲叶被遊 薨御、被絶言語外由、紙面之趣令承知外、恐々謹言、

朱力キ 正徳二年 十一月廿五日 井伊掃部頭 直該判

松平薩摩守殿

120 全上

公方様薨御之御事、絶言語外、依是預御札御懇情之至存外、恐々謹言、

朱力キ 正徳二年 十一月廿四日 水戸中納言 綱條判

松平薩摩守殿

御報

123 全上

御札令披見外、先項満君於大奥 御目見被 仰付之、御懇之 上意、其上品々拜領之段々難有由得其意外、紙面之趣令承知外、恐々謹言、

朱力キ 正徳二年 十一月廿六日 本多中務大輔 忠良判

間部越前守 詮房判

詮房判

松平薩摩守殿

就

(徳川家言)  
大樹薨去、使札之趣丁寧之事外、謹言、

朱力キ

正徳二年 仲冬廿六日

基照

松平薩摩守殿

正文在文庫

御札令披見外、

公方様御不例御養生不被爲叶被遊 薨御、被絶言語由、

紙面之趣令承知り、恐々謹言、

朱力キ

正徳二年 十一月廿七日

本多中務大輔

忠良判

間部越前守

註房判

松平薩摩守殿

正文在文庫

(徳川家言)  
文昭院様御法事御執行付由、以使者御香奠被獻之外、於  
増上寺奉納之時候、右之趣可及言上外、恐々謹言、

朱力キ  
正徳二年 十一月廿九日

秋元但馬守  
喬知判

松平薩摩守殿

就

故大樹薨去、杏路以使者楮上之趣丁寧之至令感懐外、謹

言、

朱力キ

正徳二年 仲冬廿九日

(近衛家言)  
(花押) No.3

薩摩中將殿

正文在文庫

就

故大樹薨去、杏路以使者楮上之趣丁寧之至令感懐外、謹

言、

朱力キ

正徳二年 仲冬廿九日

(近衛家言)  
(花押) No.4

薩摩中將殿

129 吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

(徳川家藏)

上様御機嫌御様躰以使者被相伺之候、御安泰被成御座外

間、可御心安外、紙面之趣各申談可及言上外、恐々謹言、

朱力年

正徳二年 十二月朔日

阿部豊後守

正喬判

松平薩摩守殿

130 全上

御札令披見外、

上様御機嫌之御様躰被相伺之外、御安泰被成御座外間、

可御心安外、紙面之趣令承知外、恐々謹言、

朱力年

正徳二年 十二月二日

井伊掃部頭

直該判

松平薩摩守殿

131 吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

上様御機嫌御様躰以使者被相伺外、御安全被成御座外之

間、可御心安外、紙面之趣承届外、恐々謹言、

朱力年

正徳二年 十二月二日

土屋相摸守

政直判

松平薩摩守殿

132 全上

御札令披見外、

上様御安泰被成御座恐悦旨尤外、將又參勤時分之儀、先

頃伺相濟候得共、就 御代替猶又以使者被相伺之外、最

前相達外通、來年六月中可有參府外、恐々謹言、

朱力年

正徳二年 十二月三日

大久保加賀守

忠増判

松平薩摩守殿

133 吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

上様御安泰被成御座恐悦旨尤外、將又參勤時分之儀、先

頃伺相濟外得共、就

御代替猶又以使者被相伺之外、委細從各相達外、恐々謹

言、

朱力年  
正徳二年  
十二月四日

土屋相摸守  
政直判

松平薩摩守殿

134  
全上

御札令披見外、

上様御機嫌御様躰被相伺之外、御安全被成御座外之間、

可御心安外、紙面之趣令承知候、恐々謹言、

朱力年  
正徳二年  
十二月五日

本多中務大輔  
忠良判

間部越前守  
詮房判

松平薩摩守殿

135  
吉貴公御譜中

正文在文庫

今朝鯛三被獻之外、遂披露外處、一段之御仕合外、恐々

謹言、

朱力年  
正徳二年  
十二月五日

大久保加賀守  
忠増判

松平薩摩守殿

136  
吉貴公御譜中

正文在文庫

芳札落手、如來諭先頃滿君於營中諸篇首尾能満足同前之事外、尚期後音外、謹言、

朱力年  
正徳二年  
臘月七日

薩摩中將殿

(花押 No.3)

137  
吉貴公御譜中

正文在文庫

今朝小熬海鼠一箱被獻之候、遂披露外處、一段之御仕合外、恐々謹言、

朱力年  
正徳二年  
十二月十一日

松平薩摩守殿

大久保加賀守  
忠増判

138  
吉貴公御譜中

正文在文庫

尚々不申及外得共、南泉院御位牌之通御寫させ外而御彫せ被成、此御本書ハ永々迄不斷光院ニ御納置被成外様ニと奉存外、爲念封之印進申外、以上、

一翰致啓上、然去比蒙 仰

清揚院様御牌名之儀、妙法院宮へ拙僧願上、則被染御筆、和田次兵衛殿迄相渡申、好便ニ可被指上、御請取被成宜被仰上可被下、

御位牌殿も弥於不斷光院寺内、御造立被遊、彼院被申越致承知候、右御染筆之儀、彼是及延引御待可被成哉と奉察、恐惶謹言、

朱カキ  
正徳二年 十二月十六日

鳴津帶刀様

願王院權僧正

周判

139  
全上

御札令披見候、御代替付誓詞被仕度由被申越、入念、段承届、參府之上可被致誓詞、紙面之趣各一覽之事、恐、謹言、

朱カキ  
正徳二年 十二月十八日

松平薩摩守殿

大久保加賀守

忠増判

142

吉貴公御譜中  
正文在文庫

一翰令啓達、時分柄嚴寒候得共、貴躰愈御堅勝御座、哉、抑滿君御方近衛内大臣殿に御婚禮首尾能相調、御悦悦察入、誠千秋萬歳目出度御同意存、因茲目錄之通

就攝政辭退爲嘉義、芳簡并目錄之通被贈與、每事懇篤之至祝着不少、謹言、

朱カキ  
正徳二年 季冬廿一鳥  
基熙

松平薩摩守殿

141

吉貴公御譜中  
正文在文庫

御札令披見、

上様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤、隨、蜜柑二箱并炙鱒一箱被獻、各申談、遂披露、一段之御仕合、恐、謹言、

朱カキ  
正徳二年 十二月廿三日  
大久保加賀守  
忠増判

松平薩摩守殿

入見參外、聊御祝詞之印迄御座外、恐く謹言、

朱力キ

正徳二年 十二月廿三日

坊城大納言判

松平薩摩守殿

143 繼豊公御譜中

御姉満君仁伝中

嚮レ是依二

將軍家宣公之台許一、正徳二年壬辰九月十八日満君發二興

東都芝邸二到三著京師一、十二月二十三日整三婚儀於 近衛

内大臣家久公之華第一名籍稱一裏方、委詳于吉貴之譜中、

同五年乙未十一月三日誕二生女子一稱延君、享保五年庚子七月十四日

女、享年六、建牌及石塔於大徳寺、

内芳春院、且置牌於薩府惠燈院、

同年十一月晦日罹二痘疹二逝于近衛之華第一、享年十七、

法號光相院殿寶岳慧勝大姉、葬三京都紫野大徳寺一、建二

牌及石塔於芳春院一、且薩府福昌寺内惠燈院亦置レ牌、

144 吉貴公御譜中

正文在文庫

先頃辭職之事相聞被伸悦、芳簡且如目錄投與之、懇切之

至満足不斜外、尚期後音外、謹言、

朱力キ  
正徳二年 臘月廿五

(花押 No.3)

薩摩中將殿

145 全上

御札令披見外、就寒中

上様御機嫌御様躰被相同之外、益御安全御事外間、可御心易外、隨御羽織并御着一種被獻之外、紙面之趣令承知外、恐く謹言、

知外、恐く謹言、

朱力キ  
正徳二年 十二月廿五日

井伊掃部頭 直該判

松平薩摩守殿

146 吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、就寒中

上様御機嫌之御様躰以使者被相同之外、益御安全御儀外間、可御心安外、隨御羽織五并簾節一箱被獻之外、各

申談遂披露外處、一段之御仕合外、恐く謹言、

朱力キ

正徳二年 十二月廿五日

大久保加賀守

忠増判

松平薩摩守殿

御札令披見外、

上様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、隨而蜜柑二箱并

御肴一種被獻之外、紙面之趣令承知外、恐々謹言、

朱力半  
正徳二年 十二月廿五日 井伊掃部頭 直該判

松平薩摩守殿

寫正文在文庫

寫

又三郎様に被 仰進外御口上之覺

從

東照宮御先祖至

龍伯様 惟新様 中納言様段々 御懇之旨有之、猶又

御當家從

御代々様及不相替 御懇意有之候付、聊其旨御忘却不

被成外、依之先

公方様に若格別之御用及外者、可被仰付旨御内々爲被

仰上置趣有之外、然者

御當代様ニ及勿論御同前之御事外故、右御心底之旨此

節嶋津帶刀御使者ニ被差上、御内々より被仰上置外間、

又三郎様ニ及右之段急度御承知被成可被置候、

右御口上申上外節者、嶋津大藏并御守役又者御側ニ

相勤外者共

御前ニ相詰外様仕置、右御口上申上外後、相詰外者

共ニ直於

御前、帶刀咄ことく可申聞、趣者、

御先代様以來格別之御用と被仰上置外者、尋常之御

奉公ニ及者勿論無之外、萬一世上騒敷儀及可有之節、

其向之御用可被仰付と之御事外、此節何ぞ御別條可

有之とハ不被 思召外得共、

御代替之節外故、改而右之趣被仰上置外、前々より

被仰上置外御心底者

御曩祖以來不忠不義之御仕形曾有無之外、然處從

東照宮以來 御當家御代々様御懇意之旨有之付、御奉

公之儀御深切ニ被掛 御心、其段 御先祖御代々堅

御傳續被成外、依之先年風説坏有之外節、先

公方様者 (徳川編考) 常憲院様御兄様之御筋ニ及、御筋目付外

者餘儀及不被成御座御事外故、未 御城ニ不被爲

入前、 (編考) 大玄院様より御心底之程被仰上置、其思

召を 太守様被相續、御繼目被 仰出<sub>レ</sub>儀、且又其  
後表御内々より御心底之程被仰上、其御覺悟之程被  
成御座<sub>レ</sub>、然上老縱老萬歳之後、世上轉々之節及<sub>レ</sub>  
共、

御當家様御懇之一筋御忘却被成、時之宜方ニ可被應  
御心底少々無之<sub>レ</sub>、不義不忠之筋を以何程御家結構  
ニ成<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>及無全<sub>レ</sub>、且 御先祖御代々之 思召を被  
背儀<sub>レ</sub>得老、差當御不孝之至、彼是以道にあらざる  
事<sub>レ</sub>間、如何様之被及 御難儀<sub>レ</sub>共、御當家様は偏  
ニ御奉公可被成と御治定被成被置<sub>レ</sub>、右之旨趣此節  
御治定被成被 仰出<sub>レ</sub>儀ニ<sub>レ</sub>ハ無之<sub>レ</sub>、ケ様之儀  
御父子様御間ニ<sub>レ</sub>及不圖被 仰出<sub>レ</sub>儀老、却<sub>レ</sub>如何  
<sub>レ</sub>、其上 又三郎様未御若年ニ被成御座<sub>レ</sub>付、被扣  
置<sub>レ</sub>得共、當時 御代替之節<sub>レ</sub>故、乍御若年此砌御  
心底之程急度被仰進置<sub>レ</sub>老御一生之御心恨ニ及可成  
と被 思召被 仰進事<sub>レ</sub>、大藏并御側之者共右 思  
召之旨承知仕心底一頭ニ治定可仕置<sub>レ</sub>、未御若年<sub>レ</sub>  
間、於 御前縱初之咄ニ表世間騒敷成行<sub>レ</sub>時老、進  
退如何可仕哉杯無正躰儀共聊申間敷<sub>レ</sub>、右之旨具ニ  
可申聞置旨 御意<sub>レ</sub>、以上、

149

寫正文在文庫

覺寫

正徳二年辰

十月廿六日

鳴津帶刀

御使

今度從 太守様又三郎様は拙者御使ニ<sub>レ</sub>被仰進<sub>レ</sub> 御口  
上書寫渡置<sub>レ</sub>間、後年代合之節儘可被次渡<sub>レ</sub>、高橋<sub>(種長)</sub>民部・  
大嶋<sub>(有)</sub>孫右衛門・和田次兵衛<sub>(助)</sub>事京大坂に被差置儀<sub>レ</sub>間、此  
節 又三郎様に被仰進<sub>レ</sub> 御口上書寫相渡、兼<sub>レ</sub>其旨堅  
存可罷在旨可申渡由被仰付<sub>レ</sub>、拙者儀老急キ江戸に被遣  
事<sub>レ</sub>間、於大坂孫右衛門に右 思召之旨趣并 御口上書  
之寫、民部・次兵衛ニハ孫右衛門より相達<sub>レ</sub>様可申付旨  
御意<sub>レ</sub>故、孫右衛門迄ニ申渡 御口上書寫相渡、平日之御  
用及此節被仰渡<sub>レ</sub>旨を心底ニ挾置相勤可申<sub>レ</sub>、勿論代替  
之節及今度 御意之旨申傳 御口上書寫及儘可次渡旨、  
拙者書付相添孫右衛門に渡置<sub>レ</sub>、以上、

正徳二年辰

十二月廿五日

鳴津帶刀印

鳴津大藏殿



全御譜中

正文在文庫

先頃父公辭職、依之被仲祝詞、且目錄之通賜之、怡悅不  
少外、尚期後音外、謹言、

朱力キ

正徳二年

臘月廿五

(花押 No.4)

薩摩中將殿

吉貴公御譜中

正文在文庫

爲 御代替之御禮以使者御太刀友成一腰・御馬代黄金十  
兩被獻之外、遂披露外處、一段之御仕合外、恐々謹言、

朱力キ

正徳二年

十二月廿七日

阿部豊後守  
正喬判

井上河内守  
正岑判

大久保加賀守  
忠増判

秋元但馬守  
喬知判

松平薩摩守殿

爲歲暮之賀儀小袖五重到來祝着外、委曲秋元但馬守可述  
外也、

正徳二年

十二月廿七日

將軍家  
墨印  
家藏公

薩摩中將殿

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

上様益御機嫌能被成御座恐悦旨尤外、隨乃蜜柑二箱并御  
看一種被獻之外、紙面之趣令承知外、恐々謹言、

朱力キ

正徳二年

十二月廿八日

本多中務大輔  
忠良判

間部越前守  
詮房判

松平薩摩守殿

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、就寒中

上様御機嫌御様躰被相伺之外、益御安全御儀外間、可御  
心易外、隨乃御羽織并御看一種被獻之外、紙面之趣令承

全上

知候、恐く謹言、

朱カキ  
正徳二年 十二月廿九日

本多中務大輔  
忠良判

間部越前守  
詮房判

松平薩摩守殿

155 吉貴公御譜中

正文在文庫

今度爲 御着袴初之御祝儀、以使者二種御樽代被獻之り、  
遂披露り之處、一段之御仕合り、恐く謹言、

朱カキ  
正徳三年 正月五日

阿部豊後守  
正喬判

井上河内守  
正岑判

大久保加賀守  
忠増判

秋元但馬守  
喬知判

松平薩摩守殿

156 全上

なぞくさま守さま御ふしの御事、數くめて度

おほしめしり、何もよく申せとの御事にて御さり、  
かしく、

上様

(家直夫人、近衛氏)  
天英院様御機嫌よくならせられりまゝ、御心易思しめし

被成へくり、さてハ此度

上様御袴着遊されり御事、御めてたくおほしめしなされ  
り由、御よろこひ仰上られ御ふみのやう披露いたしま  
らせり得ハ、めて度御満足ニ思しめしり、かしく、

朱カキ  
正徳三年

嶋津將監殿

岩倉

同 帶刀殿

かよ

御返事

157 全御譜中

正文在文庫

吉書

一 神社佛閣修造興行事、

一 可專勸農事、

一 可徴納國々年貢事、

右任三ヶ條之旨、可有沙汰之狀如件、

正徳三年正月十一日 吉貴御判

158 吉貴公御譜中

正文在文庫

爲年頭之御祝儀以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被獻  
之外、遂披露レ之處、一段之御仕合レ、恐々謹言、

朱力キ  
正徳三年 正月十一日

阿部豊後守  
正喬判

井上河内守  
正岑判

大久保加賀守  
忠増判

秋元但馬守  
喬知判

松平薩摩守殿

159 吉貴公御譜中

扣寫在家老座

一筆致啓上レ、琉球中山王大清國江差渡レ進貢之銀、新  
銀位惡敷レ付、訴申趣御座レ故、去秋新銀吹直之願申上  
外處、段々以御書付御尋之趣致承知レ、御尋之内難相知  
儀御座レ付、當地ニ在合レ琉人江相尋レ得共、相知不申

外、依之當春琉球江申越レ間、從彼地到來次第重ル可申  
上外、先此段爲可申上如斯御座レ、恐惶、

朱力キ  
正徳三年 正月廿五日 御名

井上河内守様  
人、

160 吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

(家)文昭院様御法事於増上寺相濟候段被承之、恐悦旨尤外、  
依之被差越使者候紙面之趣、各申談及 上聞候、恐々謹  
言、

朱力キ  
正徳三年 正月廿八日 井上河内守  
正岑判

松平薩摩守殿

161 全上

御札令披見外、

文昭院様御法事於増上寺相濟外段被承之、恐悦旨尤外、  
紙面之趣令承知外、恐々謹言、

朱力キ  
正徳三年 正月廿八日 井伊掃部頭  
直該判

松平薩摩守殿

162 吉貴公御譜中

正文在島津求馬

加冠

宜爲

正徳三巳

正月廿八日

吉貴公

御判

島津鐵之丞(久敷)

三十郎

宜爲

正徳三巳

正月廿八日

御墨印

諸太郎

165 吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

文昭院様御法事於増上寺相濟外段被承之、恐悦旨尤外、  
紙面之趣令承知候、恐々謹言、

朱力半

正徳三年 二月二日

本多中務大輔

忠良判

間部越前守

詮房判

松平薩摩守殿

163 正文在伊集院伊膳

加冠

宜爲

正徳三巳

正月廿八日

御判

伊集院德之丞(久文)

半太夫

166 吉貴公御譜中

大樹家繼公嗣位、中山王尚敬亦襲封、故吉貴從先躰一  
告奉疏使於柳營執政上、正徳三年癸巳二月九日執政  
以奉書傳吉貴來歲率疏使當來東武、乃可緩  
今年之述職、

164 正文在島津彦太夫

加冠

島津龜荃

全上

正文在文庫

一筆令啓外、

上様益御機嫌能被成御座外間、可御心安外、然者從琉球

中山王

御代替之御祝儀、且又自分繼目之御禮之儀被相伺之候、

如先規兩使召連、來年致參府外様被

仰出外條、被得其意、當年者參勤可有延引外、恐々謹言、

朱力半

正德三年 二月九日

阿部豊後守

正喬判

井上河内守

正岑判

大久保加賀守

忠増判

秋元但馬守

喬知判

土屋相摸守

政直判

松平薩摩守殿

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、如承陽春之慶賀珍重外、先以

今曉行遷宮之禮、島津左衛門久健代吉貴詣社、家老

上様益御勇健被成御座、年始之御規式可相濟と目出度被

存由得其意外、猶以御機嫌之御様躰被相伺之外、弥御安

全之御事外間、可御心易外、隨而御樽肴被獻之外、各申

談遂披露候之處、一段之御仕合外、恐々謹言、

朱力半 正德三年 二月十二日

秋元但馬守 喬知判

松平薩摩守殿

全上

御札令披見外、如承陽春之慶賀珍重外、先以

上様益御勇健被成御座、年始之御規式可相濟と目出度被

存由得其意外、猶以御機嫌之御様躰被相伺之外、弥御安

全之御事外間、可御心安外、隨而御樽肴被獻之外、紙面

之趣令承知外、恐々謹言、

朱力半

正德三年 二月十二日

井伊掃部頭 直該判

松平薩摩守殿

全御譜中

同年二月十一日薩州滿家院厚地村花尾權現社再興造畢、

肝付主殿兼柄、若年寄島津內膳久兵、大目附島津彦太夫

久富、寺社奉行伊集院用之助久富、番頭種子島平馬時憲、

用人谷山角太夫純房、側目附相良仁右衛門聰香等往勤、

事、吉貴又新建<sub>二</sub>隨身門於社邊<sub>一</sub>、安<sub>二</sub>隨身二軀<sub>一</sub>、

171 正文在大乘院

花尾山隨身門記

原夫花尾山大權現者曩昔

忠久公崇顯考顯妣之尊像而所深恭敬也、故英子傑孫累世

相傳不忘報乎、其本既及五百年矣、雖然盛衰損益物之數

也、係永正年間國有艱危、爾來殿堂門廡零落廢壞而三十

六坊亦悉退轉矣、天運無往而不復、至 光久公四海大治

國家間暇、乃繼絕興廢神廟華表復于舊日、然未有寺院供

香火者、至 綱貴公撫其舊坊之遺名、既命有司經始五寺、

惜乎、應玉堂之召未遂其事、茲 吉貴公續其大志敬其遺

命 尊崇加深、先興平等王院後興曼荼羅寺本地院・普賢

院・多聞院、且修飾神廟悉皆備矣、然又未自始有隨身門、

仍喜捨私庫之財、創建一字門、安置隨身二軀、永禱護持

國家者也、遂 命臣記其由以貽于後、於是謹書、

時

正德三年龍舍癸巳二月十三日 比志嶋隼人源範房判

172 全御譜中

去歲 壬辰九月十八日大御目附橫田備中守・大久保大隅守

招<sub>二</sub>留守居伊佐岡伊右衛門於大久保氏之第<sub>一</sub>、今般傳<sub>下</sub>諸

國浦浦副<sub>二</sub>立制札<sub>一</sub>之 合命<sub>上</sub>、邑吏等宜<sub>下</sub>承<sub>二</sub>領件旨<sub>一</sub>連印

簿書捧<sub>上</sub>之、被<sub>レ</sub>附<sub>二</sub>草藁<sub>一</sub>、乃改書建<sub>二</sub>之領土薩隅日三州

輻湊之海濱<sub>一</sub>、邑吏捧<sub>二</sub>印簿<sub>一</sub>、伊東大和守祐實<sub>領日州</sub>・秋月

山城守種弘<sub>領高</sub>・牧野大學成央<sub>領延</sub>・竹村太郎右衛門<sub>代官</sub>・

島津淡路守惟久<sub>領佐</sub>同主稅久武<sub>領佐</sub>之領亦傲<sub>レ</sub>之、依<sub>レ</sub>命

送<sub>二</sub>邑吏之印簿於薩府<sub>一</sub>乃藏<sub>レ</sub>之於一篋、今茲二月十四日

使<sub>下</sub>留主居森川利右衛門呈<sub>レ</sub>之於橫田氏・大久保氏<sub>上</sub>、

173 扣正文在文庫

扣

一薩摩大隅日向國浦、添御高札相建、役人印形帳三箱差

上、

一伊東大和守樣・秋月山城守樣・牧野大學樣・竹村太郎

右衛門樣御支配所、嶋津淡路守・嶋津主稅領分浦、役

人印形帳八、何れ及日向國諸縣郡印形帳一箱、入付差

上り、

一主税知行所日向國廣原之内塩路村・山崎村此兩村海邊  
ニ面り得共、今迄御高札無之、然共御高札無之所者  
急度相守外様ニ被仰渡外付、右兩村之役人共ニ申渡、  
印形帳差出外、此以後右之兩村ニ御高札相建外様淡路  
守より相伺答之由ニ御座外、依之印形帳與書及右之通  
相調申外、

一太郎右衛門様御支配所印形帳與書何れ及同前御認させ  
(竹村嘉茂)

可被成處、御高札被相建外儀者、太郎右衛門様より備  
中守様・大隅守様ニ御請被仰上外付、御手代文言ニハ  
被相除外所及有之、外之與書ニ者相并不申旨太郎右衛  
門様より被仰越外、

一伊東鞆負様・秋月式部様御知行所之内ニ者、浦濱無之  
(延徳) (種輔)

旨被仰越、致承知外、依之印形帳無御座外、

一添御高札御案文并備中守様・大隅守様御添書者、順達  
留より御兩人様之内ニ返上仕外様ニ被仰渡外付、大  
學様御方より御返上外様申談外、

一薩摩守領内嶋々之儀者、海路不自由之時節御座外間、

當春添御高札差渡、浦役人共印形帳者、到來次第追  
可相納外、

右之通國元方申越外、此段申上外、以上、

朱力キ

正徳三年 二月

松平薩摩守内

森川理右衛門  
(武宣)

174 吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、如承陽春之慶賀珍重外、先以

上様益御勇健被成御座、年始之御規式可相濟と目出度被  
存由得其意外、猶以御機嫌之御様躰被相伺之外、弥御安  
全之御事外間、可御心安外、隨而御樽肴被獻之外、紙面  
趣令承知外、恐々謹言、

朱力キ

正徳三年 二月十六日

本多中務大輔

忠良判

間部越前守

詮房判

松平薩摩守殿

175 吉貴公御譜中

正文在文庫

如芳翰新陽之嘉詞不可有盡期外、其許御無吳超歲之由珍  
重外、我等堅固令越年外、依之入御念外段忻然之至存外、

恐々謹言、

朱力年

正徳三年 二月廿七日

紀伊中納言

吉宗判

松平薩摩守殿

御返報

176

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

上様益御機嫌能被成御座、舊臘十一日御表江初而被遊

出御外段被承、目出度被存之由得其意外、紙面之趣各申

談及言上外、恐々謹言、

朱力年

正徳三年 三月二日

阿部豊後守

正喬判

松平薩摩守殿

177

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

上様益御機嫌能被成御座、舊臘十一日 御表江初而被遊

出御外段被承之、目出度被存由得其意外、紙面之趣令承

知候、恐々謹言、

朱力年

正徳三年 三月二日

井伊掃部頭

直該判

松平薩摩守殿

178

全上

今度

(家曾生母)

長昌院様御遠忌之御法事御執行付而、以使者御香奠被獻

之外、於東叡山奉納之、右之趣及言上外、恐々謹言、

朱力年

正徳三年 三月二日

大久保加賀守

忠増判

松平薩摩守殿

179

全上

御札令披見外、

上様益御機嫌能被成御座、舊臘十八日 御代替之御禮相

濟外之段被承之、目出度被存之由得其意候、依之被差越

使者外紙面之趣各申談及 上聞外、恐々謹言、

朱力年

正徳三年 三月三日

阿部豊後守

正喬判

松平薩摩守殿

180

全上



御札令披見外、

上様益御機嫌能被成御座、舊臘十八日 御代替之御禮相濟候之段被承、目出度被存由得其意候、紙面之趣令承知外、恐々謹言、

朱力キ  
正徳三年 三月三日

松平薩摩守殿

井伊掃部頭  
直該判

181 全上

御札令披見外、

上様益御機嫌能被成御座、舊臘十八日 御代替之御禮相濟外之段被承之、目出度被存之由得其意外、紙面之趣令承知外、恐々謹言、

朱力キ  
正徳三年 三月四日

松平薩摩守殿

土屋相摸守  
政直判

182 全上

御札令披見外、

上様益御機嫌能被成御座、舊臘十一日 御表江初而被遊出御外段被承之、目出度被存之由得其意外、紙面之趣令

承知外、恐々謹言、

朱力キ  
正徳三年 三月六日

松平薩摩守殿

本多中務大輔  
忠良判  
間部越前守  
詮房判

183 全上

正月廿五日之尊書三月五日相達、拜見仕外、舊冬嶋津帶刀方被差登、被爲入御念外御儀共達 御耳、御満悦之趣委細ニ申談外儀、則於其元被申達忝思召、依之猶宜申上由、則御紙上を以入御覽外得老、宜相心得御挨拶可申入之由

(家算老)  
天英院様

依仰御返答如斯御座外、恐惶謹言、

朱力キ  
正徳三年 三月六日

薩摩守様

(公敷用)  
堀山城守  
正勝判

184 全上

御札令披見外、

上様益御機嫌能被成御座恐悦旨尤外、將又其方妻歳暮之御祝儀拜領難有由、紙面之趣令承知外、恐々謹言、

朱力年  
正徳三年 三月七日

本多中務大輔  
忠良判

間部越前守  
詮房判

松平薩摩守殿

185 吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見候、琉球中山王大清國に差渡り進貢之銀、新銀位悪敷り付の訴申趣有之候故、去秋新銀吹直之願被申上り處、段々以御書付御尋之趣被致承知り、御尋之内難相知儀有之付、其地在合り琉人に被相尋候得共相知不申外、依之當春琉球に被申越り間、從彼地到來次第重可被申越之由、紙面之趣令承知り、恐々謹言、

朱力年  
正徳三年 三月九日  
井上河内守  
正岑判

松平薩摩守殿

186 吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

上様益御機嫌能被成御座、今度 御官位 宣下相濟り外、

段被承之、目出度被存之由得其意り、依之被差越使者り紙面之趣各申談及言上り、恐々謹言、

朱力年  
正徳三年 三月十二日  
阿部豊後守  
正喬判

松平薩摩守殿

187 御札令披見外、

上様益御機嫌能被成御座、今度 御官位 宣下相濟り外之段被承、目出度被存之由得其意り、紙面之趣承届り、恐々謹言、

朱力年  
正徳三年 三月十二日  
井伊掃部頭  
直該判

松平薩摩守殿

188 吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

上様益御機嫌能被成御座、被遊 御袴着り段被承之、目出度被存之由得其意り、依之被差越使者候紙面之趣、各申談及言上候、恐々謹言、

朱力年  
正徳三年 三月十五日  
阿部豊後守  
正喬判

全上

松平薩摩守殿

御札令披見外、

上様益御機嫌能被成御座、被遊 御袴着外段被承之、目

出度被存之由得其意外、紙面之趣令承知候、恐々謹言、

朱力\*

正徳三年 三月十五日

井伊掃部頭

直該判

松平薩摩守殿

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

上様益御機嫌能被成御座、舊臘 御官位 宣下相濟外段

被承、目出度被存由得其意外、紙面之趣令承知外、恐々

謹言、

朱力\*

正徳三年 三月十六日

本多中務大輔

忠良判

間部越前守

詮房判

松平薩摩守殿

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

上様益御機嫌能被成、被遊 御袴着外段被承之、目出度

被存由得其意外、紙面之趣令承知外、恐々謹言、

朱力\*

正徳三年 三月十八日

本多中務大輔

忠良判

間部越前守

詮房判

松平薩摩守殿

吉貴公御譜中

當家五百年來之繁榮世全封域、庶孽之臣如葛藟瓜瓞、

其中式微冒當家之稱號及諱字、有不当其可者上、故

今茲三月新定格式降其命、具見于後葉、

正文在文庫

御名字名乘來外面、今度二男以下名乘之字拜領被仰

付候付、申渡外次第

御名字名乘來外面、二男以下之名字、先頃願被申出拜領

被仰付外、依之二男以下名乘之儀、御家之名字名乘候儀

恐多奉存り間、改申筋被仰付度旨被奉願り面々有之、其  
 段達 貴聞願之通被仰付り、就夫不願出面々は表、此節  
 名乗之字拜領被 仰付之旨被 仰出り條、此段可被奉承  
 知り、以上、

巳三月廿五日

右書付名乗之字拜領之段申渡り已前、御用人相良權太(長)  
 夫を以何れ表は申渡之、

於御家老座肝付主殿直申渡、

(の1)

將 嶋津小源(實 總)太殿  
 嶋津左衛門(忠 興)  
 英 嶋津周防殿(久 盛)

右三人二男迄者永代久之字御免被成り、三男よりハ此節  
 被下り字を用可被申り、庶流ニ表當時之依格式、嫡子計  
 者永代久之字御免被成、二男よりハ此節被下候字を用可  
 申り、其外之庶流之儀者勿論嫡子ニ表、今度被下り字  
 を用筈り條、不洩様嫡家方可被申聞り、以上、

巳三月廿五日

右書付を以申渡、拜領之字御書付銘々相渡之り、御書  
 付左之通、

(の2)

正徳三癸巳三月廿五日 肝付主殿  
 右之通中奉書横折ニ御右筆相調之、何れ表右同前、

將

嶋津小源太殿

親 川上久馬(川上家)  
 明 嶋津大藏殿(嶋津二男家)  
 尚 嶋津圖書殿(宮ノ城家)  
 季 嶋津内膳(豊州家)  
 輝 嶋津内記(永吉家)  
 直 嶋津備前殿(佐多家)  
 清 嶋津將監殿(佐司家)  
 廣 嶋津助之丞  
 時 新納四郎左衛門  
 資 榊山助太郎  
 資 嶋津筑後(御城家)  
 勝 桂太七郎(嶋津四男家)  
 記 嶋津頼母殿(嶋津五男家)  
 房 嶋津求馬殿  
 譽 喜入右衛門

俊 町田郷九郎

俊 伊集院藏人

用 嶋津伊織

用 大野七郎太夫

用 吉利左右衛門

用 義岡左平太

用 嶋津六郎次郎

右人數嫡子迄者代々久之字御免被成り、二男よりハ此節被下候字を用可申り、庶流之内當時之依格式、嫡子計ハ代々久之字御免被成り人有之り、其二男よりハ尤此節被下候字を用申善り、其外之庶流之儀ハ勿論、今度嫡家ハ被下り字を名乗り様可被申聞り、以上、

巳三月廿五日

右申渡并拜領之御書付前ニ同、

(豊州家二男家) 嶋津帶刀

(宮之城二男家) 嶋津新八

(郡之城二男家) 北郷作左衛門

(新城家) 嶋津市太夫殿

(宮之城庶流家) 嶋津内藏

(伊集院家) 伊集院半右衛門

(白壁二男家) 嶋津彦太夫

(川上二男家) 川上孫八

(宮之城二男家) 嶋津左内

川上縫殿

(新納二男家) 新納左京

(稱山庶流家) 樺山助四郎

(北郷二男家) 北郷七郎左衛門

(柱二男家) 柱仁治太郎

(新納支流) 新納舍人

(町田二男家) 町田勘解由

(新納庶流) 伊集院用之助

新納伊織

嶋津十郎左衛門

北郷右衛門ハ

右寄合并以上之者共、嫡子迄ハ代々久之字被遊御免り、右格之者寄合并以下之格ニ被仰付儀有之節者、御直別之嫡家計久之字用可申り、右者共之嫡家又ハ二男家之者表、寄合并以下之格ニ罷在り者ハ勿論、久之字用申間敷り、右人數二男よりハ此節嫡家ハ被下り字を用可申り、此段

ハ嫡家方可相傳外、以上、

巳三月廿五日

右申渡前ニ同、

(の4) 一頼之字、朝之字、忠之字者、向後於御家中名乘之字一

切用申間敷外、

一當 公方様御名乘之字於御家中名乘之字一切用申間敷外、

一從 家久公至 綱貴公御名乘之字御當代ニ於御家中名乘之字一切用申間敷外、

右之通被 仰出外間、可有承知外、以上、

巳三月廿五日

右書付ハ御書付拜領申渡外後、御用人を以何れ表ハ申渡之、

(の5)

嶋津主水(久)

右主水家之儀、御一族ニ有無之ハ得共、御名字御家之字御免被成置外、二男よりハ御名字并御家之字名乘申間敷外、

穎娃長左衛門(久)

右長左衛門嫡子代々御家之字御免被成置外、二男よりハ御家之字名乘申間敷外、

右之通被 仰出外間、可有承知外、以上、

巳三月廿五日

右御用人相良權太夫を以申渡之、於敷舞臺肝付主殿直申渡、

(の6)

良 龜山(久)李(久)太夫(實)

眞 山田七郎(久)右衛門(隼)

安 碓山仲(久)左衛門(參)

有 大嶋休(久)左衛門(教)

經 迫水(久)可遊

右者共ハ寄合并格ニ有無之ハ得共、御直別之家筋ニ外間、嫡子迄ハ代々久之字御免被成外、二男よりハ此節被下候字を用可申旨被 仰出外間、難有可奉承知外、尤庶流共ニ表拜領被仰付外字を用外様ニ可申聞外、以上、

巳三月廿五日

右書付を以直申渡外、拜領之御書付前ニ同、

伊作家庶流若松氏嫡流

(の7)

長 若松次右衛門

薩州家庶流大田氏嫡流

用 大田吉兵衛(用松)

右同寺山氏嫡流

用 寺山源右衛門(用長)

越前鳴津家庶流出所不相知

行 宇宿覺兵衛

右四人此節名乘之字拜領被仰付間、難有奉存、則名乘

相改可申付、尤庶流共ニ表被下付字を用付様可申聞付、

以上、

巳三月廿五日

(08)

伊作家庶流西氏嫡流加世田衆中

長 西彦四郎

薩州家庶流西川氏嫡流鶴田衆中

用 西川六太夫跡(用忠)

右二人此節名乘之字拜領被仰付間、難有奉存、則名乘

相改可申付、尤庶流共ニ表被下付字を用付様可申聞付、

以上、

巳三月廿五日

(09)

阿蘇谷氏嫡流羽月衆中

時 阿蘇谷彦左衛門

右之通名乘之字拜領被 仰付間難有奉存、當家督之者

より則名乘改可申付、尤庶流共ニ表此節被下付字を用付

様可申聞付、以上、

巳三月廿五日

(010)

石見 伊作與吉郎

右伊作名字名乘來付得共、伊作家之儀ハ 貴久公より御

家爲被遊 御兼帶家筋之儀付間、伊作名字名乘付儀無用

可仕付、依之此節石見と名字拜領被仰付間、難有可奉

承知付、名乘之字ハ長、此字を用可申付、尤庶流共ニ表

此旨可申聞付、以上、

巳三月廿五日

右段々申渡様前ニ同、

於敷舞臺御用人申渡

和泉氏嫡流斷絶庶流鳴津小源大殿家來

氏 和泉平次郎

伊作家庶流恒吉氏嫡流鳴津兵庫殿家來

(011)

長 恒吉金兵衛

越前家庶流知覽氏嫡流嶋津筑後家來

行 知覽行通文右衛門

右此節名乘之字拜領被 仰付行間難有奉存、則名乘改可  
申行、尤庶流共行被下行字を用行様可申聞旨、主人よ  
り可被申渡行、以上、

巳三月廿五日

右主人召出、於敷舞臺御用人相良權大夫行申渡之、  
被下行御書付左之通、

嶋津小源太殿家來

和泉平次郎

氏

正徳三癸巳三月廿五日 相良權太夫

右之通中奉書横折行御右筆調之、

嶋津筑後家來

相馬藤左衛門氏

氏

右同

石坂與太左衛門氏

氏

右者共 御家御直別之家筋行故、其者嫡流之嫡子迄ハ  
家號之儀被遊御免行、勿論他家行致奉公行節ハ右之家號  
名乘申間敷行、且又名乘之字此節拜領被仰付行間、當家  
督之者より名乘改可申行、右通被仰出行間、難有可奉承  
知行、尤庶流之者共行被下行字を名乘、名字之儀被改  
小様可申聞旨、主人方吃可被申渡行、以上、

巳三月廿五日

194 北郷家伊豆忠置譜中 後筑後

正徳三年 癸巳三月、御直別之貴族暨忠置奉願行二男以下  
恐行冒御家之字行避行之、此故 太守吉貴公使御領國中  
之御氏族避行久忠二字改諱於久龍上、于時五月六日久龍  
登 城而於御家老座、肝屬主殿兼柄御家承下嫡子代々久  
字、二男到庶流代代資字可用行焉之 嚴命上、拜領資字  
於久龍、所謂資字取元祖資忠之資字行如此、於是二男  
以下庶流以資字爲實名者也、實名目錄及證書左記之、

195

資

嶋津筑後



正徳三癸巳

三月廿五日

肝付主殿

右以目錄之趣使各庶流改實名者也、

鳴津筑後

氏

右者家來相馬藤左衛門名乘之字可被申付、

正徳三癸巳

三月廿五日

相良權太夫

御取次

鳴津筑後家來

相馬藤左衛門

右同

石坂與太左衛門

右者共 御家御直別之家筋ニ付故、其者嫡流之嫡子迄ハ家號之儀被遊御免、勿論他家ニ致奉公ハ節者右之家號名乘申間敷、且又名乘之字此節拜領被仰付ハ間、當家督之者より改可申、右通被 仰出ハ間、難有可奉承知、尤庶流共へも此節拜領被 仰付ハ字を名乘、名字之儀者相改ハ様可申聞旨、主人より屹可申渡、以上、

巳三月

右以證書之趣使各庶流改實家號成山實名氏之字上者也、

島津筑後

氏

右者家來石坂與太左衛門名乘之字可被申付、

正徳三癸巳

三月廿五日

相良權太夫

御取次

鳴津筑後家來

相馬藤左衛門

右同

石坂與太左衛門

右者共 御家御直別之家筋ニ付故、其者嫡流之嫡子迄ハ家號之儀被遊御免、勿論他家ニ致奉公ハ節者右之家號名乘申間敷、且又名乘之字此節拜領被 仰付ハ間、當家督之者より改可申、右通被仰出ハ間、難有可奉承知、尤庶流共へも此節拜領被 仰付ハ字を名乘、名乘之儀者相改ハ様可申聞旨、主人より屹可申渡、以上、

巳三月

右以證書之趣ニ石坂氏以後有庶流者諭、應定ニ家號於豐秀一旨上者也、

鳴津筑後

行

右者家來知覽文右衛門名乘之字可被申付、

正徳三癸巳

御取次

三月廿五日

相良權大夫

越前家庶流知覽氏嫡流

鳴津筑後家來

知覽文右衛門

右此節名乘之字拜領被、仰付、間難有奉存、則改可申、  
尤庶流共、此節拜領被、仰付、字用、様可申聞旨、主  
人より可被申渡、以上、

巳三月

正徳三年十二月依、太守吉貴公之、嚴命、當家之、又庶流

改家號於龍岡、

196

吉貴公御譜中

正文在文庫

今度爲御元服之御祝儀、以使者三種御樽代被獻之、遂  
披露、一段之御仕合候、恐、謹言、

正徳三年 三月廿七日

阿部豊後守 正喬判

井上河内守 正岑判

秋元但馬守 喬知判

土屋相摸守 政直判

松平薩摩守殿

197

全上

貴翰致拜見、

上様倍御機嫌能被成御座奉恐悦、然、從琉球中山王  
御代替御祝儀、且亦自分繼目之御禮之儀御窺之處、如先  
規兩使被召連來年御參府可被成、當年之御參勤、御延  
引、様奉書到來難有思召之旨、因茲御紙面之趣致承知、  
恐惶謹言、

正徳三年 三月廿七日

内藤豊前守

式信判

松平薩摩守様

貴報

198

全上

就御代替來年琉球人關東參向、仍今年參勤延引之由、彼是珍重思給<sup>レ</sup>、早以被示聞楮面尤親切之至<sup>レ</sup>、猶期後音<sup>レ</sup>、穴賢々々、

朱力キ  
正徳三年

季春廿八鳥

基熙

松平薩摩守殿

199  
全上

芳翰披覽、今度前攝政就關東下向示給之趣、丁寧之模樣令祝着<sup>レ</sup>、弥無吳珍重、此邊無恙<sup>レ</sup>、穴賢々々、

朱力キ  
正徳三年

季春廿八鳥

基熙

松平薩摩守殿

200  
扣寫在江戸家老座

口上覺

薩州金山玉金引替之儀、元禄十一寅年より玉金位付之外三割増被仰付置、後藤庄三郎京都於御用場引替來申<sup>レ</sup>、然處金山之儀連々山之根戸深堀探、依場所水敷を切抜、又若段々之仕道を取拵<sup>レ</sup>付<sup>レ</sup>、此以前之入用とハ各別相増、其上近年米諸色共高直罷成、山稼之者共難堀續付、

前々より之本手外ニ表時々心付之銀米をも爲取、相稼<sup>レ</sup>様申付置<sup>レ</sup>、土中之寶を掘出<sup>レ</sup>儀ハ、世上重寶ニ御奉公ニ罷成事之様先年粗御沙汰爲有御座<sup>レ</sup>付、乍不勝手何とそ金山相募<sup>レ</sup>儀<sup>本マ</sup>と兼々申付儀御座<sup>レ</sup>得共、右通近年諸雜用多相掛、年々指銀相重<sup>レ</sup>付、今通ニ若先キ々存儘心付申付<sup>レ</sup>儀難達、山稼之者共漸々行散、出金ハ弥可致減少と、別<sup>レ</sup>氣之毒之儀御座<sup>レ</sup>、左<sup>レ</sup>得者只今迄折角申付置<sup>レ</sup>其詮々無御座、其上金氣若絶不申山方と相見得、本手さへ相續<sup>レ</sup>ハ、何れ出金ハ可有之様子<sup>レ</sup>故、旁以難捨置事共御座<sup>レ</sup>、依之玉金之引替三割増被仰付置<sup>レ</sup>外、今三割増被仰付被下度奉願<sup>レ</sup>、於其儀若其増分を委差足、金山不相衰様申付度奉存<sup>レ</sup>、以上、

朱力キ  
正徳三年 三月

松平薩摩守内(久明)  
鳴津大藏

(朱)

「薩州金山玉金引替三割増之外、今三割増之願書於江戸当三月廿九日金山方御用御聞被成<sup>レ</sup>、中山出雲守様江鳴津大藏より被差出<sup>レ</sup>、今晚出雲守様森川理右衛門被爲呼、右之願御吟味之上割増ニ而都合四割ニ被仰付<sup>レ</sup>、右之段後藤庄三郎方江被仰渡置<sup>レ</sup>旨被仰渡」

(表紙)

吉 貴 公 正 德 三 年 自 四 月 至 十 二 月

追 舊 記 雜 錄 卷 四 十 八

201 吉貴公御譜中

同年四月

家繼公御三元服於 武城、井伊掃部頭直該加冠、同月十一日、有二將軍 宣下任槐之儀式、吉貴在國聞之、以三使節奉賀、獻御太刀一腰、御馬一匹代金 十兩、天英院殿家宣公御台、亦被敍二位、奉賀之、以三使節有三奉獻、

202 正文在文庫

今度

將軍 宣下相濟外爲御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代

黄金十兩被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

朱力斗 正德三年 四月十五日

阿部豊後守 正喬判

井上河内守 正岑判

秋元但馬守 喬知判

土屋相摸守 政直判

(島津吉貴) 松平薩摩守殿

203 全上

如來教送無事同悦外、然亦今度就將軍

宣下、前攝政東武下向之事欣幸外、被示聞丁寧之至今祝

着外、謹言、

朱力斗 正德三年 孟夏十六

(近衛家久) (花押) No.4

(吉貴) 薩摩中將殿

204 全上

芳東落掌、其邊堅固之由承悦外、此方同前外、然亦來年

被隨順琉球人關東下向、依之當年參府延引之事、被蒙

嚴命之由、彼是珍重思給ひ、謹言、

朱カキ  
正徳三年 孟夏十六 (花押 No.4)

薩摩中將殿

吉貴公御譜中

正文在文庫

今度

一位様爲御昇進之御祝儀、以使者一種・御樽代被獻之候、  
遂披露ひ處、一段之御仕合ひ、恐く謹言、

朱カキ  
正徳三年 四月十九日

阿部豊後守 正喬判

井上河内守 正岑判

秋元但馬守 喬知判

土屋相摸守 政直判

松平薩摩守殿

全上

なをくよく申せとの御事に御座り、めてたくかし  
く、

御ふみ下されり、まつく

公方様 一位様御機嫌よく御座被成、めてたく思しめさ  
れりよし

一位様より御敍位の御しうき御もく禄(マ)のことくおくさま  
へ本マ御事かたしけなく思召りよし、御禮の通申上ま  
いらせり、御ねん入せられり御事に覺しめしり、よく申  
せとの御事に御座り、めてたくかし、

朱カキ  
正徳三年

嶋津將監殿 (久世) いは倉

嶋津帶刀殿 (仲休) かよ

御返事

吉貴公御譜中

同年四月二十八日、薩府城下役座地及自二下町札辻二至三築  
地、春屋南市廓境、土之宅地降し命爲三空地、其後自二一  
之丸二至三下屋敷前、又爲三空地、是爲三火除三豫稟三幕  
府蒙三允容一也、以三坤隅島津備前久達之宅地、爲三下屋  
敷圍之中、

吉貴公御譜中

正文在文庫

爲端午之賀儀、帷子單物十到來祝着<sub>レ</sub>、委曲阿部豐後守可述之<sub>レ</sub>也、

朱カキ

正徳三年

五月三日



薩摩中將殿

209

吉貴公御譜中

正文在文庫

芳翰披閱、三月廿日此地失火之處、於里亭無別條令悅<sub>レ</sub>、仍被述賀詞、殊目錄之通一種被相贈之、懇切之至令祝着<sub>レ</sub>也、

朱カキ

正徳三年

仲夏九日

基熙

薩摩中將殿

210

吉貴公御譜中

扨寫在家老座

口上覺

私領知琉球國之儀、大明洪武代より致進貢、寛文年中より接貢船差渡<sub>レ</sub>、前々ハ、銀高之御定<sub>レ</sub>無之<sub>レ</sub>處、貞享

年中ニ御定數被仰渡、進貢船之時<sub>レ</sub>銀八百四貫目、接貢

船之時<sub>レ</sub>銀四百貳貫目隔年ニ持渡來<sub>レ</sub>、去秋申上<sub>レ</sub>り通於

大清國<sub>レ</sub>正金銀<sub>ニ</sub>の用<sub>レ</sub>付、日本之古銀<sub>ニ</sub>吹拔<sub>レ</sub>り得<sub>レ</sub>る量

目減<sub>レ</sub>處、元禄年中之新銀<sub>ニ</sub>猶以相減<sub>レ</sub>旨、先年琉球中

山王より致訴詔候得共、日本一統通用之事<sub>レ</sub>故、了簡無

之旨申付置<sub>レ</sub>、然處寶永以來之新銀段々位惡數罷成、大

清<sub>ニ</sub>難持渡由訴申越<sub>レ</sub>、尤位惡數段<sub>ニ</sub>無紛事<sub>レ</sub>得共、可

申付様無之付、可罷成程<sub>ニ</sub>元禄銀取集可持渡旨、去辰年

迄<sub>ニ</sub>押<sub>レ</sub>り申付候得共、最早元禄銀私領内<sub>ニ</sub>透<sub>レ</sub>と無御座

<sub>レ</sub>、依之去秋吹替相願<sub>レ</sub>節、御尋之儀共<sub>ニ</sub>御座<sub>レ</sub>、其趣

<sub>ニ</sub>當春琉球<sub>ニ</sub>尋遣候間、申來次第可申上候、銀子持渡<sub>レ</sub>

儀<sub>ニ</sub>、先年御吟味之節具致吟味申出、貞享年中被相定<sub>レ</sub>

進貢・接貢料之銀年々沙汰仕、九・十月を限、琉球<sub>ニ</sub>差

渡、大清<sub>ニ</sub>十一月初比持渡候儀御座<sub>レ</sub>處、琉球<sub>ニ</sub>尋遣

<sub>レ</sub>儀申來<sub>レ</sub>、以後彼是壹所御答申出<sub>レ</sub>る<sub>ニ</sub>渡海之時節相

過、當巳年之接貢料必至と手支申<sub>レ</sub>、左<sub>レ</sub>り得<sub>レ</sub>る御代替<sub>ニ</sub>

付、中山王より御祝儀之使者并中山王自分繼目之御禮使

者等、來年召列參府仕<sub>レ</sub>節之獻上物、又使者・從者官服

等、於大清相調致支度<sub>レ</sub>之儀御座候處、右調物<sub>ニ</sub>難達儀

御座<sub>レ</sub>、琉球より大清<sub>ニ</sub>之勤懈難成譯御座<sub>レ</sub>所之委細<sub>ニ</sub>、

江戸留守用事申付置り家老嶋津大藏を以申上り間、被聞召届、去秋相願り通琉球に持渡り銀高之分、吹替被仰付被下り様相願申り、右之外去秋御尋之儀共老、琉球より申來次第可申出候、以上、

朱力キ

正徳三年 閏五月二日

松平薩摩守

211 吉貴公御譜中

正文在文庫

芳簡披覽、今度

將軍 宣下御任槐等令悦悦り、因茲被伸嘉義之趣、且如

目録被贈與懇篤之段祝着不斜り、謹言、

朱力キ

正徳三年

閏五月六日

基熙

松平薩摩守殿

212 吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見り、

公方様益御機嫌能被成御座、今度

御元服相濟候段被承、目出度被存由得其意り、依之被差

越使者候紙面之趣、各申談及 上聞候、恐々謹言、

朱力キ

正徳三年 閏五月十二日

阿部豊後守

正喬判

松平薩摩守殿

213 吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見り、

公方様益御機嫌能被成御座、今度

御元服相濟り段被承之、目出度被存由得其意り、紙面之

趣承届り、恐々謹言、

朱力キ

正徳三年 閏五月十二日

井伊掃部頭

直該判

松平薩摩守殿

214 全上

御札令披見り、

公方様益御機嫌能被成御座、今度

御元服相濟り段被承、目出度被存由得其意り、依之被差

越使者候紙面之趣令承知り、恐々謹言、

朱力キ

正徳三年 閏五月十三日

土屋相摸守

政直判

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、今度

將軍 宣下、其上御任槐之御規式首尾能相濟外之段被承

之、目出度被存旨得其意外、依之被差越使者外紙面之趣

各申談及言上外、恐々謹言、

阿部豊後守 正喬判

閏五月十六日

松平薩摩守殿

215 吉貴公御譜中

正文在文庫

華簡披覽、今度

將軍 宣下御昇進等目出思給外、因茲被伸賀義如目錄被

贈與祝着不少外、其邊弥安全珍重外、此方無吳事外、謹

言、

朱力年

正徳三年

閏五月十三日

薩摩中將殿

(近衛家久)

(花押 No.4)

216

全上

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、今度

御元服相濟候段被承之、目出度被存由得其意外、紙面之

趣令承知候、恐々謹言、

朱力年

正徳三年

閏五月十五日

本多中務大輔 忠良判  
間部越前守 詮房判

松平薩摩守殿

218

全上

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、今度

將軍 宣下、其上 御任槐之御規式首尾好相濟外段被承

之、目出度被存旨得其意外、紙面之趣令承知外、恐々謹

言、

朱力年

正徳三年

閏五月十六日

松平薩摩守殿

井伊掃部頭 直該判



全上

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、今度

將軍 宣下、其上 御任槐之御規式首尾好相濟外之段被

承之、目出度被存由得其意外、依之被差越使者外紙面之

趣令承知外、恐々謹言、

朱力キ  
正徳三年 閏五月十六日

土屋相摸守

政直判

松平薩摩守殿

全上

一簡落手、今度

將軍 宣下御任槐等周備同悦外、仍被伸賀辭如目錄被贈

與之、満足不斜外、謹言、

朱力キ  
正徳三年 閏月十六日

(近衛家因)  
(花押 No.3)

薩摩中將殿

全上

芳牒披見、先頃在府中當地火災之處、里第無難、仍被問

安否、且教一種投與之、不堪怡悦之至外、謹言、

朱力キ  
正徳三年 閏月十六日

薩摩中將殿

(花押 No.3)

全上

貴札致拜見外、

公方様倍御機嫌能被成御座

將軍 宣下御規式首尾好相濟、恐悦被思召之旨尤之御事

外、依之御紙面之趣承知仕候、恐惶謹言、

朱力キ  
正徳三年 閏五月十六日

久世大和守

重之判

松平薩摩守様

貴報

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、今度

將軍 宣下、其上 御任槐之御規式首尾能相濟外段被承

之、目出度被存旨得其意候、紙面之趣令承知外、恐々謹

言、

朱力キ  
正徳三年 閏五月廿二日

本多中務大輔

忠良判

全上

松平薩摩守殿

間部越前守  
詮房判

一筆致啓達外、然者 御家御庶流之面々苗字名乘之儀付  
而、今度御改旨御座外、此方家中ニ御庶流之苗字名乘  
來候者有之之間、今般其御家中に被 仰付旨委細可被  
仰知由、且又立花出雲守殿江戸屋舖作事料之儀ニ付而も、  
家老之者共は被仰聞度儀御座外條、用人ニ而及又者其外  
之者ニ而も壹人可差上之旨先日示預外付而、用人郡司庄  
之助と申者差上申之間、委細被仰合可被下外、爲其如是  
御座外、恐惶謹言、

朱力キ  
正徳三年 閏五月廿三日

鳴津内記様  
(久世)

鳴津將監様  
(久世)

鳴津帶刀様  
(仲休)

種子嶋正様  
(久世)

肝付主殿様  
(兼助)

人々御中

(佐土原城主)  
鳴津淡路守  
惟久判

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、四月十一日

將軍 宣下、爲御祝儀諸御禮相濟、且亦

一位様御昇進之儀被承之、目出度被存由得其意外、依之

被差越使者外紙面之趣各申談及 上聞候、恐々謹言、

朱力キ  
正徳三年 閏五月廿五日

松平薩摩守殿

阿部豊後守  
正喬判

全上

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、四月十一日

將軍 宣下、爲御祝儀諸御禮相濟、且又

一位様御昇進之儀被承之、目出度被存由得其意外、紙面

之趣承届外、恐々謹言、

朱力キ  
正徳三年 閏五月廿五日

松平薩摩守殿

井伊掃部頭  
直該判

227

全上

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、四月十一日

將軍 宣下、爲御祝儀諸御禮相濟、且又

一位様御昇進之儀被承之、目出度被存由得其意外、依之

被差越使者外紙面之趣令承知外、恐々謹言、

朱力キ

正徳三年

閏五月廿五日

土屋相摸守

政直判

松平薩摩守殿

228

全上

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、四月十一日

將軍 宣下、爲御祝儀諸御禮相濟、且又

一位様御昇進之儀被承、目出度被存由得其意外、紙面之

趣承届外、恐々謹言、

朱力キ

正徳三年

閏五月廿七日

本多中務大輔

忠良判

間部越前守

詮房判

松平薩摩守殿

229

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又

將軍 宣下之御祝儀、妻女拜領之、難有由得其意外、依

之爲御禮被差越使者外紙面之趣及 上聞候、恐々謹言、

朱力キ

正徳三年

閏五月廿九日

井上河内守

正岑判

松平薩摩守殿

230

吉貴公御譜中

先<sub>レ</sub>是吉貴定<sub>二</sub>尊臣之稱號及諱字格式<sub>一</sub>、以故至<sub>三</sub>日州佐土原城主島津淡路守惟久之家士<sub>一</sub>、亦傳<sub>下</sub>可<sub>レ</sub>準<sub>三</sub>其格<sub>二</sub>之事上、往來之尺素筆記詳<sub>二</sub>于後<sub>一</sub>、

231

正文在文庫

御家數百年御繁榮故、御氏族之枝葉數多<sub>二</sub>相別、其中

ニ老漸々致衰微、當時御家之御稱號又老御家之御字名

乘<sub>レ</sub>外<sub>レ</sub>老不成合之者及有之付、此節段<sub>二</sub>格式<sub>一</sub>を被改<sub>レ</sub>外、

依之嶋津淡路守殿御家中及此御家中<sub>レ</sub>此度被仰付<sub>レ</sub>趣

を以、可被仰付旨可申上由、比志嶋隼人<sub>(編原)</sub>を以被仰出<sub>レ</sub>

御當家御元祖 忠久様以來、五百年來御領國表不相替

鳴津淡路守殿  
御宿所

付、淡路守殿御家來可被差越旨、以飛札申上、御用人郡司庄之助被差越り付、正徳三年六月二日、庄之助御城敷舞臺に被召出、嶋津内記・嶋津將監・嶋津帶刀・肝付主殿列座仕、右之儀付淡路守殿に 太守様より被遣り御書并御家老共より之書付三通帶刀相渡、委細之儀申渡り次第、前後之書通左に記、

但書付迄の者難得其意儀及可有之の間、御記録奉行に可致對談旨申渡、於杉之間御記録奉行肥後仁右衛門出會、庄之助に申傳り、

一筆令啓り、其方弥無吳之旨珍重存り、然者當家之儀如被存、五百年來領國表不相替、致繁榮來り、依之氏族之枝葉多相別り、其中に者漸く致衰微、稱號を名乘り而者不成合之者及有之付、今度段々格式を相改申付り、其許へも右躰之者於有之者、此方之趣に應、被申付可然り、委細者家老共より可申達り、恐く、

六月朔日 吉貴

御家御繁榮候故、御氏族之枝葉數多に相別、其中に者漸く致衰微、當時嶋津之御稱號又者御家之御字名乘り而者不成合之者及有之付、今度段々格式を被改り、

覺

一於御家中大身分之衆者、二男迄者御稱號并久之御字名乘可申り、三男以下者御稱號御家之御字名乘申間敷り、右三男以下名字之號、又名乘之字、此節新に拜領被仰付り名乘之字者、其家元祖實名之字を被下り、

一所持・一所持格・寄合・寄合並之者之内、御代々御子家筋嫡流之者、御城下に罷居り者ハ、久之御字又者名乘來り家號名乘可申り、且又嶋津之御稱號名乘來り者、二男以下者此節新に別家號拜領被仰付り、實名之儀及其家元祖實名之字を拜領被 仰付り、右格式家之外に及、御子家筋嫡流之者ハ右同前二被仰付り、

一右同前之筋目に別家號を名乘來り者及、嫡子計者久之御字名乘可申り、二男以下者元祖實名之字拜領被仰付り、

一御子筋之家號又者町田氏・伊集院氏之家號并御家之御字、諸士家中并足輕以下に名乘來り者、向後名申間鋪り、御子筋嫡流之家、又ハ町田・伊集院嫡家之家中二、

其家庶流之者致隨身來り者ハ、嫡子迄ハ家號迄を可名乘り、御家之御字者名乘せ間敷り、其一家中ニ家號を名乘來り者餘多有之り者、其中兄筋之者之嫡子迄を名乘せ、弟筋之者ニ者家號及名乘せ間敷り、又者其家を離他ニ致奉公り時者勿論右家號及名乘間敷り、

一諸士家來之内ニ及者其家ニ御附人筋之者、又者先祖共より仕來、爲抽働爲有之者之子孫御子筋之家號、又者町田・伊集院等之家號名乘來り者ハ、嫡子迄者家號迄を名乘せ可申り、其一家中ニ同名之者餘多有之時ハ、兄筋之者計嫡子迄ハ家號名乘せ可申候、其家を離、他ニ致奉公り者、最前之家號及名乘せ間敷り、

一二男又者三男以下、此節可改家號、又者實名之字者其家ニ之嫡流之者に拜領被仰付、庶流之者にハ嫡流より相傳り様被仰付り、

一當 公方様御實名之字并頼之字・朝之字・忠之字向後於御家中實名之字ニ用間敷り、

一從 家久様 綱貴様御四代御實名之字、當 御代ニ者、於御家中實名之字ニ用間敷り、

右之通此節御家中に被仰付り間、其御元御家中之儀表右之趣を以、被仰付り様私共より可申上旨

太守様被 仰出り、以上、

正徳三年六月朔日

肝付主殿判

種子嶋彈正判

嶋津帶刀判

嶋津將監判

嶋津内記判

嶋津淡路守殿

(03)

嶋津家御代々之御子別號之覺

川上 佐多 新納

樺山 北郷 桂

喜入 山田 和泉

大嶋 義岡 迫水

龜山 阿蘇谷 石坂

碓山 相馬

右十七家之外町田・伊集院者、御直之御子別同格り、

以上

正徳三年六月朔日

(04)

御氏族之家々庶流之覺

伊作家庶流 恒吉 若松 西  
 川上家庶流 小原 山口  
 越前嶋津庶流 知覽 宇宿  
 薩州家庶流 大田 大野 吉利  
 寺山 西川  
 豐州家庶流 平山  
 佐多家庶流 伊佐敷  
 義岡家庶流 志和地  
 迫水家庶流 吉滿  
 町田家庶流 阿多  
 伊集院家庶流

伊鹿倉 日置 古垣  
 春成 麥生田 有屋田  
 大重 黒葛原 土橋  
 飛松或富松 四元 大田  
 南郷 松下 丸田  
 堀内  
 以上三拾三家  
 正徳三年六月朔日

(05)

貴札拜見仕り、然者御用之儀御座り付、御用人可被遣旨、  
 太守様御意り故先日其段申上り付、此節御用人郡司庄之  
 助被差越、被示下趣承知仕り、依之御書を以被仰遣、私  
 共よりも委細可申上旨被仰付、書付を以庄之助に申達り、  
 且又、立花出雲守様御作事料之儀、是又、庄之助に委細  
 申達り、旁被聞召届此上宜様可被仰付り、恐惶謹言、

六月二日

兼柄(肝付)  
 久基(種子島)  
 仲休(島津)  
 久當(島津)  
 久貫(島津)

嶋津淡路守様

232 全御譜中

正文在文庫

御札令披見候、就酷暑之節

公方様御機嫌之御様躰、以使者被相同外、益御安全御儀候間可御心易外、随而琉球布十卷・砂糖漬天門冬一器・赤貝塩辛一器・琉球泡盛酒二壺被獻之外、各申談遂披露候處、一段之御仕合外、恐々謹言、

朱力キ

正徳三年 六月四日

松平薩摩守殿

井上河内守

正岑判

233 御札令披見外、就酷暑之節

公方様御機嫌之御様躰被相同之外、益御安全御儀外間可御心易候、随而目錄之通被獻之外、紙面之趣令承知外、恐々謹言、

朱力キ

正徳三年 六月四日

松平薩摩守殿

井伊掃部頭

直該判

234 全上

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又將軍 宣下、御祝儀妻女拜領之、難有由紙面之趣令承知外、恐々謹言、

朱力キ

正徳三年 六月五日

松平薩摩守殿

本多中務大輔

忠良判

間部越前守

詮房判

235

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、就酷暑之節

公方様御機嫌之御様躰被相同之外、益御安全御儀外間可御心易候、随而目錄之通被獻之外、紙面之趣承届外、恐々謹言、

朱力キ

正徳三年 六月七日

松平薩摩守殿

本多中務大輔

忠良判

間部越前守

詮房判

吉貴公御譜中

正文在文庫

(近衛家忠)

芳簡披覽、如來教前攝政驛路無恙歸京欣然之事、因茲爲賀義如目錄被贈與祝着不淺、其邊益安全珍重、此方無吳事、謹言、

林鐘九

(花押 No.4)

薩摩中將殿

吉貴公御譜中

正文在文庫

川上

嫡家川上久馬

佐多

(佐多家)

新納

同 島津備前殿

榊山

同 新納四郎左衛門

北郷

同 榊山助太郎

町田

同 嶋津筑後

伊集

同 町田郷九郎

山田

同 伊集院藏人

同

同 山田七郎右衛門

右家號之者、當時家中ニ罷居、又ハ組ニ不被入置者

ハ、依其家御直別之家號相避、別家號ニ被相改事、

右躰之者、名字可改旨申出、ハ、於嫡家遂吟味可改名字可申出、此段右家之嫡家ニ可申渡、以上、

右巳六月十六日申渡之

取次  
相良權太夫

吉貴公御譜中

扨寫在江戸家老座

一 琉球より唐に進貢之儀、三百四拾年以前大明洪武年中より勤來、

一 薩摩守家ニ其以前より致聘禮來、別る當薩摩守十

二代之祖陸奥守忠國代

公方普廣院義教公より琉球國拜領仕、依之永享年中

より薩摩守家ニ急度相隨、年々貢物差渡、然處薩摩

中納言家久代 權現様御代初之御禮可申上旨、以使札

申付、不致領掌付

權現様ニ言上仕、慶長十四年三月琉球に渡口之湊、山

川と申所迄、家久出張下知仕、先手差渡、琉球入

口之於嶋防戦付、琉球人百餘人打殺段々責掛、同四

月海陸方中山王居城首里之城取掛申、中山王降參

仕付、先手之者共則中山王を召捕、同五月薩摩に列

來、依之早速



兩御所様は言上仕仕處、御感不斜、則御感狀被下、琉球

國永ク家久ニ被下之旨被 仰出、其上家久養父三位入

道龍伯并家久實父宰相入道惟新(義弘)に及御感狀被下之、

一同翌年五月、家久薩州を罷立 御代初之爲御禮中山王(尚孝)

を召連、同八月六日駿府ニ參着仕仕、道中之御馳走朝

鮮人來朝之節と可爲同前旨、宿に被仰付、同八日

家久中山王を召列登城仕仕、中山王より純子百卷(總)・羅

紗拾二尋・太平布貳百疋・芭蕉百卷・白銀壹萬兩・御

太刀一腰獻上仕仕、家久より及御太刀・馬代其外品、

獻上仕仕處、當御代始琉球國を隨、剩其王を早速率來

外事、家久無比類働之由 上意に及蒙 御感外、同十

八日御饗應被下、御酒宴之上、常陸介様御鶴様御座を(頼重)

被爲立、御仕舞被遊、其上貞宗之御腰物大小家久ニ被

下之、同十九日御暇相濟、翌廿日中山王召列、駿府を

罷立江戸に參上仕仕、

一同廿五日江戸着仕仕處、段々 上使被成下、同廿七日

又 上使を以御米千俵拜領仕仕、同廿八日家久中山王

を召列登 城仕仕、中山王より純子百卷・虎之皮拾枚・

太平布貳百疋・蕉布百卷・白銀壹萬兩・長光之御太刀

獻上

若君様は御太刀一腰・純子五十卷・太平布百疋・蕉布

五十卷差上、家久より及御太刀・馬代其外品、獻上

仕仕、同九月三日登 城御饗應被下、同七日於御數寄

屋家久ニ御手自御茶被下、同十二日登 城仕、同十六

日ニ及 御城に被爲召、御饗應之上加賀貞宗之御腰物

并御馬拜領之、且又、其日櫻田之屋敷被下之、直御暇

被 仰出、同廿日中山王召列江戸を罷立歸國仕仕、尤

御下知を以中山王儀其年歸國申付、

一右之以後者

公方様御代替

若君様御誕生并中山王自分繼目之節者、中山王より江

戸に使者差上來、其節ハ每度薩摩守召列參府仕仕、

四年以前寅年迄六度、中山王使者差上、且又、中山

王繼目之節者不及窺、薩摩守より可申付旨

太猷院様被 仰出仕付、薩摩守より繼目申付上、其

段御届申上來、右件之故を以

御代々様より被下置、御判物ニ及、薩摩・大隅并日

向諸縣郡・琉球國全可致領知旨被爲記、

一慶長之比者唐之商船日本に之通融相止、外程之事ニ及不

自由御座外故、琉球より唐に可申談旨

權現様より家久に 御説之趣有之

公命之旨を以、於薩府書翰之草案相調、中山王より大明に使翰差渡させり、其趣者、琉球國と日本薩摩者隣國の千八百里を隔り故、方物を捧來候處、頃年怠り付、從薩州兵を差渡、中山王被補薩州に罷渡り得共、

國主家久依慈悲本國に相歸り、其節家久申付り者、此年來日本唐商船通融無之の間、日本之船を唐に遣り敷、又者唐之商船を琉球迄可遣敷、又者使を遣、年々和漢之貨物を致交易り敷、此三ヶ條及於無許容者、日本西海道數萬之軍兵を大明に差渡、日本に近キ所憂あるへし、此段者日本

將軍之 思召に候間、中山王方可申越旨申付り、右三ヶ條之内一ヶ條被差免りハ、吾琉球國大明之德化に沐し、且又、日本之夙志をも可遂旨、達る爲願り處、於大明承之、琉球國、日本に隨、又大明に右之通致通達り儀、内々ハ殊之外疑、段々及吟味、獻り貢物之内、於日本調り品者不致受納差返し、十ヶ年過り可致渡海由申付り、然者琉球之儀大唐附庸之國にあり處、日本に表隨り故を以、疑を受候段、別り難儀存、別心無之趣、其後様々申披候得共、五ヶ年一度之進貢を申

付り、雖然以前に引替り通融を疎に鉢相見得、不安

堵り故、無表裏之旨、又々及再三訴歎キ漸疑を散し、古來之通隔年之進貢申付、於于今其通動來り、右之節中山王より大明に遣り書翰之扣并大明天子より之敕書等寫有之り、且又從

台德院様御内書を以被 仰下、山口駿河守様より以御狀御申越之旨等も御座り、

一明之代之末、彼地兵亂罷成り節、此砌進貢船より品物通融仕り儀奉伺り處、琉球之儀者、如有來可令賣買之旨、正德三年六月、松平伊豆守様(信綱)・阿部豊後守様(忠孝)・阿部對馬守様御連名之御奉書被下置り、

一寛文年中、大清に差渡り進貢船、東寧之洋に逢賊船、荷物船共ニ被押取、唐之地に被追放、乍漸致歸國り、右之段薩州に申越り付、御老中様并長崎御奉行に御届申上り處、於長崎東寧船之輩に被逐御穿鑿、海賊無紛に付、爲過料白銀三百貫目唐人より御出させ、中山王に被下、唐人之身命者御助け儀御座り、右に付稻葉美濃守様・板倉内膳正様より之御奉書有之り、  
一進貢船・接貢船より持渡り銀子、前々者量數之御定無之り處、貞享年中大久保故加賀守様(忠朝)被仰渡り者、日

本之金銀吳國に相渡り儀、今度被遂御吟味、長崎口・對馬口金高被相減り、依之琉球より唐に差渡り銀子之儀及可被相減り、然共琉球之儀者古來より爲進貢料、銀子差渡事り故、減少之員數上より者何程と難被仰付候間、此方より吟味仕、少くも可相減旨被仰付り付、具遂吟味り處、以前より者各別銀入之事成來り故、前々之員數を減り儀者、曾も罷成由、琉球人申り得共、乍其上委吟味仕、其時分持渡り金高、右數之内、千貳百兩押り相減、進貢船差渡候節者壹萬三千四百兩、接貢船差渡り年ハ六千七百兩宛持渡り筋御免無之り得者、進貢難相勤段申出り處、申出り員數可相渡旨被仰渡り、右之次第り故、此上金高相減り儀者曾も罷成事御座り、御免之量數ハ金高より被定置り得共、西國之儀金子不自由り故、壹兩を銀六拾目替之積り、進貢船之時者銀八百四貫目、接貢船之時ハ四百貳貫目持渡申り、

一大清天子に直金銀を獻しり事ハ無御座り、錫・銅・硫黃を進貢仕り、官人共は禮銀遣り外に、品物及進物仕、又滯留中諸用之品表有之に付、其品々上方・薩州に買調、琉球之產物取添持渡申り、尤右品物代ハ御

定金高之外に、勿論大清に者不持渡銀子に御座り、近年諸物高直に付、此品物代表大分相増申り、

一進貢船持渡り銀子八百四貫目之内、三百五拾貫目之前後、於大清段に官人への禮銀又者運上銀并滯留中雜料に仕、其餘銀に藥種・糸・端物其外、於琉球事欠り品買取申り、

一接貢船之儀者差渡り進貢使、海陸長途故買期相滯、又者天子より之敕書・贈物等中山王頂戴及延引り儀毎度有之、對清朝緩急之筋に罷成候條、接貢使差渡敕書并贈物等可接面旨大清より申付、進貢之翌年接貢使福建迄差渡申り、北京に者不参り故、進貢船之銀高半分に諸事相仕廻申り、

一右持渡り御定數銀子調り儀者、琉球人薩州に罷渡、町人共は致借銀り、其内難達分者、依願薩摩守藏銀を借遣り、右借銀返済者糸・端物を薩州に持來、銀主へ相渡又上方に相濟、此代銀を以て返辨仕り、

一於大清者正金銀に用り付、日本之古銀及吹拔り得者、量目減申り處、元禄年中に之新銀者、猶相減不勝手り由、先年中山王より致訴詔り得共、日本一統通融之事り故、此方に簡無之由申付置り、然處寶永以來之新銀段

く位惡鋪罷成、大分致不足難儀仕外條、何とそ可加了簡旨重の訴申外、位惡敷段者無紛事外得共、此上可申付様無御座、薩州の元禄銀致才覺、不足之分者寶永銀取加可持渡、急度申渡候付、一往持渡於大清吹抜外處、寶永銀者正銀讒有之付、此躰の者向後進貢使差渡外儀何共難成外、進貢及懈怠外ハ、何様之儀歎可致到來と、別の難儀存外間、何とそ了簡を頼外、去夏以使者訴詔申越外、願之旨無餘儀外故、薩摩守領内人別ニ元禄銀相改外得共致不足外、然共、外可申付筋無之故、寶永銀を又々取加可持渡旨、押外申付外處、去辰年迄者無是非持渡申外、勿論此以後新銀取加持渡外の者、乍漸表相調可申了簡絶の無之、此躰の者當年より大清之勤懈怠仕外無御座外條、此上可加懈怠旨偏願申外、然者當已年接貢料可差渡、元禄銀最早薩摩守領分ニ者無之、何共無了簡次第御座外、

一慶長年中依 御下知、琉球國日本に相隨外段、中山王より大明に申越させ外節者、殊之外疑乍漸申斷進貢致來外處、大清之代移外の者各別ニ引替、日本に致通融外段者乍存、何様之内慮外哉、官人共より者日本通融之沙汰不仕、進貢使之取持、明之代よりハ會釋段々了

寧申付、琉球より誠をいたし、不懈外ハ、寵愛すへし、萬里を遠しとせず、使を以貢物を備る段忠節之至ニ外など、進貢使歸國之度每懇成敕書差下、使者・從者等迄賜物有之、中山王より者直皇帝に表文を捧、北京・福建之官人に者互咨文を取替シ、且又中山王代替之節者、大清より翰林學士を封王使遣、武官を者相添、惣人數五六百人、又者七八百人差渡、冠并官服其外之品々禮物有之、急度規式執行、中山先王之廟所に者敕使相越、祭等旁懇懃之仕形ニ御座外、右之通親キ躰ニ者外得共、進貢・接貢使罷渡外節者、運上銀等兼而定數を不究置、強申懸又ハ官人共之禮銀者恣ニ申懸貪取、買物之儀も、旅宿に出入之商人を定置、我儘賣渡、早竟銀子持渡候儀を、琉球國第一之勤之様仕懸外付、漸間を合置外、且又封王使罷渡外節者商物持來、押外高直賣渡申外、段々右之仕形ニ外故、品物を以償外筋ニ者罷成由琉球人申外、右之次第外處、銀子當分之躰ニる者、琉球人申外通大清之勤一定懈怠可罷成外、然時者中山王進退必至と差迫申積御座外、琉球人於大清通達之程兼の難計事外處、決る勤懈怠ニ罷成外ハ、大清に何様之筋ニ可申哉、此上之儀何共不能了簡事御

座外、依之元禄銀之位吹替被仰付被下度旨、去秋薩摩守爲奉願事御座外、

以上

朱カキ  
正徳三年  
六月廿五日

松平薩摩守内 欠明  
嶋津大藏

吉貴公御譜中

扣寛在家老座

口上覺

一琉球より大清に持渡り銀高之分、元禄銀之位に吹替被仰付被下度旨、去秋河内守様御用番之節、薩摩守より相願置り、然者當年者接貢船差渡り年を御座り處、接貢料必至と手支申り付、去年願置り通吹替被仰付被下り様、此節段々相願申趣御座り、

一吹替不被下り得者、接貢船差上り外無御座り、左り得ハ、中山王進退必至と差迫申積御座り、及其儀りハ、末々之儀何様可相治哉、薩摩守不能了簡、乍領内吳國に相懸、私ならさる心遣之譯及御座り、子細之儀私ら方具可申上旨、薩摩守申付、委細別紙書上申り、右付る不叶儀御座り間、右之趣を以何分と成合り様、御取成可被下り、以上、

朱カキ  
正徳三年  
六月廿五日

松平薩摩守内  
嶋津大藏

吉貴公御譜中

頃年本朝所吹出之新銀、較古銀其位甚卑故、琉球國進接貢大清國之料頗及不足垂廢貢典、依是去歲壬辰夏中山王敬馳价訴吹替貢料古銀位賜之於吉貴上、然和朝一統之通融而吉貴於國無如何、同八月二十八日具錄事狀請製於

幕府、同十月三日、執政井上正岑書五箇條、問琉球國入貢中國之次序上、乃二條筆記答之、三條難詳於薩州一故、問琉球國當重告報之二云、然今年交巳以欲後接貢之期一故、聞五月二日再稟于幕府、同七月二日被允容之、乃招芝第留守之家老島津大藏久明於正岑第一、傳二件旨、

扣寛在家老座

相札  
松平薩摩守家來

元禄銀者當時此方を吹出儀及無之り得共、琉球に相渡り銀高之事者、去年薩摩守願之趣 前御代達 上聞、且亦琉球封王使のために有之上者、願之通先元禄銀之位

吹替可被 仰付外條、可被得其意外、以上、

朱力キ  
正德三年 七月

吉貴公御譜中

正文在郷原金大夫

宜稱

郷原金大夫

兵雄

正德三巳七月廿二日



全御譜中

正文在文庫

一頼之字・朝之字・忠之字ハ、向後於御家中名乗之字ニ

一切用申間敷外、

一當 公方様御名乗之字、於御家中名乗之字ニ一切用申

間敷外、

一從 家久公至 綱貴公、御名乗之字御當代ニ考、於御

家中名乗之字ニ一切用申間敷外、

一足輕并諸座附又ハ諸士之家來、又考寺門前・町・浦・

在郷之内

御家・御氏族之端と申傳外由ニ而、御直別等之家號、  
又ハ御家之字、名乗來外者有之由外、向後左ニ相記外  
家號又ハ御家之字名乗申間敷外、

川上 佐多 新納

樺山 北郷 桂

喜入 町田 伊集院

龜山 山田 碓山

大嶋 義岡 迫水

阿蘇谷 相馬 石坂

一御直別又ハ伊集院・町田家杯之家中、隨同名筋之者家  
來ニ罷成、今迄致隨身來主人之名字名乗來外者ハ、其  
家中ニ而其家筋之嫡家之嫡子迄ハ主人之家號被遊御免  
外、勿論其家を罷出、他家ニ致奉公外節考、右之家號  
名乗申間敷外、

一諸士・家來之内、無紛其主人家ニ御附人筋之者、又ハ  
其家ニ罷在、前々御奉公之筋を以、爲抽働無紛者ハ、  
今迄名乗來外御直別又ハ伊集院・町田等之家號ニ而及、  
其者嫡流之嫡子迄ハ被遊御免外、勿論他家ニ致奉公外  
節ハ、是又右之家號名乗申間敷外、

右之通被 仰出外間、承知仕堅固可相守外、尤外城考

地頭、私領老領主より申渡、家來共之儀老主人より可申聞ひ、此旨與中に可被申渡者也、

但座に及此旨支配中に可被申渡旨同前に申渡、

巳七月廿五日

御家老座

七組

御勝手方

御下屋鋪方

大御目附座

正文在文庫

爲八朔之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被獻之、遂披露候之處一段之御仕合、恐々謹言、

朱カキ

正徳三年

八月三日

阿部豊後守

正審判

井上河内守

正岑判

秋元但馬守

喬知判

松平薩摩守殿

扣寫在家老座

一筆致啓上、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦奉存、然老私領知琉

球國に相渡進貢・接貢料之銀子、吹替之願申上、

今度願之通被 仰渡、於私及安堵仕忝次第奉存、右御

禮爲可申上呈使札、恐惶、

朱カキ

正徳三年

八月三日

御名

井伊掃部頭様

人、

扣寫在家老座

一筆致啓上、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦奉存、然老私領知琉

球國に相渡候進貢・接貢料之銀子、吹替之願申上、

今度願之通被仰渡、於私及安堵仕忝次第奉存、右御禮

爲可申上呈使札、恐惶、

八月三日

御名

土屋相摸守様

秋元但馬守様

大久保加賀守様

井上河内守様

阿部豊後守様

人々

扣寫在家老座

一筆致啓上候、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悅奉存外、然者私領知琉球國に相渡り進貢・接貢料之銀子、吹替之願申上り處に、今度願之通被仰渡、於私表安堵仕忝次第奉存外、右御禮爲可申上呈使札外、恐惶、

朱力キ 正徳三年 八月三日 御名

間部越前守様

本多中務大輔様

人々

吉貴公御譜中

正文在文庫

一筆致啓達外、

中將様益御機嫌能被成御座と珍重之御儀奉存外、貴様御堅固可爲御勤と珍重存外、然者 御家御庶流之者之儀に付、先頃被 仰下り通、私家頼共相改、今度貴様迄先

吉貴公御譜中

正文在文庫

此節家相改外付面々申出覺

但馬守久雄弟鳴津右京嫡孫

鳴津采女

本家於鹿兒嶋樺山助太郎殿

樺山清右衛門

本家於鹿兒嶋伊集院藏人殿

伊集院三右衛門

於福山戰死新納又八郎爲跡目

新納相續實老嶋津右京次男

新納隼人

本家於鹿兒嶋伊集院藏人殿

伊集院權之助

當時番頭

入御内見外間、何分に表思召寄被仰聞可被下外、且又、家來澁谷太左衛門と申者、他家之苗字に御座外得共、前々御家之字名乘來外に付、私代に表右之趣

大玄院様編註に奉窺、只今迄久之御字名乘申外、此節御改に付、他家之苗字に御座外得者、名乗字遠慮仕外様に可申付哉、爲御内談如此御座外、委細御指圖頼存外、恐惶謹言、

朱力キ 正徳三年 八月五日 鳴津淡路守 惟久判

鳴津帶刀様

人々御中



右庶子家

當時取次番  
伊集院半左衛門

本家於鹿兒嶋町田孫七殿

並騎馬  
町田城之助  
中小姓

本家於阿多外城山田外記殿

山田次郎兵衛

於鹿兒嶋丸田半左衛門忠倚一

中小姓

流ニゐ伊集院名乘來外

伊集院直右衛門

本家於鹿兒嶋樺山助太郎殿

歩行士  
樺山彦左衛門

本家垂水之住人堀内勝兵衛殿

歩行上  
堀内喜兵衛

右之面々、久之御字代々名乘來外者共ニ御座外、以上、

朱力キ  
正徳三年

正文在文庫

本家不知面々覺

本家不知、垂水より罷出外町田

惟久

隼人家

差勝之末子赤次右衛門養子  
町田權七郎

本家不知、元祖忠光より相別レ十四

代目助左衛門忠長其子孫孫右衛門

久綱代佐土原に罷越外家

當時取次番  
町田孫左衛門  
當時取次番  
町田彦之進

右庶子家

本家不知、新納四郎左衛門時久より別レ

來外由、曾祖父又兵衛と申者代迄ハ、

鹿兒嶋新納家より問合御座外由

歩行士

申傳外家

新納八兵衛

右庶子家

茶道  
新納正竹

本家元祖不知、於福山戰死石谷因

歩行士

幡跡

町田源太左衛門

右庶子家

歩行士  
町田新左衛門

本家不知、宿祖忠秀常陸介より代々

宇宿名乘來外由

並騎馬  
宇宿八彌  
中小姓

本家元祖不知

春成十郎左衛門

本家不知、元祖者伊作忠長四男新三郎

久光と申傳也、其後恒吉下總と申者伊

東三位殿没落後飢肥御守護嶋津豊後守

殿に御附、坂谷之地頭職を勤、其子上

總と申者、是者其以後伊勢兵部少輔殿

に御附、細江村・浮田村・入野村・

綾ノ南俣と申所、右四ヶ所之御代官を

勤申外由申傳外家

歩行士  
恒吉清左衛門  
中小姓

右弟家

右清左衛門庶子家

右同

歩行士  
恒吉茂左衛門  
恒吉紋兵衛

元祖不知、本家駝と相知不申外、祖父

才右衛門と申者代迄ハ、於鹿兒嶋西左

京殿と問合御座外由申傳外家

步行士

西彦左衛門

步行士

恒吉兵右衛門

本家元祖駝と不知

(籠)

本家元祖不知、大隅おとり外城之内中

津川ニ恒吉次郎兵衛と申一門居住ニ由、

十五・六ヶ年以前迄ハ折々書通等仕候

由、彼次郎兵衛家本末之儀者相知レ不

申外由申傳外家

步行士

恒吉小左衛門

步行士

恒吉平右衛門

右庶子家

右同

步行士

恒吉彌七左衛門

職人

恒吉次右衛門

右同

足輕

恒吉加左衛門

此者家之儀、當時大坂に遣置外付る不

相知外、追る相次第可得御意外

步行士

松下善左衛門

足輕小頭

恒吉權左衛門

本家元祖不知

右同

足輕

恒吉加兵衛

右之面々、久之御字代々名乘來外者共ニ由御座外、此節

相改外付る、申出外趣頭書ニ仕、懸御目外、以上、

朱力

正徳三年

251

正文在文庫

覺

一今度被 仰出外嶋津家 御代々御子別號并御氏族之家

々段々格式を御改、御家中に被 仰渡外、此方家中之

儀右之趣を以可申付旨奉畏外、

一當 公方様御實名之字并頼之字・朝之字・忠之字、向

後於御家中實名之字ニ御停止被成外、

一從 家久様至 綱貴様御四代、御實名之字當御代ニ者

於御家中、實名之字ニ御停止被成外、

右兩條之通此方於家中及可申付外、

一此方於家中及嶋津之御稱號并御氏族之家號名乘來外者

共は、御書付之趣を以、急度可申付外、御子別之家號、

町田・伊集院之家號、騎馬列以下輕士ニ及名乘來外者

有之外、

一御子別之家號、雖爲輕士由緒有之輩は者、家號計差免

可申哉、且亦御氏族之家々庶流之家號、是又由緒有之

輩は者足輕等ニ及家號計者名乘せ可申哉、御差圖次第

可申付外、

一右之面々當時召仕外格々別紙書付、各迄入御披見外、

一私高祖父、曾祖父代他家方召抱外者共、子孫御子別之

家號、御氏族庶流之家號、他姓ニ面名乘來外者、此方

家中騎馬列以下輕士并足輕等迄段々有之外、是又如何

可申付哉、右段々何分ニ表御差圖被成可被下外、其内

太守様被達 貴聞儀共御座外者、以御序宜御取成可被

下外、頼入存外、以上、

朱力年

正徳三年

月日

鳴津淡路守印

鳴津内記殿

鳴津將監殿

鳴津帶刀殿

種子島彈正殿

肝付主殿殿

正文在文庫

覺

一鳴津采女嫡子迄者御稱號并久之御字無別儀、至二男者

御氏族家號之内を以、苗字改之、久之御字免許之、三

男より八家號實名共ニ改可申付と存外、

一樺山清右衛門嫡子迄ハ久之御字免許之、至二男・三男

者實名之字改之、家號計者名乗せ可申哉、

一伊集院三右衛門嫡子迄ハ、久之御字免許之、至二男・

三男者右同然可申付哉、

一新納隼人嫡子迄者久之御字免許之、至二男・三男者右

同然可申付哉、

右之者共此方ニ面重立召仕外付、久之御字御免許之儀

奉窺之度外、何分ニ表御指南被成可被下外、以上、

朱力年

正徳三年

八月五日

鳴津淡路守

鳴津帶刀様

吉貴公御譜中

正文在文庫

貴簡拜見仕外、薩摩國七嶋之内(大島郡)方瀬嶋江、去年十一月

十四日歸唐之廣南船一艘漂着、碇を卸外、其節西風烈、

船出外儀難成、陸江番人附置外處、唐人三人陸江上、水

薪等相願外付、所之者方相達之、同十六日出帆外旨、彼

嶋從在番之方申越之外、委細者御家來中方被申聞外由、

被入御念御紙面之趣致承知外、恐惶謹言、

朱力キ  
正徳三年  
八月十三日

(長崎奉行)  
大岡備前守  
清平判

(同)  
駒木根肥後守  
政方判

松平薩摩守様  
貴報

254  
全上

御札令披見外、

公方様御機嫌之御様躰被相同之外、益御安全御儀外間可

御心易候、随而串鮑一箱被獻之外、各申談遂披露外處一

段之御仕合外、恐々謹言、

朱力キ  
正徳三年  
八月十三日

阿部豊後守  
正喬判

松平薩摩守殿

全上

御札令披見外、

公方様御機嫌之御様躰被相同之候、益御安全之御事外間

可御心易外、随而御看一種被獻之外、紙面趣令承知外、

恐々謹言、

朱力キ  
正徳三年  
八月十五日

井伊掃部頭  
直該判

256  
吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様御機嫌之御様躰被相同之外、益御勇健御事外間可

御心易候、随而御看一種被獻之外、紙面之趣令承知候、

恐々謹言、

朱力キ  
正徳三年  
八月十六日

本多中務大輔  
忠良判

間部越前守  
詮房判

松平薩摩守殿

257  
全上

御札令披見外、

(家宣)  
文昭院様薨御付而、從琉球中山王其地迄使簡差渡外、依

之以使者被差越、遂一覽則及 上聞、返札遣之外間、可

被相達外、恐々謹言、

朱力キ  
正徳三年  
八月十八日

久世大和守  
重之判

阿部豊後守  
正喬判

松平薩摩守殿

井上河内守  
正岑判

全上

御札令披見外、

文昭院様

蕨御付而、從琉球中山王其地迄使簡差渡候、

依之以使者被越之外紙面之趣令承知外、恐々謹言、

朱力年

正徳三年

八月十八日

松平薩摩守殿

土屋相摸守

政直判

全上

御札令披見外、

文昭院様

蕨御付而、從琉球中山王其地迄使簡差渡候、

依之以使者被越之外紙面趣令承知外、恐々謹言、

朱力年

正徳三年

八月十八日

松平薩摩守殿

本多中務大輔

忠良判

間部越前守

詮房判

吉貴公御譜中

正文在文庫

南都東大寺大佛殿に從

吉貴公臺檀一基并舍利塔御寄進之次第

張紙宝永五年子也、本ノマ、  
一寶永六年丑十一月五日、南都東大寺惣代龍松院公盛上

人、江戸芝御屋敷に御越、嶋津帶刀旅宿に御出御近付

に被爲成り、左外を被仰り外、先龍松院公慶上人代に

大佛殿造立之勸化御免に、此節大佛殿落成外付而、

爲御禮出府被成り、然者勸化之殘金有之、先住代に此

御方に御頼爲申譯有之、殊御家柄各別間、往

々御頼申度存、先頃家來を以申入置り得共、猶御頼申

度存罷在り由、最前より之次第段々被仰聞、左外其

序に御物語被成り外、來年三月廿一日より四月八日迄、

堂建立之供養有之、往古

頼朝公御供養以後、終に敕使立り程之儀者無之得

共、此節者

頼朝公御供養之通、敕使被爲立萬僧供養に外、別

る爲晴立供養候旨、委細御物語有之外事、

一右供養之段達、貴聞候處、

頼朝公御建立之堂者、及燒失此節建立之儀外、御家之

儀者、賴朝公御一筋之儀外間、其譯を以何とそ此節御寄進被遊、供養之節何そ目ニ立外様成儀、被仰付度被思召外由御意外、

一右付外、帶刀方大坂御留守居伊地知五兵衛迄申越、五兵衛方南都江申遣、龍松院役人共江遂内談外上、臺檀

一基・什器一部・舍利塔一器御寄進有之可然外、是ハ大佛之前ニ不斷莊嚴致置、天下之御祈禱、諸方之祈禱を表仕、爲差立器物ニ外由申越外付外、其段逢

貴間、弥右之品々御寄進可被成旨被

仰外付外、五兵衛ニ其旨申越、右之品相調記文をも

被仰付被遣外故、供養之節大佛前ニ致莊嚴、記文者正

面之柱ニ張付外、依之龍松院を初、東大寺中別外致大

慶難有奉存外、供養之節相集外僧俗見分仕、別外宜取

沙汰ニ外由、五兵衛附役人南都江差越承届罷歸申出外

旨、五兵衛より申越外事、

一右記文者菊池藤助草案ニ有、清書佐々木萬次郎書調被

仰付外、草案別紙ニ有、

一舍利塔扉ニ書附外文、是表草案并清書及右同人江被仰

付、草案別紙ニ有、

一右御寄進之記者、臺檀之鏡板之裏ニ大文字ニ彫付置、

左外正面之柱ニ掛、板ニ表同文を彫付常ニ掛置外事、

一御寄進之品左ニ記

一舍利塔

惣高三尺三寸之多寶塔極上濃緘金彫物段々有

一臺檀

高壹尺七寸五部差渡七寸四方

右ニ相附什器

一禮槃

高壹尺五分  
差渡式尺五寸

一脇机

高壹尺六寸  
差渡式尺七寸五分  
張卷尺四寸

一繫臺

高式尺七寸五分  
腕手強式尺五寸  
足ノ強卷尺四寸五分

一菊燈臺

高三尺七寸

右之通ニ御寄附被成置外、就夫龍松院江帶刀より以書

狀申談外寫一通并返札之本書貳通、且又臺檀記寫壹通、舍利塔扉銘寫一通相渡申外間、御記縁方江記置様可被

申渡外、以上、

朱力年  
正徳三年 巳八月  
鳴津備前殿

吉貴公御譜中

正文在文庫

爲重陽之賀儀、小袖五到來祝着、委曲井上河内守可述之外也、

朱力キ

正徳三年 九月七日



薩摩中將殿

262

全上

御札令披見、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤、將又琉球國に被相渡、進貢・接貢料之銀子吹替之儀、願之通被 仰出之、忝之由得其意、依之被差越使者紙面之趣、各申談及言上、恐、謹言、

朱力キ

正徳三年 九月九日

松平薩摩守殿

井上河内守

正岑判

263

全上

御札令披見、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤、將又琉球國に被相渡、進貢・接貢料之銀子吹替之儀、願之通被 仰出

之、忝之由得其意、依之被差越使者紙面之趣承届、恐、謹言、

朱力キ

正徳三年 九月九日

松平薩摩守殿

土屋相摸守

政直判

264

全上

貴札致拜見、弥御堅固由珍重御事、然者御領知琉球國に被相渡、進貢・接貢料之銀子吹替之儀、御願之通相濟、委細御紙面之趣承知、被入御念儀御座、恐惶謹言、

朱力キ

正徳三年 九月九日

松平薩摩守様

井上河内守

正岑判

御報

265

全上

貴札致拜見、然者琉球國に被相渡、進貢・接貢料之銀子吹替之儀、御願之通相濟、預示趣致承知、就夫嶋津大藏申聞、段承置、御紙面之通被入御念儀御座、弥御堅固御休息珍重之御事、如仰私儀無吳事致勤仕、恐惶謹言、

朱力キ  
正徳三年  
九月九日

阿部豊後守  
正審判

松平薩摩守様

貴酬

266

全御譜中

正文在琉球國司

頃年於和朝吹出候銀位惡敷、大清に進貢・接貢之料難調  
由付而、先年以來被及訴詔り得共、和朝一統通用之事り  
故、於御當國可被仰付筋無之、元禄・寶永之新銀取交待  
渡り處、於大清猶々差支り付、去夏保榮茂親方被差上、  
訴之趣

中將様達 貴聞、被申出旨被 聞召届、從往古大唐に被  
致通融來候次第等江戸に被 仰立、當年より元禄銀之位  
に吹改可被相渡旨、此節被仰渡り條、此段中山王被奉承  
知、大唐通融之儀、猶以入念可被申付旨、被 仰出候、  
以上、

正徳三年九月九日

種子嶋彈正判

嶋津帶刀判

嶋津將監判

嶋津内記判

267

扣寫在家老座

新銀位惡敷、渡唐之料難調、段々被及訴詔候付、琉球國  
之儀往古より大唐に無懈怠被致通融來り子細、江戸に被  
仰立、元禄銀之位に吹替可被相渡旨、此節被仰渡り、  
依之中山王に御意之趣、別紙書付一通、今歸仁親方に相  
渡り條可被奉承知り、此儀被仰立り通早速首尾好被  
仰付り段、早竟御威光故り條、中山王被存此旨、各事表  
聊大方不奉存、向後唐通融之儀猶以可被入念り、恐く、

朱力キ  
正徳三年  
九月九日

種子嶋彈正

久基判

嶋津帶刀

仲休判

嶋津將監

久當判

嶋津内記

久貫判

豐見城王子

三司官

268

吉貴公御譜中

扣寫在家老座

從琉球渡唐之銀子吹替之儀、被 仰立り付、子細之儀老、



御家老より可申出旨被 仰付り、依之此節我より江戸

御老中様に申上り書付扣并慶長年中大唐に往復之書付寫  
四通、爲承知相渡り條可被見届り、恐々、

朱力キ  
正徳三年 九月九日

種子嶋彈正  
久基判

嶋津帶刀  
仲休判

嶋津將監  
久當判

嶋津内記  
久貫判

豊見城王子

三司官

吉貴公御譜中

正文在文庫

貴札拜見仕り、然者琉球國に被相渡り進貢・接貢料之銀  
子吹替之儀、御願之通被 仰出、忝思召旨尤之御事り、  
依之被仰聞り趣、被入御念儀存り、恐惶謹言、

朱力キ  
正徳三年 九月十一日

間部越前守  
詮房判

松平薩摩守様

貴報

貴札致拜見り、貴様弥御堅固珍重之御事り、然者御領知  
琉球國に相渡り進貢・接貢料銀子吹替之儀、今度御願之  
通被 仰渡、忝思召之由、右爲御禮被仰聞御紙面之趣致  
承知り、恐惶謹言、

朱力キ  
正徳三年 九月十一日

井伊掃部頭  
直該判

松平薩摩守様  
御報

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見り、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤り、將又琉球國に  
被相渡り進貢・接貢料之銀子吹替之儀、願之通被 仰出  
之、忝由得其意候、紙面之趣令承知り、恐々謹言、

朱力キ  
正徳三年 九月十三日

本多中務大輔  
忠良判

間部越前守  
詮房判

松平薩摩守殿

吉貴公御譜中

扣寫在江戸家老座

口上覺

其御地留守差置ハ家老嶋津帶刀此節差越申ハ、去年留守差置ハ家老嶋津大藏 御目見被 仰付先規之通、御目見此度表被 仰付被下度奉願ハ、宜御沙汰奉願ハ、以上、

朱力キ

正徳三年

九月十八日

御名

吉貴公御譜中

正文在文庫

貴翰拜見仕ハ、先達ハ被仰聞ハ薩摩國之内、竹嶋江漂着之南京出唐船一艘、警固御差添被送遣之、去月廿九日當津着岸無相違今日請取申ハ、恐惶謹言、

朱力キ

正徳三年

十月二日

(長崎奉行)  
久松備

後守  
定持判

(同)  
駒木根肥

後守  
政方判

松平薩摩守様

貴報

正文在文庫

御札令披見ハ、尾張中納言殿逝去之段被承之被絶言語ハ、(徳川吉通)

公方様御機嫌之御様躰以使者被相伺之ハ、益御勇健之事ハ間可御心安ハ、紙面之趣各申談及言上ハ、恐々謹言、

朱力キ

正徳三年

十月九日

松平薩摩守殿

阿部豊後守

正喬判

全上

御札令披見ハ、尾張中納言殿逝去之段被承之被絶言語ハ、公方様御機嫌之御様躰被相伺之ハ、益御安全御事ハ間可御心易ハ、紙面趣令承知ハ、恐々謹言、

朱力キ

正徳三年

十月九日

松平薩摩守殿

井伊掃部頭

直該判

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見ハ、尾張中納言殿逝去之段被承被絶言語ハ、公方様御機嫌御様躰被相伺之ハ、益御安全御儀ハ間可御心易ハ、紙面之趣令承知候、恐々謹言、

吉貴公御譜中

朱力キ  
正徳三年  
十月十一日

本多中務大輔  
忠良判

間部越前守  
詮房判

松平薩摩守殿

277  
全上

尾張黃門逝去付ゐ、芳翰之趣入御念儀存外、恐々謹言、

朱力キ  
正徳三年  
十月十一日

紀伊中納言  
吉宗判

松平薩摩守殿

278  
吉貴公御譜中

扣寫在家老座

今度嶋津之御稱號并御家之字、名乗外家々被相改趣有之、於其御家中表御直別之家號、又者庶流之家御改被仰付外處、御家之字名乗外面々、家筋之由緒申出外付頭書ニ被相記、右躰之家筋何様ニ可被仰付外哉、又者本家不相知外、久之御字用來候表有之、委曲御紙上を以

中將様達 貴聞外處、左之通被仰外、

一嶋津采女家二男迄ハ、代々御稱號并久之御字名乗、三

男よりハ御稱號又ハ久之御字、遠慮外様可被仰付外、一樺山清右衛門・伊集院三右衛門・新納隼人事、嫡家者御當地に罷有外、其庶流ニ有外得者、嫡家元祖實名之字を用、久之御字者名乗不申筋、此御方ニ有者被仰付外得共、其御元は別立相勤事外故、右三人嫡子迄ハ代々久之御字御免被成、二男よりハ久之御字相避、其家之元祖實名之字を用、家號ハ名乗外筋ニ可被仰付外、一右家之外庶子家又者支流之家ニ有、樺山・町田・伊集院等之家號之人者、久之御字相避、家號ハ名乗外様可被仰付外、

一本家不相知外、新納・町田等之家號之人、久之御字相避、家號ハ名乗外様可被仰付外、

一山田・堀之内・宇宿・恒吉・春成・西・松下等ハ、御氏族之外他家ニ有之家號ニ有、御氏族迄之家號と難被決外條、勿論久之御字相避、家號ハ名乗外有表御構無之旨可被仰付外、

右之通私共より可申上旨被仰付外、以上、  
正徳三年十月十五日

肝付主殿判  
種子嶋彈正判

嶋津將監判

嶋津淡路守殿

嶋津内記判

吉貴公御譜中

正文在文庫

貴翰拜見仕<sup>レ</sup>、來朝之福州出唐船一艘人數三十三人乘組、去四日薩摩國下飯嶋之内、長濱浦に漂着碇卸<sup>レ</sup>付、例之通番船等被附置<sup>レ</sup>間、警固被指添、當津に可被送遣旨、御紙上之趣委細承知仕<sup>レ</sup>、恐惶謹言、

<sup>朱力<sup>キ</sup></sup>正徳三年十月十八日

久松備後守 定持判

駒木根肥後守 政方判

松平薩摩守様

貴報

全上

御札令披見<sup>レ</sup>、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤<sup>レ</sup>、將又久世大和守連判列被 仰付之、珍重之由得其意外、紙面之趣各申談及 上聞<sup>レ</sup>、恐<sup>レ</sup>謹言、

正徳三年十月十八日

阿部豊後守 正喬判

松平薩摩守殿

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見<sup>レ</sup>、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤<sup>レ</sup>、將又久世大和守連判之列被 仰付之、珍重之由、紙面之趣令承知<sup>レ</sup>、恐<sup>レ</sup>謹言、

<sup>朱力<sup>キ</sup></sup>正徳三年十月十八日

井伊掃部頭 直該判

松平薩摩守殿

全上

御札令披見<sup>レ</sup>、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤<sup>レ</sup>、將又久世大和守連判之列被 仰付之、珍重之由、紙面之趣令承知<sup>レ</sup>、恐<sup>レ</sup>謹言、

<sup>朱力<sup>キ</sup></sup>正徳三年十月廿一日

本多中務大輔 忠良判

間部越前守 詮房判

松平薩摩守殿

吉貴公御譜中

正文在文庫

今度

(家意)

文昭院様一回御忌之御法事御執行付、以使者御香奠被獻之、於増上寺奉納之事、右之趣及言上、恐、謹言、

朱力キ

正徳三年  
十月廿九日

秋元但馬守

喬知判

松平薩摩守殿

吉貴公御譜中

扣正文在文庫

御別通之尊札拜見仕、澁谷太左衛門事代、御家之字名乘來付、先頃被仰下趣達 貴聞、御意之旨申上、依之此節委細被仰下趣 太守様達貴聞、太左衛門事他家之儀、其上右馬頭忠興之妹芳林院之遺跡相續爲仕家筋ニ候得、女子跡之儀ニ譯及相替、他家之者ニ此御方ニ表代替之節願申上、久之御字御免被成事付、太左衛門家及最前其格ニ被 思召爲被 仰出事付得共、(綱書)大女院様口段、家筋之儀被聞召達、忠之御字・久之御字御免之一筋及得、太左衛門家代、嫡子迄ハ、弥久之

御字御免被成置、太左衛門代替時、御伺ニ及不申、

尤二男よりハ御家之字相避、様可被仰付、將又忠之御家考、已前ニ老輕者之内ニ表名乘、儀有之付得共、當分

老遠慮仕事御座、(符)條、忠之御字、以後共弥遠慮仕、様

是又可被仰付、此段私より可申上旨被仰出、恐惶謹言、

十一月三日

鳴津將監

久當

鳴津淡路守様

扣正文在文庫

鳴津采女家三男以下、久之御字并御稱號相避、様被仰付、可被改家號此御方ニ被仰付、旨ニ被準度之由被仰付、達 貴聞、此御方ニ右舛之者ニ、御見合を以家號被下事御座、何分ニ御自分様御見合次第、三男之家號、可被仰付儀、實名之字考、采女先祖之名乘候字之内を用、様ニ可被仰付、先祖之實名二字共、此御方ニ遠慮仕字ニ、尤別字ニ改、様ニ可被仰付、爰元ニ表右之御格式ニ被仰付事、御座、且又、吉之字ハ假名ニ表相避、哉之旨被仰下、實名ニ老勿論、遠慮仕事付得共、假名ニ老御構無之、

以上、

朱力キ

正徳三年

十一月三日

嶋津淡路守様

嶋津將監(久当)

286 扣正文在文庫

一筆啓上仕外、稍向寒氣外得共弥御勇健ニ被爲成御座、  
 珍重奉存外、然老樺山清右衛門・新納隼人・伊集院三右  
 衛門二男より改外實名之字、此御方は罷在外嫡家右三  
 人に相傳申答外得共、其許様は別立る相勤申外ニ付、其  
 身先祖共別立外節之實名之字之内を用、二男は名乗候様  
 ニ可被仰付外、其外樺山・新納・町田・伊集院之家號、  
 別紙名書之面ニ表、先祖實名之字之内を用、名乗外様可  
 被仰付外、左外何れ之字ニ相改外首尾、爰元は罷有外  
 惣嫡家方は、以書中申届置外様可被仰付外、依之樺山・  
 新納・町田・伊集院氏之惣嫡家、樺山權左衛門・新納四  
 郎左衛門・町田郷九郎・伊集院藏人は右之件承置外様ニ  
 と被仰渡置外、且又、右家號之面ニ本家より相別外以來  
 之系圖、委傳記ニ書顯被差越度旨、先比米良休左衛門は  
 此御方御記録方承外者外申達外、書付之内ニ新納隼人・町  
 田源太左衛門事、別レ出外本家相知不申外、然共他家ニ

無之家號ニ外得老、御氏族之餘裔ニ有可有之と、書付相  
 渡申外得共、其以後段ニ相糺、本家相知申外、最前考落  
 爲申儀ニ候間、此段ニ乍序申上外、系圖之儀老弥何れ表  
 同前追る差越候様可被仰付外、恐惶謹言、

尚以樺山清右衛門・新納隼人・伊集院三右衛門二男  
 より改外字表、尤惣嫡家方は申届置外様可被仰付外、

已上、

朱力キ

正徳三年

十一月三日

嶋津淡路守様

嶋津將監

久當

287

扣正文在文庫

別紙名書之面、

伊集院權之助

伊集院半左衛門

町田權七郎

町田城之助

伊集院直右衛門

樺山彦左衛門

新納八兵衛

新納正竹

町田孫左衛門

町田彦之進

町田源太左衛門

町田新左衛門

追啓仕外、町田新左衛門老町田源太左衛門庶流ニ有外得  
 老、實名之字老源太左衛門外可相傳外、町田彦之進・新

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

御札令披見外、  
公方様御機嫌之御様躰被相伺之外、益御安全御儀外間可  
御心易外、隨而御看一種被獻之外、紙面趣令承知外、恐  
々謹言、  
朱力キ 正徳三年 十一月六日  
井伊掃部頭 直該判

松平薩摩守殿

吉貴公御譜中

正文在文庫

貴翰拜見仕外、來朝廈門出唐船壹艘、人數四十四人乗組、  
今月七日薩摩國之内、下甌嶋前之浦と申所に漂着、卸碇

松平薩摩守殿

本多中務大輔 忠良判  
間部越前守 詮房判

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

納正竹者、町田孫左衛門・新納八兵衛庶流にあり故、孫  
左衛門・八兵衛より實名之字可相傳外、左外得者何れ之  
字に相改外段、勿論、此御方惣嫡家に申届置外様可被仰  
付外、以上、  
朱力キ 正徳三年 十一月三日  
鳴津淡路守様  
鳴津將監

全上

御札令披見外、

公方様御機嫌之御様躰被相伺之外、益御勇健之御儀外間  
可御心安外、隨而御看一種被獻之外、紙面趣承届外、恐  
々謹言、  
朱力キ 正徳三年 十一月七日

朱力キ 正徳三年 十一月七日  
久世大和守 重之判  
松平薩摩守殿

付、如例番船等被附置由、日和次第警固被差添、當津に可被送遣之旨、御紙表之趣委細承知仕、恐惶謹言、

朱力キ  
正徳三年十一月廿日

久松備後守  
(長崎奉行)  
定持判

駒木根肥後守  
(同)  
政方判

松平薩摩守様

貴報

292  
全上

嶋津采女家三男以下家號改之儀、其表被仰付、筋に相準申度之旨、得御内意、被達貴聞被下、由、其表に右躰之格に老御見合を以、家號被下御事、間、何分ニ表拙者見合次第、三男より之家號、可申付旨、實名之字、采女先祖之名、乘字之内を用、様可申付由、先祖之實名二字共、奉對御家遠慮仕字に、尤別字に改、様可申付由、其御許に、右格式被仰付御事、旨、采女方に則右之趣に申付、且亦吉之字之儀、御領國に、老假名にも相避申、哉之由、御尋申入、處、實名に、老勿論遠慮仕、得共、假名に、老御構無御座、由被入御念、委細被仰下、得其意、忝存、以上、

朱力キ  
正徳三年十一月廿一日

嶋津將監様

嶋津淡路守

293  
全上

去ル三日之御札令拜見、然、老樺山清右衛門・新納隼人・伊集院三右衛門二男より改、實名之字、其表嫡家より右三人に相傳有之、善、得共、爰許に別立、罷在、付、其身先祖共別立、節之實名之字之内を用、二男に爲名、乘、様可申付旨、其外樺山・新納・町田・伊集院之家號、別紙被仰聞、外名書之者共、先祖實名之字之内を用、名、乘、様可申付由、左、何れ之字に相改、首尾、其表惣嫡家方に以書中申、届置、様可申付旨、依之樺山・新納・町田・伊集院氏之惣嫡家、樺山權左衛門殿・新納四郎左衛門殿・町田郷九郎殿・伊集院藏人殿方に、右之件承置、様、こと被仰渡置、由、且亦、右家號之者共、本家より相別、れ、以、來之系圖、委傳記に書顯、差越、様、こと、其御許御録方之衆、先頃米良休左衛門に被申、聞、外書付之内、新納隼人・町田源太左衛門事、別れ、出、外本家相知不申、外、然、共他家に無之家號、に、得、共、御氏族之餘裔、に、有、可、有、之、と、書付被相渡、得、共、其以後段、被相糺本家相知申、外、由、最前



考落爲被申由、乍序被仰聞之旨被入御念儀存外、系圖之儀者弥何及同前ニ追テ差越外様可申付旨、且亦、樺山清右衛門・新納隼人・伊集院三右衛門二男より改テ字表、尤其表嫡家方ハ申届外様可申付由得其意、委細御紙面之趣三人之者共ハ申付之外、左様御心得可被下外、恐謹謹言、

朱力年  
正徳三年 十一月廿一日

鳴津淡路守 惟久判  
鳴津將監様 御報

吉貴公御譜中  
正文在文庫

去三日之追啓令拜見外、然者町田新左衛門者町田源太左衛門庶流ニ有外得ハ、實名之字源太左衛門より相傳、町田彦之進・新納正竹者町田孫左衛門・新納八兵衛庶流ニ有外間、孫左衛門・八兵衛より實名之字相傳、左外有外れ之字ニ相改外段、勿論、其表惣嫡家ハ申届置外様可申付旨被入御念、御紙面之趣得其意、右三人之者共ハ申付之外、左様御心得可被下外、以上、

朱力年  
正徳三年 十一月廿一日  
鳴津淡路守

鳴津將監様

全上

一筆致啓達外、然者澁谷太左衛門家之儀ニ付、先達外御自分迄段々得御意外處、太左衛門家筋 大玄院様御代、委細達 貴聞、御家之御字御免之一筋ニ付、太左衛門家代々嫡子迄者久之御字御免許被成外條、太左衛門代替時々不及奉窺之、尤二男よりハ 御家之御字相避外様可申付之旨、此段御自分より御通達外様ニ、被 仰出外由具承知仕、其旨太左衛門ハ申渡之外、此節之御改ニ付外者、不存寄仕合至私彼者冥加至極難有奉存外段、筆紙不得申上外、右之御請御自分迄申上外、御序之刻可然様被仰上可被下外、頼入存外、恐謹謹言、

朱力年  
正徳三年 十一月廿一日  
鳴津淡路守 惟久判

鳴津將監様  
人、御中

吉貴公御譜中

同年十一月二十二日、徒ニ諸役座於薩府島津兵庫久季之南隣、

扣寫在江戸家老座

口上覺

松平薩摩守城下薩州鹿兒島、近年度々及大火、殊當年者  
兩度薩摩守居宅近邊迄類燒仕、然者薩摩守居宅曲輪之  
外ニ、前々嫡子部屋栖之内罷在、屋敷御座、右圍ニ所  
々長屋を附置申、又者右近邊ニ家來共差置、屋敷有之、  
火用心惡敷御座、此節右長屋を屏ニ相直、右家來共  
屋敷取除、薩摩守居宅ニ家作遠有之、様仕度、此段  
御内意申上度薩摩守存、以上、

(朱)

「正德三年」巳十二月

松平薩摩守使者

阿多六郎右衛門

(朱)

「右御用番秋元但馬守様江先角野壽見を以、入御内見ニ、

処、思召寄無之外間、可差出旨被 仰聞候付、但馬守様

江六郎右衛門を以差出、御取次松村四郎兵衛と申人差上

御受取被成、由申出、

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悅旨尤、隨、蜜柑二箱

并燒臘一箱被獻之外、各申談遂披露、一段之御仕合、

恐々謹言、

朱力年

正德三年

十二月七日

秋元但馬守

喬知判

松平薩摩守殿

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悅旨尤候、隨、蜜柑二箱  
并御看一種被獻之外、紙面之趣令承知、恐々謹言、

朱力年

正德三年

十二月七日

井伊掃部頭

直該判

松平薩摩守殿

全上

御札令披見候、今度

文昭院様就御法事、從妻御香奠被差上度之旨、伺之通相  
達難有由得其意候、紙面之趣各一覽之事、恐々謹言、

朱力年

正德三年

十二月九日

秋元但馬守

喬知判

松平薩摩守殿

301 吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、隨<sub>レ</sub>蜜柑二箱

并御肴一種被獻之外、紙面之趣承届外、恐<sub>レ</sub>謹言、

朱力平

正徳三年 十二月十一日

本多中務大輔

忠良判

304 正文在南泉院

御宮御寄進經論書籍目錄

天箱 第一

大方廣佛華嚴經疏鈔

地箱 第二

法華玄義并釋籤

同文句并記

三大部補註

文句輔正記

玄箱 第三

摩訶止觀并輔行

三大部私記

黄箱 第四

法華經科註

同 入疏

同 新註

名越(恒斐)右臈判

宜被寶納之狀如件、

正徳三年十二月十一日

南泉院

松平薩摩守殿

問部越前守

詮房判

302 吉貴公御譜中

同年十二月十一日、有吉貴旨願、寄附經論一百二十

五部録十五於南泉院、島津周防久儔代吉貴勤事、同日

寄附大般若經一部於花尾權現社、島津圖書久方代而

勤焉、

303 正文在南泉院

經論書籍 目錄別紙註之

右

十五箱

東照宮江 太守吉貴公依有御祈願之旨趣所有御寄進也、

同 會義	十六卷	四十二章經	
同 綸貫	一卷	八大人覺經	三部全卷
楞伽經玄義	一卷	遺教經	
同 義疏	四卷	金剛經註	三卷
楞嚴經玄義	二卷	同 纂要	二卷
同 文句	十卷	般若心經釋要	
		金剛經破空論	三部全卷
		同 觀心釋	
維摩經註	十卷	圓覺經畧疏	二卷
同 天台疏	十卷	同 略疏鈔	十二卷
同 無我疏	十二卷	同 辨疑誤	一卷
涅槃經會疏	三十三卷	地藏本願經科註	六卷
同 後分	二卷	同 綸貫	一卷
同 玄義發源機要	四卷	孟蘭盆經疏并新記	各一卷
		同 新疏	一卷
宙箱 第六		大智度論	百卷
大毗盧舍那經	七卷	中論	四卷
瑜祇經	一卷	百論	二卷
蘇悉地經	二卷	十二門論	一卷
金剛頂瑜伽經	三卷		
要略念誦經	一卷		
選集百緣經	十卷		
		洪箱 第七	

翻譯名義集

七卷

同 裂網疏

六卷

釋氏要覽

三卷

月箱 第十

荒箱 第八

唯識論俗詮

十卷

大藏一覽

十卷

同 科

一卷

同 目錄

一卷

同 述記

十卷

教苑清規

二卷

廣弘明集

四十卷

大唐西域記

十二卷

日箱 第九

金光明經玄義

八卷

百因緣集

九卷

同 文句

十六卷

石門文字禪

三十卷

同 科

一卷

元享釋書

三十卷

別行玄義并記

各四卷

高僧傳

十三卷

同 義疏并記

各四卷

續高僧傳

四十卷

同 條箇

一卷

宋高僧傳

三十卷

觀經疏妙宗鈔

五卷

大明高僧傳

八卷

菩薩戒經義疏

二卷

佛祖統紀

五十四卷

同 咸註

三卷

佛統統紀

八卷

梵網經古跡撮要

六卷

宗鏡錄

百卷

起信論疏

二卷

俱舍論

三十卷

同 筆削記

六卷

同 遁麟

二十八卷

辰箱 第十三

止觀義例隨釋

六卷

同 散善義

一卷

大部四教儀

十二卷

往生淨土法事讚

二卷

金剛鉅釋文

三卷

般舟讚

一卷

同 顯性錄

四卷

往生禮讚

一卷

讀教記

二十卷

觀念法門

一卷

守護國界章

九卷

阿彌陀經疏鈔

四卷

顯戒論

三卷

同 要解

一卷

山家緒餘集

三卷

同 百川記

三卷

四明教行錄

九卷

樂邦文類

五卷

十不二門指要鈔詳解

二卷

往生要集

三卷

同 條箇

一卷

淨土十疑論

二部全卷

四教儀集解

三卷

同 法語

四卷

同 集註

三卷

大乘止觀釋要

四卷

同 條箇

一卷

修習止觀禪要

一卷

宿箱 第十四

淨土群疑論

七卷

國清百錄

四卷

觀經玄義分

一卷

教誡律儀簡釋

二卷

同 序分義

一卷

六物圖輯釋

四卷

同 定善義

一卷

法苑珠林

百二十卷

列箱 第十五

義楚六帖

二十四卷

惣計百二十五部千三百三十六卷

正徳三癸巳歲十二月十一日

305 正文在平等王院

大般若經 目錄別紙註之

一部

右

花尾山權現江 太守吉貴公依有御祈願之旨趣、所有御寄進也、宜被寶納之狀如件、

正徳三年十二月十一日

名越右膳判

平等王院

306 全御譜中

正文在文庫

御札令披見外、就寒中

公方様御機嫌之御様躰以使者被相同之外、益御勇健之御事之間可御心安外、隨而御羽織五并鏝節一箱被獻之外、各申談遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

朱力キ 正徳三年 十二月十二日

秋元但馬守

喬知判

松平薩摩守殿

307 全上

御札令披見外、就寒中

公方様御機嫌之御様躰被相同之外、益御勇健之御儀之間可御心安外、隨而御羽織并御着一種被獻之外、紙面之趣令承知外、恐々謹言、

朱力キ 正徳三年 十二月十二日

井伊掃部頭

直該判

松平薩摩守殿

308 全上

御札令披見外、就寒中

公方様御機嫌之御様躰被相同之外、益御安全御儀之間可御心易外、隨而御羽織并御着一種被獻之外、紙面之趣令承知外、恐々謹言、

朱力キ 正徳三年 十二月十六日

本多中務大輔

忠良判

間部越前守

詮房判

松平薩摩守殿

309

吉貴公御譜中

正文在文庫

(皇親吉蓮皇子)

御札令披見外、徳川五郎太殿逝去之段被承之被絶言語外、  
公方様御機嫌之御様躰以使者被相伺之外、益御安全御儀  
外間可御心易外、紙面之趣各申談及言上外、恐々謹言、

朱力年  
正徳三年 十二月廿二日  
秋元但馬守  
喬知判

松平薩摩守殿

310 全上

御札令披見外、徳川五郎太殿逝去之段被承之被絶言語外、  
公方様御機嫌之御様躰被相伺之外、益御勇健之御儀外間  
可御心安外、紙面之趣承届外、恐々謹言、

朱力年  
正徳三年 十二月廿二日  
井伊掃部頭  
直該判

松平薩摩守殿

311 吉貴公御請中

正文在文庫

御札令披見外、就寒中

上様御機嫌御様躰被相伺之外、益御安全御事外間可御心  
易外、隨御羽織并御看一種被獻之外、紙面之趣令承知  
外、恐々謹言、

朱力年  
正徳三年 十二月廿五日  
井伊掃部頭  
直該判

松平薩摩守

312 全上

御札令披見候、今度

文昭院様一回御忌御法事、於増上寺御執行相濟外段被承、  
恐悦旨尤外、依之被差越使者外紙面趣各申談及言上外、恐  
々謹言、

朱力年  
正徳三年 十二月廿五日  
秋元但馬守  
喬知判

松平薩摩守殿

313 全上

御札令披見候、今度

文昭院様一回御忌御法事、於増上寺御執行相濟外段被承  
之、恐悦旨尤外、紙面之趣承届外、恐々謹言、

朱力年  
正徳三年 十二月廿五日  
井伊掃部頭  
直該判

松平薩摩守殿

314 全上



御札令披見外、徳川五郎太殿逝去之段被承之被絶言語外、  
公方様御機嫌之御様躰被相伺之外、益御安全御儀外間可  
御心易外、紙面之趣承届外、恐々謹言、

朱力キ  
正徳三年 十二月廿六日

本多中務大輔  
忠良判

間部越前守  
詮房判

松平薩摩守殿

315 吉貴公御譜中

正文在文庫

爲歳暮之賀儀、小袖五重到來祝着外、委曲大久保加賀守  
可述外也、

朱力キ  
正徳三年 十二月廿七日



薩摩中將殿

316 全上

御札令披見候、今度

文昭院様一回御忌御法事、於増上寺御執行相濟外段被承、  
恐悦旨尤外、紙面趣令承知外、恐々謹言、

朱力キ  
正徳三年 十二月廿八日

本多中務大輔  
忠良判

間部越前守  
詮房判

松平薩摩守殿

317 全上

今度

御官位 宣下

御名之字之爲御祝儀、以使者御樽肴被獻之外、遂披露外  
處一段之御仕合外、恐々謹言、

朱力キ  
正徳三年 十二月廿九日

阿部豊後守  
正喬判

井上河内守  
正岑判

大久保加賀守  
忠増判

秋元但馬守  
喬知判

松平薩摩守殿

(表紙)

吉 貴 公  
繼 豐 公  
正 德 四 年

追 舊 記 雜 錄  
卷 四 十 九

318 吉貴公御譜中

正文在文庫

吉書

一神社佛閣修造興行事、

一可專勸農事、

一可徵納國々年貢事、

右任三箇條之旨、可有沙汰之狀如件、

正德四年正月十一日 吉貴御判 (花押 No.2)

319 全上

爲年頭之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黃金十兩被  
獻之外、遂披露<sub>レ</sub>處一段之御仕合候、恐々謹言、

朱刃  
正德四年 正月十一日  
久世大和守 重之判

阿部豐後守 正喬判

井上河内守 正岑判

秋元但馬守 喬知判

松平薩摩守殿

320 吉貴公御譜中

當家者元來源姓也、雖<sub>レ</sub>然鼻祖忠久建久三年自爲<sub>二</sub>近  
衛基通公之契子<sub>一</sub>以來、世稱<sub>二</sub>藤原姓<sub>一</sub>、然至<sub>二</sub>曾祖光久<sub>一</sub>、  
措<sub>二</sub>固有之姓<sub>一</sub>、不可<sub>レ</sub>冒<sub>二</sub>他姓<sub>一</sub>復<sub>二</sub>本姓<sub>一</sub>、從<sub>二</sub>光久<sub>一</sub>以  
下之族皆傲<sub>レ</sub>之備<sub>二</sub>于後<sub>一</sub>、

321 正文在文庫

御家之儀老元源姓<sub>二</sub>之<sub>レ</sub>處<sub>一</sub>、中比 近衛様御契子之譯  
二付、藤原姓<sub>二</sub>之<sub>レ</sub>被成御座<sub>レ</sub>、然處故有之、從 光久公  
如本之源姓<sub>二</sub>御改<sub>レ</sub>、右之譯<sub>レ</sub>得者、御庶流之儀表光久

公以前之御庶流者藤原姓之管ニ付、光久公以來之御庶流者源姓之管ニ有可有之處、取違之者有之由相聞得付間、此趣御家老中ニ申聞、御庶流嫡家ニ考此段可申渡付、且又他國之人より、御家ニ考源姓ニ有被遊御座付處、御庶流之内藤原姓及有之付段者、何様成譯ニ有之付哉之旨、相尋付ハ、藤原姓之儀者、御先祖忠久公 近衛様御家ニ譯有之、藤原姓被進付故、家久公迄者藤原姓ニ有有之付得共、御家考元源姓ニ有被遊御座付付、光久公より源姓ニ御改付、依之、光久公以來之庶流者源姓ニ有有之付、光久公以前之庶流者藤原姓ニ有有之付段、返答可申旨可申聞置付、以上、

正月十八日

右之通被仰付付間奉承知、庶流之面々ニ考嫡家より右之件可被申聞旨、左之人數ニ相良權大夫を以午正月廿四日申渡付、

藤原姓

嶋津兵庫殿(久延)

嶋津小源太殿(實德)

嶋津左衛門(忠興)

嶋津筑後(忠實)

- 嶋津備前殿(久達)
- 嶋津内記(久實)
- 嶋津將監殿(久当)
- 嶋津圖書殿(久免)
- 嶋津内膳(久兵)
- 伊集院藏人(久矩)
- 川上久馬(忠守)
- 嶋津助之丞(久珍)
- 新納四郎左衛門(久堅)
- 栴山權左衛門(久言)
- 桂太七郎(久亮)
- 喜入右衛門(久壽)
- 町田郷九郎(久守)
- 義岡右京(久近)
- 嶋津伊織(久延)
- 大野七郎太夫(忠名)
- 吉利左衛門(久基)
- 嶋津六郎次郎(久珍)
- 大嶋休左衛門(久實)
- 龜山李太夫(久實)

山田七郎右衛門(久徳)

追水(久敷)可遊

碓山仲左衛門(久徳)

大田吉兵衛(用徳)

寺山源右衛門(用徳)

若松次右衛門

宇宿覺兵衛

石見與吉郎

阿蘇谷彦左衛門

西彦四郎(用徳)

西川六太夫(用徳)

恒吉氏

和泉氏

石坂氏

相馬氏

知覽氏

鳴津周防殿(久徳)

鳴津大藏殿(久明)

鳴津頼母殿(久起)

322

周防久壽譜中 卷末ニアリ

鳴津求馬殿(久房)

夫島津氏之孳祖 忠久公者 頼朝公之長庶子而元源姓

也、其後雖ト冒ニ異父ト之姓惟宗ト、承久三年辛巳六

月蒙ニ近衛前内大臣基通公之恩免ト、改レ惟宗爲レ藤原、

爾來自ニ三世世之 太守ト、至ニ瓜瓞蔓生之氏族ト爲レ藤姓、雖レ

然至ニ太守光久公ト、措ニ固有之姓ト而不可レ冒ニ他姓ト、

遂温レ故復ニ源姓ト、以レ是正德四年正月十八日 太守吉貴

公降レ命曰、自今以後島津氏之氏族ト可レ下ニ從ニ光久公ト以上

用レ藤姓、以下爲ニ源姓ト、仍當家爲レ源姓矣、

323

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見ト、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悅旨尤ト、將又當地被差

置ト家來鳴津帶刀儀、御目見被仰付之難有之由得其意

外、紙面之趣各一覽之事外、恐々謹言、

朱力キ  
正德四年

正月廿三日  
松平薩摩守殿

井上河内守  
正岑判

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又當地被差置外家來嶋津帶刀儀、御目見被仰付之、難有由得其意外、紙面趣令承知外、恐々謹言、

朱力キ 正徳四年

正月廿六日

井伊掃部頭

直該判

松平薩摩守殿

全上

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又當地被差置外家來嶋津帶刀儀、御目見被仰付之、難有之由紙面之趣令承知外、恐々謹言、

朱力キ 正徳四年

正月廿七日

本多中務大輔

忠良判

間部越前守

詮房判

松平薩摩守殿

扣在家老座

一筆啓上仕外、弥御勇健可被爲成御座、珍重之御儀奉存外、然者其元様御家之御氏姓藤原氏を御用被成外哉、又素源姓御用被成外哉、此旨御尋申上外様被仰出外、以前より何そ付る屹立外節被記置外御氏姓、且又先年於江戸、御普請御手傳御勤被成外砌、棟札ニ爲爲被記置事外、何之御氏姓被記置外段表被仰上度外、恐惶謹言、

朱力キ 正徳四年

二月朔日

肝付主殿

兼柄

嶋津淡路守様

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又様御被位之段被承之、目出度被存由得其意外、依之爲御祝儀以使者二種・御樽代被獻之外、各申談遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

朱力キ 正徳四年

二月三日

秋元但馬守

喬知判

松平薩摩守殿

吉貴公御譜中

全上

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又 月光院様御被位之段被承之、目出度被存由得其意外、依之爲御祝儀目錄之通被獻之外、紙面之趣令承知候、恐々謹言、

朱力平

正徳四年 二月四日

井伊掃部頭 直該判

松平薩摩守殿

吉貴公御譜中

正文在家老座

去朔日之御飛札令拜見外、然者私家之氏姓藤原又者源姓用申外哉、御尋被成外様被仰出外間、以前より何ぞ付の屹立外節記置外氏姓、且又先年於江戸御普請御手傳相勤外砌、棟札ニ表爲記置事外ハ、何之氏姓記置外段表可申上旨、委細御紙面之趣得其意外、氏姓近者藤原姓用申外、乍然以前之儀覺不申外、何ぞ源姓爲記置舊記見届申外者、其段追可申上外、右御手傳之節棟札此方ニ有者調不申外、此等之趣御序之刻可然様被仰上可被下外、恐惶謹言、

朱力平

正徳四年 二月五日

肝付主殿様

御報

嶋津淡路守 惟久

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、如承新春之慶賀玆重外、

公方様御勇健被成御座、年始之御規式可相濟と目出度被存由得其意外、猶以御機嫌御様躰被相伺之外、益御安全之御儀外間可御心安外、随御樽肴被獻之外、各申談遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

朱力平

正徳四年 二月七日

秋元但馬守 喬知判

松平薩摩守殿

全上

御札令披見外、如承新春之慶賀玆重外、

公方様御勇健被成御座、年始之御規式可相濟と目出度被存由得其意外、猶以御機嫌御様躰被相伺之外、益御安全之御儀外間可御心安外、随御樽肴被獻之外、紙面之趣令承知候、恐々謹言、

宋力キ  
正徳四年 二月七日  
井伊掃部頭 直該判

松平薩摩守殿

全上

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又

月光院様御敘任之段被承之、目出度被存由得其意外、依  
之爲御祝儀目錄之通被獻之候、紙面之趣令承知外、恐、  
謹言、

宋力キ  
正徳四年 二月七日

本多中務大輔 忠良判

間部越前守 詮房判

松平薩摩守殿

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、如承新春之慶賀珍重外、

公方様御勇健被成御座、年始之御規式可相濟と目出度被  
存由得其意外、猶以御機嫌御様躰被相伺之外、益御安全  
之御儀外間可御心易候、隨而御樽肴被獻之外、紙面之趣

承届候、恐、謹言、

宋力キ  
正徳四年 二月十一日

本多中務大輔 忠良判

間部越前守 詮房判

松平薩摩守殿

334 吉貴公御譜中

正文在文庫

如芳翰青陽之嘉儀不可有盡期外、其許御無吳超歳之由珍  
重外、我等堅固令越年外、入御念外段欣然之至存外、恐  
、謹言、

宋力キ  
正徳四年 二月廿五日

紀伊中納言 吉宗判

松平薩摩守殿

御返報

335 吉貴公御譜中

正文在文庫

貴札致拜見外、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦思召旨尤之御事候、然  
者御城下爲火除、近所之家作等御取除被成度由、先頃被

仰聞及御挨拶付、御紙面趣被入御念御儀御座、恐惶  
謹言、

朱力キ  
正徳四年  
二月廿八日  
秋元但馬守  
喬知判

松平薩摩守様

御報

336  
吉貴公御譜中

扣寫在家老座

口上覺

私領知琉球に例年差渡り銀、當年及吹替被仰付度相願申  
外、委細之儀者留主(守)に差置り家來、嶋津帶刀と申者可申  
上外、以上、

朱力キ  
正保四年  
二月

松平薩摩守

337  
扣寫在家老座

覺

一薩州より琉球に差渡り銀高、當年者八百四貫目ニ御  
座外、例年之通吹替被仰付被下度奉願外、琉球に八月  
末九月上旬を限渡海仕事御座外間、當七月中旬之内銀  
子御渡被下り様奉願外、

一右銀於御當地御引替被下り付、薩州に遙々長途を爲持、

毎年往返爲仕り儀心遣御座外間、於大坂御引替被下り  
様奉願度外得共、當分於上方者吹替不被仰付様承及外  
間、薩州より相納り銀子之儀者、此節大坂御藏に相  
納り筋に被仰付被下度奉願外、以上、

松平薩摩守家來

三月

嶋津帶刀(仲仕)

338  
扣寫在家老座

松平薩摩守家來

琉球に被差渡り銀子、當年分八百四貫目吹替之儀、御勘  
定奉行に申渡り、右引替之銀大坂御藏に可被相納り、是  
又御勘定奉行に申渡り間、可被相談外、

朱力キ  
正徳四年

339  
扣寫在江戸家老座

今度、浦々添高札被 仰出外、御料者御代官、私領者地  
頭、被得其旨外、ぬけ荷買取外ものからめとり外ハ、  
其地之遠近に隨ひ、或ハ長崎或ハ大坂等の奉行所に早速  
注進有之、當地奉行所に及其旨を相達せらるへき由被



仰出外、

午三月

大目付、由松  
横田備中守  
(勘定奉行、忠香)  
大久保大隅守

條々

一 浦々におゐて船を借り外て、吳國船のぬけ荷を買取外  
もの有之由相聞得外、自今以後ハたとひ初より其事の  
子細をしらすして借し外とも、其船の船頭・水主はぬ  
け荷買取りもの、同罪に行はるへく外、然る上は諸國  
浦々の船頭・水主つねく申合せをきりて、もしぬけ  
荷買取りものに船を借し合せ外ハ、からめとり外て、長  
崎奉行所又ハ其所の御代官所・地頭になりとも、程近  
き所へ申出へし、もし又船中にてはとらへかたき事も  
外ハ、何方へなり共船をつけ外所ニある、其所のもの  
に告知せ、からめ取りて其所に預置、是又長崎奉行所  
又ハ其所の御代官所・地頭へなりとも申出へし、其船  
頭・水主にハ、急度御褒美を下さるへき事、  
一 浦々の船頭・水主、たとひぬけ荷買取り事を申合外共、  
或ハ船中にてなりとも或ハ船をつけ外所にてなりと  
も、ぬけ荷買取りものをからめとり外事前にするし外

ことくに仕外ハ、初より申合外罪科をゆるされ、御  
ほふびは船借外時に申合外代物の一倍を下し置くへき  
事、

附 其船の事ハ船主・船頭等相對にて借し外共、其水  
主のはたらきにより外て、ぬけ荷買取りもの并に  
申合外船頭等からめ取り外ハ、其水主に被下候御  
ほふひの事、是又船借外時、船主・船頭等と申合  
外代物の一倍を下さるへき事、

一 諸國浦方において、ぬけ荷買取りもの有之由を告知ら  
せりもの有之外ハ、其所の者共早速に出合外てから  
め取へし、もし油断せしめ、とりにかし外におゐてハ、  
急度其罪科に行はるへき事、  
右條々急度相守るへき者也、  
年號月日

奉行

正徳四年二月日

薩摩

大隅

日向

松平薩摩守

右之通別紙切紙二枚被相添<sup>レ</sup>、

(未)

一右大久保大隅守様より、御留守居御用之由被仰渡、午三月晦

日川上五後右衛門罷出<sup>レ</sup>外、右之御書付御渡被成<sup>レ</sup>、左<sup>レ</sup>而

御承知被成<sup>レ</sup>御届以御書被仰出可然由、被仰渡候通五後右衛

門申出<sup>レ</sup>事」

341

全御譜中

正文在文庫

御札令披見<sup>レ</sup>、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨<sup>レ</sup>尤<sup>レ</sup>、將又舊臘妻女

歳暮之御祝儀拜領難有由、紙面之趣令承知<sup>レ</sup>、恐<sup>レ</sup>謹言、

<sup>朱カキ</sup>正徳四年

三月七日

本多中務大輔

忠良判

間部越前守

詮房判

松平薩摩守殿

342

吉貴公御譜中

同年

東照宮百年忌景相<sup>ニ</sup>當來歳乙未<sup>ニ</sup>、然吉貴今茲在<sup>レ</sup>國、故自<sup>ニ</sup>

四月七日<sup>ニ</sup>至<sup>ニ</sup>同十七日<sup>ニ</sup>、修<sup>ス</sup>之<sup>ニ</sup>薩府南泉院<sup>ニ</sup>、乃使<sup>テ</sup>僧侶

百二十口 <sup>ヲシテ</sup>内福昌寺中曹讀誦法華千部於 神前<sup>上</sup>、南泉院權

僧正智周爲<sup>ニ</sup>導師<sup>一</sup>、同十六日吉貴束帶詣<sup>ニ</sup>神前<sup>一</sup>、同十七

日又束帶詣焉、又三郎忠休獻<sup>ニ</sup>納御太刀・金馬代<sup>一</sup>、島津

周防久備代而勤<sup>レ</sup>之、及一族・大身・城代・家老・若年

寄・大目付 <sup>大目付以上</sup>各着布衣、寺社奉行・勘定奉行・組頭各拜<sup>ニ</sup>

神前<sup>一</sup>、獻<sup>ニ</sup>上御太刀・馬代<sup>一</sup>、側用人・表用人・町奉行・

側目付等亦拜獻<sup>ニ</sup>上御太刀・青蚨<sup>一</sup>、其外役々替<sup>レ</sup>日詣參之

輩不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>舉算<sup>テ</sup>、四月二十一日賀<sup>ニ</sup>

東照宮御忌景事畢<sup>ニ</sup>、興行猿樂於城中<sup>一</sup>、權僧正智周及

法席集會之僧侶預<sup>ニ</sup>其事<sup>一</sup>、諸士受<sup>レ</sup>命登<sup>レ</sup>城見<sup>ル</sup>之、

343

吉貴公御譜中

正文在比志島隼人

加冠

比志嶋藤次郎

宜爲

右兵衛

正徳四年

四月廿八日

吉貴公

御判

344

吉貴公御譜中

正文在文庫

爲端午之賀儀帷子單物十到來祝着、委曲久世大和守可述之外也、

朱力キ  
正徳四年  
五月三日



薩摩中將殿

吉貴公御譜中

扣寫在江戸家老座

口上覺

松平薩摩守領分、浦高札建置外場所、去年書上外御高札不相見得浦々有之外、何様之子細ニ御高札不建置外哉、以前ニハ御高札建外所古キ書附ニ相見得外間、相糺可申出旨被仰渡、委細國元江申遣相糺外得共、去年書上外所之外、以前ニ御高札建置外書留等及無御座外、別紙申上外通御座外、以上、

五月

松平薩摩守内

伊佐岡伊右衛門

右ニ相附外別紙

大隅郡  
(肝付郡)

伊座敷浦

右伊座敷村と唱申候、彼邊之惣名ニ御座外、伊座敷村之内佐多村・大泊村會船ニ御座外故、御高札建置申候、

同郡

西道浦

右西道村と唱申候、櫻嶋之内ニ會船之場所ニ無御座外故、御高札建置不申外、同嶋之内横山村・有村會船故御高札建置申外、

國部 國分此字用申外、

右囃吹郡國分村老、海邊方壹里程山邊ニ御座外故、御高札建置不申外、

(始良郡)  
始羅郡

餅田浦

右餅田村と唱申外、會船之場所ニ無御座外故、御高札建置不申外、

薩摩國

鹿兒嶋郡

(鹿兒嶋)  
松崎浦 谿山郡ニ御座外、

右松崎浦老谿山郡谷山村邊之惣名ニ御座外、御高

札老谷山村海邊に建置申候、

谿山郡

(鹿兒島)  
平川浦

右谷山村之内に谷山村より支配仕、繼人家有之會

船之場所に無御座り故、御高札建置不申候、

(揖宿郡)  
瀬々串村

右給黎郡老喜入村之枝村に、人家少く會船之場所

に無御座り故、御高札建置不申候、

宮ヶ浦

右宮ヶ浦と申候所無御座り、揖宿郡宮ヶ濱と申所老

御座り、會船之場所に無御座り故、御高札建置不

申候、

(指宿)  
宮ヶ濱町

右宮ヶ濱町老揖宿郡指宿村之内に爲引續所に御

座り、指宿村に御高札建置申候故、宮ヶ濱町に老御

高札建置不申候、

河邊郡

(川辺郡)  
泊浦

右泊浦と唱申候、坊津村と爲引續所に御座り故、

坊津村に御高札建置、泊浦に御高札建置不申候、

同郡

(川辺郡)  
秋目濱浦

右秋目村と唱申候、久志村と爲引續所に御座り故、

久志村に御高札建置、秋目村に老、御高札建置不申

候、

(高江)  
高江村

右薩摩郡高江村老、海邊より壹里計山邊に御座り

故、御高札建置不申候、

白波町

(高江)  
右薩摩郡平佐村之内に白和町と申所御座り、此所に

可有御座哉、白和町老海邊より三里程山邊に御

座候故、御高札建置不申候、

日置郡

下野神川濱

右下野神川濱と申候所無御座り、日置郡神之川村と

申所御座り、御高札建置申候、

市來湊濱

右唱之所無御座り、日置郡市來村之内湊村と申所

御座り、御高札建置申候、

日置郡

串木ノ浦(串木野)

右串木野村と唱申外、右村之内濱村會船之故、御高札建置申外、

高城郡

大小路村(川内)

右大小路村老會船之場所ニ有無御座外故、御高札建

置不申外、

折口濱(阿久根)

右出水郡阿久根村之内ニ有、人家少ク會船之場所ニ

有無御座外故、御高札建置不申外、

黒野渡浦(阿久根)

右出水郡黒濱を黒野渡浦とも唱申候、同所ニ有御座

外、黒濱に御高札建置申外、

平野串浦

右出水郡長嶋村之内獅子嶋と申候小嶋之内、幣之串

浦と申候所御座外、此所之儀ニ有可有御座哉、會船

之場所ニ有無御座外故、御高札建置不申候、

右之通相糺候由國元より申來外、以上、

朱力斗

正徳四年 五月

松平薩摩守内

伊佐岡伊右衛門

吉貴公御譜中

正文在文庫

一筆啓上仕候、

東照宮百年御回御法會於大雄山(南榮院)

御宮御執行、首尾好相

濟外段承知仕、珍重御儀奉存外、此段爲可申上如斯御座

外、恐惶謹言、

朱力斗

正徳四年 五月十六日

島津又三郎(総惣)

忠休判

進上中將様

吉貴公御譜中

同年五月十九日、執政井上正岑招ニ留主居川上五後右衛

門一、傳下宜レ減ニ琉球國進接貢銀數ニ之事上、奉書筆記具ニ

于後一、

正文在文庫

一筆令啓外、

公方様益御機嫌能被成御座外間可御心安外、將又琉球國

に被渡外銀之儀付有相定候書付、注別紙差越外之條可被

得其意外、恐レ謹言、

朱力斗

正徳四年 五月十九日

井上河内守

正岑判

正文在文庫

去々年秋薩摩守言上有之ハ琉球國大清の進貢接貢の銀料、貞享年中御定の數を以て元禄年中の銀のことに造り下さるへき由の事、既に

前御代御聽に達し、且又彼國封王使の事のためを以て、當時銀造り出し事一切に御停止有之といへとも、別義によりて去年七月其御沙汰に及はれり、今度金銀の事前御代被仰出り御旨によられ、慶長御定の法のことに被仰付り、其事の子細ハ御定書に相見えりことに、就中近世以來諸國山々の金銀古來のことに出來らすを以て、此事の功終るへき期に至てハ、おほくの年數を經へき事なり、然れば今度被仰付り所の銀を以て、貞享年中御定の數のことに彼國へ渡されりにおゐてハ、我國通用の銀のため相妨り事共有之り、況又元禄以來の金銀の法を改められ、慶長御定のことに御沙汰り處に、彼國へ渡されり銀料に限りて、別に元禄の法のことに造り出さるへきは、

御國躰におゐて尤以て不可然御事に、琉球國の事ハ、慶長年中薩州の進退に任せられり以來、他の外國の例には比すへからずといへとも、當時大清の正朔を奉し、其封爵を受り事におゐてハ、全く我國の事に准すへからざる事に、然らば彼國の利害を以て我國の利害に引くらへりにハ、其輕重緩急大きに同しかるへからず、薩州におゐてもよろしく

前御代の御旨今度御沙汰の次第によられ、我國の公私當時後代迄の事を思慮有之、彼國に渡されり銀料の事其沙汰可有之り、自今以後若其銀料におゐてハ、今度被仰付り所の慶長御定の銀を以て渡さるへき御事に、其銀數の事に至てハ、薩州の沙汰として其數を減しりて議定あるへき所の銀數を以て言上あるへく、もし又我國彼國の幸によりて、諸國銀山より出來りり所、其數を倍しりにおゐてハ、これ又其時の御沙汰有之へき御事に、すへて此等之趣よろしく其旨を存せらるへく、以上、

朱カキ

正徳四年

五月十九日

吉貴公御譜中

扣寫在江戸家老座

近年以來長崎往來の唐船私商賣の年々に相長し、或は往來の乗筋かはり、或は海上に間切り居りて日數を送り、或は其數多く見得來候船共其行方をしらす、就中猥りに陸に上りて水を取り木を伐り、漁船の捕り網魚、女童のひろい藻草等迄をも奪取り、居人相制し時時は兵具を以ふせき、番船相近つき時ハ石火箭を討掛り事共有之由相聞へり、是によりて長崎奉行所は被仰付、唐人共は申渡り子細有之候間、自今以後ハ番船等の事其沙汰有之、常々海邊を相守り、右のことくの唐船等有之におゐてハ、其船を乗り取り、其人を切捨て早速注進あるべく、我國の船等、唐船に相近つきもの有之におゐてハ、其人を擲取り、これ又早速注進あるべく、難風に逢ひて漂着し唐船の事におゐてハ、先例のことく沙汰し外て長崎に護送あるべく者也、

午五月

長崎往來の唐船私商賣の事年々に相長し、其外御國法に相背き外事等有之に就て、今度唐船の事におゐてハ、長崎奉行所并彼近國の領主は被仰出旨有之、然れハ海上の國々に所領有之の面々、毎年領内の船數を相改め、

船切手の事等嚴密に沙汰有之、若私商賣の者のために船を借しあわせ外事有之におゐてハ、去比被仰出添高札之旨に任せ、其者を擲捕、早速注進すへき由急度下知せらるべく、自今以後船頭・水主等の事ハいふに及はず、何者に限らず私商賣の事において、犯罪の輩有之においてハ、其領主越度の御沙汰たるべく間、よろしく其旨を存らるべく者也、

朱カキ  
正徳四年 午五月

右書付貳通先達を爲心得相違り、追る自是一左右可有之の間、其節を書面之通可被心得り、以上、

(朱)

「右者午五月廿一日井上河内守様より御留守被召呼、伊佐岡伊右衛門罷出外處、松倉文右衛門を以右御書付貳通並添書壹通御渡被成り、右ニ付而御國元を御屈之儀者、餘例之通被成り様ニと承り通伊右衛門申出外」

351 吉貴公御譜中

正文在文庫

貴翰拜見仕外、御領分薩摩國之内甌島前之浦に、去九日

(薩摩郡)

歸唐之寧波船一艘人數三拾六人乗組漂着御碇外處、繫場惡敷外付、湊に挽入、如例番船等附置り、洋中この船損

外間、修復仕度旨唐人共相願外由、彼嶋被差置外番人方  
申越外間、修復相調外者、日和次第出帆外之様可被仰付  
由、御紙表之趣承知仕外、尤右之段從御家來中委細被申  
越外、恐惶謹言、

朱力平  
正德四年 五月廿三日

(長崎奉行)  
久松備後守  
定持判

(同)  
駒木根肥後守  
政方判

松平薩摩守様  
御報

352 吉貴公御譜中

正文在新納五郎右衛門

加冠

宜爲

正德四年五月廿八日



新納豐五郎  
右衛門

353 繼豊公御譜中

正文在琉球國司

爲年始之祝儀被差渡使簡、殊目錄之表贈給之、入念外段

令祝着外、猶期後喜之時外、恐惶不宣、

朱力平  
正德四年 六月二日 又三郎忠休(花押) (No.5)

謹上 中山王

354 全上

芳札令披見外、

滿君御方爲御上京祝詞使者被差渡、殊別錄之通贈給之令  
怡悦外、恐惶不宣、

朱力平  
正德四年 六月二日 又三郎忠休御判

謹上 中山王

355 全上

芳簡令披見外、中將様去年御參府御延引被 仰出外、爲  
怡使者被差渡、殊目錄之通被相贈之段入念外儀令大悦外、  
恐惶不宣、

朱力平  
正德四年 六月二日 又三郎忠休御判

謹上 中山王

356 全上



芳墨令披閱<sup>レ</sup>、其方無吳事由玆重<sup>レ</sup>、仍從大清贈物之内  
織物品々給之過量之至<sup>レ</sup>、恐惶不宣、

又三郎

六月二日

忠休御判

謹上 中山王

357

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見<sup>レ</sup>、就酷暑之節

公方樣御機嫌之御樣躰以使者被相伺之<sup>レ</sup>、益御安全御事  
外間可御心易<sup>レ</sup>、隨<sup>レ</sup>琉球布十卷・砂糖漬天門冬一器・  
赤貝塩辛一器・琉球泡盛酒二壺被獻之<sup>レ</sup>、各申談遂披露  
外處一段之御仕合<sup>レ</sup>、恐々謹言、

朱力キ

正徳四年

六月十二日

秋元但馬守

喬知判

松平薩摩守殿

358

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見候、就酷暑之節

公方樣御機嫌之御樣躰被相伺之<sup>レ</sup>、益御安全御事外間可

御心易<sup>レ</sup>、隨<sup>レ</sup>目錄之通被獻之<sup>レ</sup>、紙面之趣令承知<sup>レ</sup>、  
恐々謹言、

朱力キ

正徳四年

六月十六日

本多中務大輔

忠良判

間部越前守

詮房判

松平薩摩守殿

359

吉貴公御譜中

同年七月五日中山王尚敬奉<sup>レ</sup>甲<sup>二</sup>

前大樹家宣公<sup>一</sup>、使者棚原親方齋<sup>三</sup>書翰<sup>一</sup>來<sup>三</sup>薩府<sup>一</sup>、則遣<sup>三</sup>  
新納彌五郎時方於東武<sup>一</sup>、捧<sup>三</sup>之於<sup>一</sup>幕府<sup>一</sup>、

360

吉貴公御譜中

正文在文庫

爲八朔之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被  
獻之<sup>レ</sup>、遂披露外處一段之御仕合<sup>レ</sup>、恐々謹言、

朱力キ

正徳四年

八月三日

久世大和守

重之判

阿部豐後守

正喬判

井上河内守

正岑判

松平薩摩守殿

吉貴公御譜中

正文在文庫

一筆致啓上<sub>レ</sub>、琉球國被差渡<sub>レ</sub>銀子之儀、最前奉書并以書付相達<sub>レ</sub>付<sub>レ</sub>、琉球國に被仰越<sub>レ</sub>上、重<sub>レ</sub>御申聞可有之旨、被入御念委細御紙面之趣致承知<sub>レ</sub>、恐惶謹言、

朱力キ  
正徳四年

八月十一日

井上河内守

正岑判

松平薩摩守様

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見<sub>レ</sub>、勝田元哲死去之段驚被存<sub>レ</sub>、  
(月光院之)

公方様 (家継生母) 月光院様御機嫌之御様躰被相伺<sub>レ</sub>之、御安全之

御事<sub>レ</sub>間可御心安<sub>レ</sub>、紙面之趣各申談及言上<sub>レ</sub>、恐<sub>レ</sub>謹言、

朱力キ  
正徳四年

八月十二日

久世大和守

重之判

松平薩摩守殿

全上

御札令披見<sub>レ</sub>、就

御代替、從琉球國中<sub>レ</sub>山御祝儀申上<sub>レ</sub>使者、且又中山王自分繼目爲御禮差上<sub>レ</sub>使者、其地來着<sub>レ</sub>、使者差上<sub>レ</sub>段中山王難有由、其方迄御禮申達<sub>レ</sub>之旨得其意<sub>レ</sub>、依之被差越使者<sub>レ</sub>紙面之趣承届<sub>レ</sub>、恐<sub>レ</sub>謹言、

朱力キ  
正徳四年

八月十三日

土屋相摸守

政直判

松平薩摩守殿

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見<sub>レ</sub>、勝田元哲死去之段驚被存<sub>レ</sub>、

公方様 月光院様御機嫌之御様躰被相伺<sub>レ</sub>之、御安全之

御事<sub>レ</sub>間可御心易<sub>レ</sub>、紙面之趣令承知候、恐<sub>レ</sub>謹言、

朱力キ  
正徳四年

八月十六日

本田中務大輔

忠良判

間部越前守

詮房判

松平薩摩守殿

全上

一筆令啓達<sub>レ</sub>、其表弥御無<sub>レ</sub>吳<sub>レ</sub>哉承度存<sub>レ</sub>、随<sub>レ</sub>領所之

鮭二尺令進覽<sup>朱力\*</sup>、猶期後音之時<sup>朱力\*</sup>、恐<sup>朱力\*</sup>謹言、

正德四年 八月十八日 水戸中納言 綱條判

松平薩摩守殿 人<sup>朱力\*</sup>、御中

吉貴公御譜中

正文在大乘院

五指量愛染明王 一体自御頭至蓮台下以下 指量之故、称五指量

弘法大師 一刀三拜之御作

大師依 嵯峨帝之敕命、以谷渡藤御作被成<sup>朱力\*</sup>、付谷渡 愛染と被號候、

頼朝公別<sup>朱力\*</sup>の御信仰<sup>朱力\*</sup>の 忠久公に御拜領被成、薩州滿 家院厚地村に寺を御建立被遊被號平等王院<sup>朱力\*</sup>、夫より 御代<sup>朱力\*</sup>、御崇敬被遊、寛永十四年 家久公御病中<sup>朱力\*</sup>に御使 者平田清右衛門純正を以江戸に被差越、 光久公に被 進<sup>朱力\*</sup>り節、御當家代<sup>朱力\*</sup>、御相傳名譽之尊像<sup>朱力\*</sup>の候間、慥御 頂戴被成置、向後別<sup>朱力\*</sup>の可有御信仰事專要<sup>朱力\*</sup>の旨、 家 久公以御書被讓進候、

右五指量愛染明王<sup>朱力\*</sup> 御家御讓物<sup>朱力\*</sup>の御代<sup>朱力\*</sup>、御相傳肝要 之御本尊之故、貴寺格護<sup>朱力\*</sup>の護摩所に御安置被成置<sup>朱力\*</sup>、

至後年疑敷儀表可有之<sup>朱力\*</sup>條致副書、各加判形可渡置旨、 所 御意<sup>朱力\*</sup>也、仍執達如件、

正德四年甲午八月廿一日 在日付之下 朱力\* 肝付主殿判 (兼題)

種子嶋彈正判 (久基)

鳴津將監判 (久當)

鳴津内記判 (久實)

鳴津大藏判 (久明)

朱力\* 在八之字之通 大乘院

正文在兵員所

一御旗 一流

八幡大菩薩之文字 文覺上人筆

右頼朝公之御旗 忠久公に御拜領被成<sup>朱力\*</sup>、

一御旗 二流 一流者時雨之御旗 一流者白御旗

右時雨之御旗<sup>朱力\*</sup>天文十四年 貴久公中興之大守<sup>朱力\*</sup>に御定

被遊、始<sup>朱力\*</sup>る御出陣之時御指せ被成<sup>朱力\*</sup>、 御家之儀、雨

を以嘉瑞と被成<sup>朱力\*</sup>り故時雨之模様有之、 白御旗之儀<sup>朱力\*</sup>、

本より爲源家之御佳例故 貴久公表亦御用被成<sup>朱力\*</sup>、二

流共 貴久公御實名有之、御吉例之御旗御什物<sup>朱力\*</sup>の

之<sup>朱力\*</sup>、

右三流之御旗 御代々御傳來肝要之御什物ニ有御吉例之御旗外故、今般新ニ右三流之模製被仰付、御相傳之御旗者如本被納置、右新製之御旗向後御參勤御往還之節御持せ被成善ニ被仰出外、且又文覺上人筆八幡大菩薩文字書寫之儀、依爲 東照宮御別當、南泉院權僧正江書寫被仰付外處、僧正御請被申上、八幡大菩薩之文字被致書寫外、到後年紛敷儀表可有之外條、右之趣致副書可渡置之旨所 御意候也、仍執達如件、

正德四年午八月廿一日

肝付主殿判

物頭

正文在兵具所

一御鍔一流

忠久公御鍔ニ有 御家御代々御相續之御重物ニ有外處、明徳四年 師久公之御子上總介伊久より 元久公江右御鍔 御家鎮護之御寶器之由候有、御附屬ニ有被納、御寶藏御家珎と被成外、

一御旗一流

八幡大菩薩之文字 文覺上人筆

頼朝公之御旗 忠久公江御拜領被成候、

一御旗二流

一流ハ時雨之御旗  
一流ハ白御旗、二流共ニ貴久公御表名有之

時雨之御旗者天文十四年 貴久公中興之大守ニ 御定被遊、始有 御出陣之時御指せ被成外、 御家之儀雨を以嘉瑞と被成外故時雨之模様有之、二流共ニ御吉例之御旗御什物ニ有之外、

一御旗一流

義久公御旗御實名有之、

一御冑一頭母小泉

文祿四年御領國之御目錄可被遣候間、義弘公御歸朝可被成旨朝鮮國江御朱印御到來御歸朝被遊外處、於伏見從 秀吉公、平野肩衝之御茶入と此御冑御拜領被遊、則朝鮮江御渡海、慶長三年十月朔日四川之御一戰被得大利、被遊御軍配外節、始有此御冑被爲召外、左外有御代々御相傳候處、元祿九年四月廿三夜 御城回祿之節、此御冑罹火災雖燒損、今其形有之外、

一御手鍔壹本城州長吉作

元龜三年五月四日伊東家より加久藤之城ニ押詰、急ニ可攻取と仕外時、義弘公飯野之城より 御出馬候有、於木崎原御鎧を御合せ、則敵を御押崩追討被成、小林鬼塚原ニ有、柚木崎丹後を御討取被成外時之御道具ニ

否候、

一一本杉御馬驗 壹本

於朝鮮國 義弘公御作せ、泗川之御一戰ニ始る御持せ、  
被得大利外、其以後此御馬驗ニ御定被成、別る御吉例

之御馬驗ニ否候、

一御鎧一領

日新様御召料

一御鎧二領

義久公御召料

一御鎧一領

於朝鮮國、慶長三年十月朔日泗川合戦ニ 家久公御手

自敵七人御討捕被遊、 家久公表御肩ニ御手疵被負外

時被爲召候御鎧ニ否候、

右三行之御鎧 御代々御相傳外處、元禄九年四月廿三

夜 御城回祿、其時罹火災燒失、其札雖有之、混雜而

不分明外、

右拾ヶ條之品々、御家御讓物ニ有、御代々御相傳肝要之

御什物ニ外間、取扱等無聊尔謹可藏置外、至後年紛敷

儀々可有之外條、致副書可渡置旨、所 御意候也、仍執

達如件、

正徳四年甲午八月廿一日

肝付主殿判  
種子嶋彈正判

嶋津將監判

嶋津内記判

嶋津大藏判

物頭

369

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披閱外、先頃徳川鶴千代殿初る 御目見首尾好相

濟跡重外、依之入御念外段欣然之至存外、恐々謹言、

朱力キ

正徳四年 八月廿五日

尾張中將

繼友判

薩摩中將殿

御報

370

全上

芳翰令披見外、先頃徳川鶴千代初る 御目見相濟外付、

入御念外段欣然之至存外、恐々謹言、

朱力キ

正徳四年 八月廿五日

紀伊中納言

吉宗判

松平薩摩守殿

御返報

貴勅拜見仕、當表無宿躰之者并町中帳面はつれ之者共  
遂吟味、當地を立退御領内筋に罷越、隱居儀及可  
有御座哉と先達を委細申進候之趣、御領内被成御吟味  
處、右躰之者居合不申、若此以後相替儀及御座、  
御家頼中、被申越、様猶又被仰付置、由、委曲御紙上之  
趣承知仕、被入御念御儀奉存、恐惶謹言、

朱力キ  
正徳四年  
八月廿五日

久松備後守  
定持判

駒木根肥後守  
政方判

松平薩摩守様  
貴報

正文在文庫

御札令披見、

公方様御機嫌之御様躰被相伺、益御安泰之御儀、間  
可御心易候、隨、串炮一箱被獻、各申談、遂披露、  
處一段御仕合、恐、謹言、

朱力キ  
正徳四年  
八月廿九日

久世大和守  
重之判

正文在山岡齊宮

可稱山岡十郎大夫

正徳四年八月晦日



赤山十郎大夫

正文在文庫

御札令披見、

公方様御機嫌之御様躰被相伺、益御安全之御儀、間  
可御心易、隨、御看一種被獻、紙面之趣令承知、  
恐、謹言、

朱力キ  
正徳四年  
九月三日

本多中務大輔  
忠良判

間部越前守  
詮房判

松平薩摩守殿

爲重陽之賀儀小袖五到來祝着外、委曲土屋相摸守可迹之  
外也、

朱力キ  
正徳四年  
九月七日  
家継公  
墨印

薩摩中將殿

376 吉貴公御譜中

正文在文庫

なぞくいよく御機嫌よくならせられ、御めてた  
く存まいらせ外、かしく、

御ふミ下され外、まつく

公方様

一位様御機嫌よくならせられ外、(家直、近衛氏) 偕は六月十一日ニ

一位様より土用御見廻(細貫御客) 信證院さまへまいらせられ、同

十三日ニ 奥さまへも御目錄のこたく参らせられ、さ

つまの守さまかたしけなく思しめし外との御事ニ、御

禮文のやう御念入外御事ニそんしまいらせ外、かしく、

朱力キ  
正徳四年

とよ原

常盤井

松平

薩摩守さま

御返事

みむろ

たかせ

川嶋

丹後

御乳

くら橋

377 吉貴公御譜中

正文在文庫

御まんそくニ思しめし外、此よし何もよく心得申せ  
との御事ニ御座外、かしく、

御ふミ下され外、まつく

公方様

一位様御機嫌よくならせられ、めてたさ、偕は去る比

一位様方土用御見廻として御目錄之通しんしやう院さ

ま・奥さまへ参らせられ外御事、さつまの守さまニも忝

思しめさせられ外との御事にて、御念入まいらせられ外

御禮文のやうひろういたし参らせ外へハ、かしく、

朱力キ  
正徳四年

嶋津將監殿

岩倉

同 帶刀殿 御返事

かよ

全上

なをく萬々年も相かハらす御めてたさ御たつね被  
遣りやうといわる思しめしり、此よしよく申せとの  
御事り、めてたくかしく、

七月廿一日の御ふミくたされり、まつく

公方様

一位様御機嫌よくならせられ、御めてたくおほしめしな  
されり由、さてハ六月十八日

公方様より おくさまへ暑氣御たつねとして、御もくろ  
くの通御拜領被成り御事、さつまの守さまかたしけなく  
思しめしりよし、御禮御ふいてう御申あけ、御ふミのや  
う披露いたしまいらせりへハ、御念入られり御事ニ思し  
めしり、めてかしく、

朱カキ  
正徳四年

嶋津將監殿

岩くら

同 帶刀殿

かよ

御返事

あ

全上

なをく御機けんの御事、何も御めて度覺しめしな  
られりやうと存まいらせり、かしく、

七月廿一日の御ふミくたされり、まつく

公方様

一位様御機嫌よくならせられ、御めてたく思しめし被成  
りよし、さてハ六月十八日

公方様より暑氣御たつねとして、おくさまへ御もくろく  
の通御拜領被成、誠ニ御念比の御事、さつまの守さまか  
たしけなくおほしめしなされりよし、御禮御申あけ文の  
やう御念入られり御事、何もよろしく御序の時分御さた  
申されり、かしく、

朱カキ  
正徳四年

松平

御返事

さつまの守さま  
人々御中

とよハラ

ときハる

みむろ

たか瀬

川しま

たんこ

御ち

くら橋



全上

なをくさつまの守さまにも御ふしの御事めて度思  
しめし外、此よし申せとの御事にて御さ外、かしく、  
七月廿七日の御ふみ下され外、まつく

公方様

一位様御機嫌よくならせられ、御膳等もめしあけられ外  
まゝ、御心易おほしめし被成外へく外、御機けん御うか  
ゝいと御座外て、御ふみのやう御もくろくのとをり御あ  
け被成、披露いたしまいらせ外へハ、御満足と思しめし  
外、此よしよく申せとの御事ニ御さ外、かしく、

朱カキ  
正徳四年

嶋津將監殿

岩倉

同 帶刀殿

かよ

御返事

381 吉貴公御譜中

同年九月九日辰刻、吉貴發三府城一東行、率三琉球使與那城

王子・金武王子

慶賀使與那城、謝恩使、  
命武從者都百八十人

家老肝付主殿兼柄、

若年寄比志島隼人範房、用人市來次郎左衛門政芬兼善頭、側

用人相良清兵衛長英等屬ニ從之、權僧正智周亦從而上京、

家老島津將監久當、側用人島津十郎左衛門久置、側目附  
平岡八郎太夫之品等護ニ送琉使、吉貴取ニ陸於九州ニ琉使  
駕ニ船于向田、

382 吉貴公御譜中

正文在文庫

なをく何もよく申せとの御事ニ御さ外、めてたく  
かしく、

八月二日の日付にて御ふみくたされ外、まつく

一位様御機嫌よく御座あそハされ、御心易おほしめし被  
成よし外、さては七月十一日奥かたへ御留守御たつねま  
し、御目錄の通參らせられ外へハ、御てまへさまへ御ふ  
いてう仰參らせられ、御てまへさまかたしけなく思しめ  
し被成外由、御禮と御座外て文のやうひろういたしま  
いらせ外へハ、御念入り事と御満足と思しめし外、めてた  
くかしく、

朱カキ  
正徳四年

岩倉

梅園

御返事  
松平さつま守さま

人々御中

吉貴公御譜中

正文在伊集院來迎院

知行目錄

高貳拾石

薩州伊集院之内名寄帳別冊有、

右南泉院爲末寺、今度就御再興外、爲寺領被寄附之訖、

全可有所務外、仍如件、

正德四年午九月十五日

(種子島) 種彈正

久基判

(島津) 嶋内記

久貫判

(島津) 嶋大藏

久明判

在月之字之通  
來迎院

吉貴公御譜中

正文在文庫

貴翰拜見仕外、來朝之南京船壹艘人數貳拾九人乘組、去

五日御領分薩摩國之内下飯嶋前之浦に漂着卸碇外付、如

例番船等堅附置外由、從彼嶋申越外間、日和次第警固被

相添、當津に御差越可被成由、御紙面之趣承知仕外、恐

惶謹言、

朱力平

正德四年

九月十七日

(長崎藩) 久松備後守

定持判

(同) 駒木根肥後守

政方判

松平薩摩守様

貴報

全上

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悅旨尤候、將亦琉球國に

被渡外進貢・接貢料之銀子吹替之儀、願之通就被 仰付

之外、中山王に被申越外處難有之由、爲御禮其方迄使翰

差渡外之旨得其意外、依之被差越使者外紙面之趣各申談

及言上外、恐々謹言、

朱力平

正德四年

九月十八日

井上河内守

正岑判

松平薩摩守殿

全上

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悅旨尤外、將又琉球國に

全文  
正文在琉球國國司

被渡外進貢・接貢料之銀子吹替之儀、願之通就被仰付之外、中山王に被申越外處難有之由、爲御禮其方迄使翰差渡外旨得其意外、依之被差越使者候紙面之趣承届外、恐  
、謹言、

朱力キ  
正徳四年  
九月十八日

松平薩摩守殿

土屋相摸守  
政直判

全上

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又琉球國に被渡候進貢・接貢料之銀子吹替之儀、願之通就被 仰付之外、中山王に被申越外處難有由、爲御禮其方迄使翰差渡外旨紙面之趣令承知外、恐、謹言、

朱力キ  
正徳四年  
九月十八日

本多中務大輔  
忠良判

間部越前守  
詮房判

松平薩摩守殿

全上

芳翰令披見外、然者進貢・接貢料之銀子吹替之願申上置外處、去秋願之通被仰渡難有被存之旨、被差越使簡令承知外、其旨則江戸に表申上外、猶使者屬舌頭外、恐惶不  
宣、

朱力キ  
正徳四年  
九月十八日 中將吉貴御判

謹上 中山王

正文在琉球國國司

家宣公去々歳

薨御付而、棚原親方被差越被入念儀外、江府に御悔被申上外段從是以使者申上外、恐惶不宣、

九月十八日 中將吉貴御判

謹上 中山王

全上

正文在文庫

貴翰拜見仕外、

公方様益御機嫌能被成御座奉恐悦外、然者今般御手前様爲御參府去九日御國許御發駕、肥後表陸地御旅行被成、

且又此節從琉球中山王兩使就被差上候、御領内老被召列  
外得共、大勢之儀御座外故、海路御差越被成、豊前從小  
倉被召列外由、委曲御紙上之趣承知仕外、隨御太刀・

馬代黄金十兩并御目錄之通被懸貴意辱奉存外、恐惶謹言、

朱力年  
正徳四年 九月十八日

松 薩摩守様  
貴報

(長崎奉行)  
駒木根肥後守  
政方判

391 吉貴公御譜中

同年十月七日吉貴著豊州大里、然風不順る乘船未到、  
暫留三滯于茲、

392 正文在文庫

御札令披見外、秋元但馬守卒去之段被承之、被絶言語外、  
公方様御機嫌之御様躰被相伺之外、御安全之御事外間可  
御心易外、紙面之趣各申談及 上聞外、恐々謹言、

朱力年  
正徳四年 十月九日

松平薩摩守殿

久世大和守  
重之判

393 全上

御札令披見外、秋元但馬守卒去之段被承、被絶言語外、  
公方様御機嫌之御様躰被相伺之外、御安全之御事候間可  
御心易外、紙面之趣令承知外、恐々謹言、

朱力年  
正徳四年 十月十一日

松平薩摩守殿

本多中務大輔  
忠良判  
間部越前守  
詮房判

394 全上

御札令披見外、  
公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又爲參勤去  
月九日國許發足、中山王兩使被召連由得其意外、紙面之  
趣各申談及 上聞外、恐々謹言、

朱力年  
正徳四年 十月十一日

松平薩摩守殿

久世大和守  
重之判

395 全上

御札令披見外、  
公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將亦爲參勤去  
月九日國許發足、中山王兩使被召連由紙面之趣承届外、

恐く謹言、

朱力キ

正徳四年

十月十一日

土屋相摸守

政直判

松平薩摩守殿

398

扣寫在江戸家老座

同月十八日使下島津帶刀仲休ヲシテ呈申之於正岑上、

396  
全上

御札令披見、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤、將又爲參勤去月九日國許發足、中山王兩使被召連之由、紙面之趣令承知、恐く謹言、

朱力キ

正徳四年

十月十三日

本多中務大輔

忠良判

間部越前守

詮房判

松平薩摩守殿

397  
吉貴公御譜中

同年十月十七日駕船于大里、率琉使涉海潮、同二十五日著播州奈波津、吉貴從是又取陸、琉使過海路、

先是執政井上正岑書五箇條、問琉球國入貢大清國之次序、嚮一條筆記答之、今又三條詳筆記之、

琉球中山王大清に差渡り銀子吹直被仰付被下度旨、去々年之秋薩摩守奉願り節、五ヶ條之御尋之趣御座、其内銀子差渡り儀付る之二ヶ條者、去年六月委細申上り、右之外三ヶ條者、常沙汰不仕置儀り故、琉球に申越今度申來り付、申上り覺去々年之秋御尋五ヶ條之内

一 大清天子より琉球王に賜り物共如何り歟、又琉球より出り物等大清に買求り物表有之り歟之事、

一 右琉球中山王より進貢使差渡、北京之勤相仕廻り節、大清天子に賜物

蟒緞・青藍彩緞・藍素彩緞・藍素・緞衣素・閃緞・錦・紬・羅・紗

右織物之内、天子之服被用り紺地龍之織物及加賜り、一琉球より出り物品を定、大清より大分に買求り物者無

御座り、去々年秋御尋五ヶ條之内

一琉球より大清國に使を遣しり様子次第、又調物等を表

仕々様子次第等、皆々定法可有之、如何々歟之事、

一右北京に隔年ニ進貢使差渡り、其官人者、  
正使

耳目官壹人 副使 正儀大夫壹人

右兩使位階正三品之者ニ御座り、大清皇帝に目見  
得仕り節及於三品席拜禮仕り、

右之外差渡り官人者、

都通事 才府使 官舎使 在船都通事 存留通事

北京大筆帖 福建大筆帖 福建小筆帖

正使 使贊 管船直庫

總管 北京總管

水梢并跟伴

右段々之人數貳百人程

一右人數船貳艘ニ乗組、大清福州之内定海之泊に着船仕

り、日和ニより福州之内五虎と申所に乘入り節及御座

り、於此所者番人船ニ乗來、何國之船ニあり哉と尋り

付、琉球進貢船之由答、執照と申琉球より之手形を見

せり得者構無之、

一右五虎之津に乘入閩安鎮と申關所に參、琉球使者着船

仕り段相斷り得者改有之、閩安鎮に上り官人方に致參

官、土産物相送、執照と申手形差出り得者、右關番之

官人方福州官人方に、琉球船着岸之注進仕、右手形及

遣り、其時布政司と申福州之大官人より海防官之者差

遣、船可乘入由申來、右官人致案内、新港と申所に乘

入申り、

一新港に參着仕り得者、海防官城守と申官人立合、船相

改り後、福州府之琉球館屋に着仕り、琉球より定海之

泊迄船路日本道之積仕、四百八拾里餘有之由申傳り、

定海方福州府迄者貳拾里餘御座り、

一進貢使爲警固、館屋に把門官上下五六人又者海防官戸

部城守兵道と申官人より、兵并檢見人三拾人計差遣、

滯留中爲致門番り、

一中山王より福州布政司に之咨文、琉球通事を以布政司

衙門に差出り、

一右之後福州諸官人に參官可仕旨、琉球通事を以案内申

達、其後土産物持參仕り、

一右之後諸官人より下程と申りぬ、酒肴・野菜・菓子等

相贈り、

一進貢使福州に參着之段、布政司方福州都堂官に相達、

都堂方北京に披露有之、北京之差圖次第福州發足上京

仕り、上京之人數正使・副使并從者迄琉球人貳拾人餘

こゝ罷上り、其外之琉球人老福州に殘置申り、

一福州府を北京に發足前、琉球正使・副使其外琉球人  
殘布政司於衛門、會盤宴と申饗應皇帝を被下り、正使・

副使ハ布政司相伴仕り、右饗應之品老

肴貳拾碗程 菓子類三拾品程 酒

右臺五程載、其上塔婆飭等有之り、

一都通事以下之琉球人老、布政司下官并河口通事相伴  
仕り、饗應之品老

肴拾五六碗 菓子五六品 酒

一從者・水楢に老豚光餅・老酒賜り、

右饗應相濟旅館に罷歸り後、布政司を路次樂相備、使  
者を以贈饗と申りる食物品を贈遣り、

一正使・副使上京仕り付、福州より河口通事壹人、手代

貳人、伴送官壹人爲案内附遣、道中又老於北京諸用相  
辨せり、右之外護送と申兵貳拾人計附遣り、於宿る老

其所之兵老數十人爲致番り、是老狼藉者爲押と相見得  
申り、

一道中人馬其外諸用之儀老、國より之馳走を申付、且

又路樂をも備申り、

一福州より出立、同國之内、浦城縣と申所迄船拾艘計乘

組、日數十五六日程を參り、水路百三拾五六里程有之  
り、

一右浦城縣より清湖迄三拾五六里程山路參り、清湖より

杭州府錢塘江迄水路百貳拾六七里、船拾艘計を乘組、

十日程を着船仕り、錢塘江を陸二里程參、杭州府西湖

と申所に四五日滯留、將軍都堂・布政司糧道と申官人  
に致參官音物贈答仕り、

一右杭州府より蘇州府迄水路六拾里程、船四五艘を乘組

五六日程蘇州府に參着、此所に及三四日滯留、都堂・

布政司と申官人方に參官音物贈答仕り、

一蘇州府より揚州府迄水路六拾五六里程、日數五六日計

を參着仕り、揚州府を又水路五拾貳三里程、淮安府に

五六日を參着、此所に及三日程滯留、部院縣官と申官  
人に音物贈答仕り、

一淮安府より北京之内張家灣迄水路四百五六里程、日數

四拾日計罷越り、福州を北京迄之道程日本道之積を二仕、

八百八拾里餘御座り、

一北京城一日路手前を張家灣と申所に參官仕り節、先達

を禮部に案内申遣り付る、下官之者途中四五里程迎出

申、城内會同館に案内仕り、

一會同館に禮部下官五六人附置、琉球人諸用相辨させ、

且又章京と申武官隨兵貳拾人程の晝夜警固仕、

一進貢物并表文・咨文差出り節、館屋に禮部下官四五

人、武官貳三人兵數拾箇召列來、琉球正使・副使を警

固仕、禮部衙門に參、提督官出會案内仕、本堂之前高

臺に都通事表文載置、其後禮部被出會、其時正使

表文を本堂之正面に捧、禮部直請取之、右兩使に會釋

有之、其後致退出、禮部に之咨文、河口通事を禮

部之下官に前以相渡、進貢物を提督請取之、進貢物

者

煎熟硫磺 煉熟白剛錫 紅銅

一皇帝に使者拜禮之次第、前日提督を相觸、禮部之下

官并兵數拾處、琉球使者を警固仕登城、諸官人庭上

祇候、皇帝太和殿に御、琉球之正使・副使三品之席

に進、三跪九叩頭之拜禮仕、都通事・河口通事も相

附、四品之於席、三跪九叩頭之拜禮仕、入御之後諸

官人と一面に庭上列座仕、滿州茶被下、退出仕、

一琉球使登城又者禮部衙門に罷出り節、何時も禮部之

下官并兵相添、路次之警固仕せ、轎兒并從者之乘馬

も馳走に出申、

一右之次第に皇帝に目見得仕、後日二下馬宴と申饗

應禮部衙門之本座於正面、禮部相伴に被下之、從者

迄も不殘段、席を分、饗應皇帝被下、

進貢使に被下宴

茶・酒・菓子貳拾品程銀鉢に盛之、羊一肢・鷄一

宛銀鉢盛之、

都通事に被下外宴

茶・酒・菓子拾五六品程銀鉢盛之、羊一肢・鷄一

宛銀鉢盛之、

伴送官并河口通事に被下外宴

茶・酒・菓子拾五六品程銀鉢盛之、羊一肢・鷄一

宛銀鉢盛之、

大筆帖以下從者・跟伴等之宴

茶・酒・羊・菓子拾品程銀鉢盛之、

右饗應始以前、進貢使并都通事・河口通事・伴送官

迄禮部衙門庭上に禮部列出之、皇城に向、三跪九叩頭

之禮拜仕せ、禮終を面々段々之席に歸座仕、宴に取付、

賞賚相濟、又如最前拜禮仕、饗應之品も不殘持歸申

外、

一禮部・提督・筆帖式・把門官



此四人に老使者を進物仕り、中山王を老皇帝に進貢物之外官人に老惣の進物不仕、悉使者よりの進物仕り、

一 皇帝より中山王への拜領物可相渡旨、前日提督より相觸り付、先日之次第の禮部所に參、禮部に相附致

登城、牛門と申正西門之前に中山王に拜領物前條に記り品々并使者・從者・跟伴への拜領物段々高臺載置り、

使者并都通事・河口通事・伴送官案内の高臺之本に進、大和殿に向、三跪九叩頭の禮拜仕、終て序班官より

り使者に拜領物之内少く持來之相渡り時、使者頂戴之、序班官下官之者共、高臺差寄拜領之品引取り、其後使

者并都通事・從者・跟伴迄段々進頂戴之、禮拜退出り、其時伴送官・河口通事并福州に殘置り存留通事・從者

迄表、琉球より罷渡り者に老不殘賜物有之由申渡、拜領物相渡り、

一 敕書可相渡旨、前日に提督を申來、禮部衙門に罷出、主客司取次を敕書并咨文相渡り、此時使者三跪九叩

頭之拜禮仕り、一 右同日皇帝の上馬宴と申饗應、使者に老禮部衙門本座

於正面、禮部相伴を被下り、從者に老席を分被下り、饗應之躰最前之通御座り、

一 右之後仕廻次第北京致發足り、北京に老使者三四ヶ月程表滞在仕り、其日數不定御座り、

一 使者北京發足仕り時、張家灣と申船場迄禮部を下官附遣り、

一 皇帝より欽差と申使官壹人、爲見送福州迄被附遣、途中彼是懇に仕り、道中會釋最前之通御座り、

一 道中之諸官人に參官音物贈答之儀を、最前之通御座り、一 福州に致下着、彼地諸官人に參官進物仕り、

一 使者歸帆前、下程と申り、酒肴・野菜・菓子等福州諸官人より相贈申り、

一 使者歸帆前、上下不殘於布政司衙門、欽錫宴と申饗應皇帝を被下り、

一 琉球使者乘歸り船布政司を申付、海防官之下官を相附、出帆前船修補申付、其後海防官人直罷載、船見届り上、

出帆を免申り、一 福州着船之日より、道中又老北京滞留中又老歸帆之節迄、日三度宛馳走申付り、其上歸帆之船中十五日分之

用物渡遣申り、一 進貢使差渡り翌年、福州迄接貢使・才府使と申、從四

品之者壹人、其外輕官人六七人相附、從者・船頭・水

梢等迄百人計壹艘乗組差渡、布政司に咨文差越申外、是者前年差渡外進貢使、海陸長途故買期相滞り儀、又老天子に賜物等中山王頂戴及延引り儀、毎度有之り付、接貢使差渡、敕書并賜物等可接回由大清より申付外故、進貢之翌年ニ福州迄差渡申事御座外、右者共翌年迄福州に滞留仕、前年差渡外進貢使、北京に歸來り時乘歸申外、

一 依舊例、毎年曆百一冊宛皇帝に中山王に賜外、

一 買物之儀、進貢・接貢共に福州に着船仕、參官等相濟外以後致買物度旨、布政司に願り得者、北京に相伺買物免許之段申來り節、右官人より下官差越、琉球館屋に出入之商人を定買渡申外、買物之品者藥種・糸・端物、其外於琉球事關り國用之品物買調申外、買物相濟り節、下官之者參相改申候、

一 皇帝崩御之時者、正儀大夫を爲進貢使差渡外、新帝繼目之時者、天曹法司・地曹法司・人曹法司と申三卿之官人之内、正儀大夫壹人慶賀使に差渡申外、

去々年之秋御尋五ヶ條之内

一 大清國より琉球に使を賜り様子次第、如何り敷之事、

付琉球に相通り外國に及有之敷之事、

一 中山王代替之節、先王薨逝之段使者を以申越、封王使請待之儀相願候得者、三年過りたる大清勝手次第敕使差渡外、其時迎船一艘正儀大夫を乗、福州迄遣請待仕外、

一 大清より之敕使者、文官之者貳人并護送官之者貳人、其外武官之者百人相添、上下五六百人又者七八百人程差渡り、

一 敕使之船琉球湊近ク乘來り節、使を以進物遣、滞留中段に厚馳走仕外、

一 中山先王之靈廟に敕使相越、大清天子より之敕祭を執行外、依之中山王衣罷出、此節敕使に始り對面仕外、

一 大清天子より祭文并香貢<sup>具</sup>其外供物又ハ作物等品々備廟前、敕使自分ニ及備物仕、祭禮之規式懇執行外、終日中山王より饗應仕外、

一 右後日敕使城に昇り、其時庭上に大清天子より之敕書并冠・官服其外拜領物品々高臺飾之、兩敕使左右に立居り時、中山王并琉球之諸官人相隨り罷出、式禮終り後敕書を讀聞り、其後中山王を始諸官人三跪九叩頭之拜禮仕外、終り敕書又者冠・官服を敕使取之、直中山王に相渡り、此敕書者・國王封しりとの敕書なる御座外、中山王頂戴之退仕、則拜領之冠・王服を着し罷出、

又致式禮、則敕使を北宮に請し段々饗應仕外、王服に  
る者敕使に之會釋懇に難仕外に付、紗帽之冠・圓領服  
と申冠服に改罷出、馳走仕外、

一 中山王并妃に衣色之織物拜領仕外、妃に下賜外段者、  
敕使より直中山王に相述申外、

拜領物之品

蟒緞・青綵緞・藍綵緞・藍素緞・閃緞・衣素・錦・

紗・羅

右中山王に

青綵緞・藍綵緞・粧緞・藍素緞・閃緞・衣素・錦・

紗・羅

右中山王妃に

一 敕使滞在中毎度城に請し致饗應候、規式之饗應之時者、  
折る品々遺物有之外、旅館に者五七日間を問安之音  
物仕外、滞留中敕使祝誕之日に者、中山王并諸官人ら  
銘々祝物遣申候、

一 敕使滞在中旅館に中山王兩度見廻申外、一度者封王之  
禮、此時者敕使より饗應有之班戲と申舞有之外、一度

者歸國前暇乞に見廻外、此時者中山王改る厚饗應仕外、

一 敕使并從者迄大清より端物・器財等大分持渡、琉球に

賣渡外、價高直賣申外、其内於琉球無入用品者有之外  
得共、一物も不賣渡中者不致歸帆外付、爲馳走不殘買  
取申外、

一 敕使之勤相濟外者、持渡候品不殘不賣渡中者滞在仕  
外付、大形五六ヶ月程罷在仕外、其内者都る中山王馳  
走仕外、敕使歸唐之節者、兩使者并從者迄迄、餞別に、  
日本琉球之産物金銀を遣申外、

一 敕使歸唐之節、封王爲謝恩、琉球之天曹法司・地曹法  
司・人曹法司三卿之内壹人、副使紫金大夫壹人、敕使

に召添北京に差渡、皇帝に品々献上物仕、謝厚恩申外、

此時者三卿之官人謝恩使に遣外付、例年之使者より者、

於大清猶懇會釋仕外、

一 敕使を請外儀、於琉球者無雙之物入に御座外故、其支  
度に薩州相調申外、就夫大清に謝恩物等之儀者、其節  
薩摩守ら相伺申事御座外、

一 大唐之外に琉球に相通し外國、絶る無御座外、

右段々者琉球に遣置外薩摩守家來より琉球人に問届申  
越り趣る御座外、琉球人者事短儀者通申外得共、事

長儀者乍漸通申外、其上北京に之使者者二度と勤外者

者無御座外故、委細之儀者覺不申外、學士之者者大清

に多年罷在學文仕大清之口及通付、使者之通事惣（信）大清公邊之儀者、右學子共取計申付、然共此學士共者唐學一篇に罷在外故、日本之口者一切不通者而已御座付、口漸通付琉球人を以、學士共は問屆其趣を以書集付付、詳（朱）者難承得儀及御座付由、琉球に遣置付者共申越付間少く者相違之儀及可有御座候、以上、

松平薩摩守家來

〔正徳四年〕「午」十月「十八日」 嶋津帶刀

〔朱〕正徳二辰九月廿八日、御月番御老中井上河内守様に、琉球渡銀吹替之御願被仰上付節、御尋事有之、右之内二ヶ條者去年六月相濟付得共、殘三ヶ條者此節御返答被仰上付、然者此冬御答書被差出に及可有之哉と吟味有之付得共

文照院様薨御に付、御悔之使者差上付船、於洋中遭難風不渡來付付、其御届被仰出、此答書等表被扣置、正徳四年午十月十八日御家老島津帶刀を御留守居案内に河内守様に 太守様より之御書致持參、御用人音羽庄兵衛を以差出、引次に此帳壹冊續り差出付、右付の御答書琉球に申遣、彼方より申越付趣を以申出付故及延引付旨委細申達相渡付處、具に被問召達付由に、御

請取置被成付旨、右庄兵衛より帶刀致承知付事、

（以上朱書）

399 吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見付、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤り、將又松平紀伊（信）守・戸田山城守（忠真）連判之列被 仰付之、珍重之由得其意外、紙面之趣各申談及言上付、恐々謹言、

〔朱〕正徳四年

十月廿七日

松平薩摩守殿

久世大和守

重之判

400 吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見付、

公方様御機嫌之御様躰被相同之外、益御勇健之御儀付間可御心安り、隨ち小熬海鼠一箱被獻之候、各申談遂披露外處一段之御仕合付、恐々謹言、

〔朱〕正徳四年

十月廿七日

松平薩摩守殿

久世大和守

重之判

401 全上

今度

文昭院様三回御忌之御法事御執行付ゝ、以使者御香奠被獻ノ之外、於増上寺奉納之事ノ、右之趣及言上ノ、恐ク謹言、

朱力キ  
正徳四年 十月廿七日

阿部豊後守 正喬判

松平薩摩守殿

402 全上

貴札致拜見候、從琉球國大清江通融之次第、去々年以御書付御尋付ゝ、今度從琉球申來候之趣書付被差越之、致承知ノ、恐惶謹言、

朱力キ  
正徳四年 十月廿九日

井上河内守

正岑判

松平薩摩守様

403 全御譜中

同年十月二十九日、吉貴率<sub>三</sub>琉使<sub>二</sub>到大坂、豫依<sub>三</sub>台命<sub>一</sub>細川主税頭宣紀・松平民部大輔吉元・松平肥前守宣政・小笠原右近將監忠雄・松平周防守康豊・龜井隱岐守茲親

出<sub>三</sub>川船、待<sub>三</sub>琉使、又賜<sub>三</sub>小舟六十餘船、運<sub>三</sub>琉使之旅具、戲下之有司嚴密施<sub>レ</sub>令除<sub>三</sub>通川之諸舟<sub>二</sub>相待都慰懃、

404 吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見ノ、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悅旨尤ノ、將又松平紀伊守・戸田山城守連判之列被仰付之、珍重之由紙面之趣承届ノ、恐ク謹言、

朱力キ  
正徳四年 十月晦日

本多中務大輔 忠良判

間部越前守

詮房判

松平薩摩守殿

405 吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見ノ、

公方様御機嫌之御様躰被相同之外、益御勇健之御儀ノ間可御心安ノ、隨テ御看一種被獻之候、紙面之趣令承知ノ恐ク謹言、

朱力<sup>キ</sup>  
正徳四年  
十一月朔日

本多中務大輔  
忠良判

間部越前守  
詮房判

松平薩摩守殿

406 吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見<sup>ハ</sup>、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤<sup>ハ</sup>、將又琉球中山王兩使召列、國元發足之處、順風無之、先月十七日長州赤間關迄着船由承届<sup>ハ</sup>、紙面之趣各一覽之事<sup>ハ</sup>、恐<sup>ク</sup>謹言、

朱力<sup>キ</sup>  
正徳四年  
十一月三日

阿部豊後守  
正喬判

松平薩摩守殿

407 同御譜中

同年十一月四日吉貴率<sup>ニ</sup>琉使<sup>ニ</sup>到<sup>ニ</sup>于伏見<sup>一</sup>、侯伯出<sup>レ</sup>船有司施<sup>レ</sup>令同<sup>ニ</sup>于前<sup>一</sup>、

408 正文在文庫

御札令披見<sup>ハ</sup>、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤<sup>ハ</sup>、將又琉球中山王兩使召列國元出船之處、順風無之、先月十七日長州赤間關迄着船<sup>ハ</sup>由、紙面之趣令承知<sup>ハ</sup>、恐<sup>ク</sup>謹言、

朱力<sup>キ</sup>  
正徳四年  
十一月五日

土屋相摸守  
政直判

松平薩摩守殿

409 全御譜中

同年十一月七日吉貴率<sup>ニ</sup>琉使<sup>ニ</sup>發<sup>ニ</sup>伏見<sup>一</sup>、取<sup>ニ</sup>驛<sup>ヲ</sup>於近江・美濃・東海<sup>一</sup>、乃賜<sup>ニ</sup>驛馬<sup>ニ</sup>二百・擔夫<sup>一</sup>一千於琉使<sup>一</sup>、

410 全上

御札令披見<sup>ハ</sup>、

文昭院様三回御忌御法事於増上寺相濟<sup>ハ</sup>段被承、恐悦旨尤<sup>ハ</sup>、依之被差越使者<sup>ハ</sup>紙面之趣、各申談及 上聞候、恐<sup>ク</sup>謹言、

朱力<sup>キ</sup>  
正徳四年  
十一月七日

阿部豊後守  
正喬判

松平薩摩守殿

411 吉貴公御譜中

正文在文庫

返くよろしく申せとの御事にてり、めてたくかし

文下されり、仰られりことく

文昭院様御法事、増上寺におるて首尾よく御修行成、此  
うへの御事に思しめしり、御機嫌御伺なされり文のやう、  
よろしくひろういたしまいらせりへは、御満足に思しめ  
しり、かしく、

嶋津將監殿

いは倉

同 帶刀殿

かよ

御返事

412 吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見り、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤り、將又琉球中山  
王兩使召列、去月廿九日大坂着之由得其意り、紙面之趣  
各申談及言上り、恐々謹言、

朱力半  
正徳四年 十一月九日  
阿部豊後守  
正番判

松平薩摩守殿

413 全上

御札令披見り、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤り、將亦琉球中山  
王兩使召列、去月廿九日大坂着之由紙面之趣承届り、恐  
々謹言、

朱力半  
正徳四年 十一月九日  
土屋相摸守  
政直判

松平薩摩守殿

414 吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見り、

文昭院様三回御忌御法事於増上寺相濟り段被承之、恐悦  
旨尤り、紙面趣令承知候、恐々謹言、

朱力半  
正徳四年 十一月十一日  
本多中務大輔  
忠良判

間部越前守  
詮房判

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又琉球中山王兩使召列、去月廿九日大坂着之由紙面之趣得其意外、恐く謹言、

朱カキ  
正徳四年 十一月十二日

本多中務大輔 忠良判  
間部越前守 詮房判

松平薩摩守殿

扣寫在江戸家老座

條々

一 吳國船より拔荷を買取り金元をいたし、人を雇ひ外  
拔荷仕外者有之由相聞得外間、彼族を訴人仕るにお  
てハ、吟味之上金元仕外者の金銀米錢家財等迄不殘可  
被下之事、

一 拔荷仕外者を同類之内より召捕へ、或ハ訴人仕外もの

には、右之荷物御袋美として可被下之事、

一 唐人とぬけ買を申合、又者右之言合之取次をいたし、  
或ハ拔荷物仕なれたるもの并拔荷物に雇れ、或ハ其事  
に携り候者の事、訴人仕るにおゐてハ、急度御ほうひ  
を可被下、たとひ同類たりといふ共其科をゆるし、質  
銀禮銀等申合外員數之一倍可被下之事、

附 只今迄ぬけ荷仕外者の宿いたし、或ハぬけ取り荷  
物預り隠し置外者、或ハ手合仕外ものたりといふ  
とも、訴人仕外ハ、是又其科をゆるし御ほうひ  
被下外事、右同前たるへき事、

右之條々急度可相守之、若存ながら隠し置、外より令  
露顯者、其科本人可爲同前者也、

年號 月日 奉行

別紙切紙ニ有右御案紙ニ相添被相渡外、

正徳四年十一月日

(朱) 右十一月十八日、大久保大隅守様御留主居被召呼、阿多六

郎右衛門江御渡被成外、左外而先頃被相渡外浦崎札之側江

可被建置由被仰渡外、関口藤右衛門を承外ハ、御中途ニ而

被聞召、御届被成外時分、横田備中守様江右申渡之趣、

先格之通御届可被成旨承外通、六郎右衛門中出候事江



正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又琉球中山

王兩使召列、去十三日三州岡崎止宿外、參府日限之儀素

追可被申越之由得其意外、紙面之趣各申談及言上外、

恐々謹言、

朱力キ 正徳四年 十一月廿一日 阿部豊後守 正喬判

松平薩摩守殿

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又琉球中山

王兩使召列、去十三日三州岡崎止宿之由得其意外、參府

日限之儀追可被申越由令承知外、恐々謹言、

朱力キ 正徳四年 十一月廿一日 土屋相摸守 政直判

松平薩摩守殿

御札令披見候、今度

(編吉) 常憲院様七回御忌御法事於東叡山相濟外段被承、恐悦旨

尤外、依之被差越使者外紙面之趣、各申談及 上聞外、

恐々謹言、

朱力キ 正徳四年 十一月廿二日 阿部豊後守 正喬判

松平薩摩守殿

御札令披見外、今度

常憲院様七回御忌御法事於東叡山相濟外段被承、恐悦旨

尤外、紙面之趣得其意外、恐々謹言、

朱力キ 正徳四年 十一月廿六日 本多中務大輔 忠良判

間部越前守 詮房判

松平薩摩守殿

同年十一月二十六日、吉貴率三琉使一著東武芝第一、同二  
十七日 上使松平紀伊守信庸來二櫻田第一勢下率三琉使一遙

來上、同二十八日登<sub>レ</sub>營奉<sub>レ</sub>謁<sub>二</sub>

家繼公<sub>一</sub>、獻品如<sub>二</sub>先觸<sub>一</sub>、阿部豐後守正喬在<sub>二</sub>御前<sub>一</sub>挨拶

之、今日家臣肝付兼柄・比志島範房奉<sub>レ</sub>拜<sub>二</sub>

家繼公<sub>一</sub>、

422 全上

正文在文庫

明廿八日五時登

城參勤之御禮可被申上<sub>レ</sub>、以上、

朱力キ

正徳四年

十一月廿七日

戸田山城守

松平紀伊守

久世大和守

阿部豐後守

井上河内守

松平薩摩守殿

423 全上

家來二人

御目見被<sub>レ</sub>仰付<sub>レ</sub>間、召連可被罷出候、以上、

朱力キ

正徳四年

十一月廿七日

424 全上

御用之儀<sub>レ</sub>間、明廿九日四時可有登

城<sub>レ</sub>、以上、

朱力キ

正徳四年

十一月廿八日

戸田山城守

松平紀伊守

久世大和守

阿部豐後守

井上河内守

松平薩摩守殿

425

全御譜中

同年十一月廿九日吉貴依<sub>二</sub>執政之招<sub>一</sub>登<sub>レ</sub>營、執政各列<sub>二</sub>

居于白書院<sub>一</sub>、阿部正喬述<sub>二</sub>台命<sub>一</sub>、被<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>加階正四位

下<sub>一</sub>、

426

全上

正文在文庫

松平薩摩守

今度琉球人先年より間<sub>レ</sub>無之處<sub>二</sub>、不相替召連參府之段

御機嫌被<sub>レ</sub>思召<sub>レ</sub>、依之加階正四位下被<sub>レ</sub>仰出之、

正文在文庫

從四位上源朝臣吉貴

右可正四位下

正文在文庫

薩摩中將

正四位下

上卿 醍醐大納言

職事 清閑寺頭辨

吉貴公御譜中

正文在文庫

上卿 醍醐大納言

正德四年十一月廿九日 宣旨

從四位上源吉貴朝臣

宜敍正四位下

藏人頭右大辨藤原治房在口裏

口 宣案

朱カキ  
正德四年  
阿部豊後守様より御渡被成候御切紙

中務、表節兵欄、宣勤羽衛、精誠無懈、夙夜在公、宣授  
榮爵、用旌寵章、可依前件、主者施行、

正德四年十一月廿九日

朱インアリ

二品行 中務卿 邦永親 王宣

從四位上行 中務大輔 藤原朝臣 德光奉

從五位下 守中務少輔 中原朝臣 職永行

正二位 行權大納言 臣(廣權) 豐忠(徳大寺)

正二位 權大納言 兼右近衛大將 臣(西園寺) 公全(醍醐)

正二位 行權大納言 臣(醍醐) 致季(二条)

正二位 行權大納言 臣(二条) 昭尹(吉忠)

從二位 行權大納言 兼左近衛大將 臣(正三系) 公統(坊城)

從二位 行權大納言 臣(久我) 俊清(兼香)

從二位 行權大納言 臣(兼香) 隆長(下冷泉)

從二位 行權中納言 兼民部卿 臣(爲經)

從二位 行權中納言 臣(本ノマ)

從二位 行權中納言 臣(日野) 輝光(岩倉)

從二位 行權中納言 臣(岩倉) 具傷

從二位 行權中納言 臣

從二位 行權中納言 臣

從二位行權中納言臣(三條公澄)

從二位行權中納言臣(滋野井公充)

正三位行權中納言臣(六條有藤)

正三位行權中納言臣(中山兼親)

正三位行權中納言臣(廣德兼廉)

權中納言從三位臣尚房等言

制書如右、請奉

制、附外施行、謹言、

正德四年十一月廿九日

制可朱印アリ

月日辰時從四位下行大外記兼掃部頭造酒正

中原朝臣師英

右中辨光榮

攝政左大臣從一位朝臣(九條輔實)

太政大臣闕

右大臣正二位朝臣(二條綱平)

内大臣正二位朝臣(近衛家久)

兵部卿闕

從五位上守兵部大輔植房

右大辨從四位上治房

告正四位下源朝臣吉貴奉

制書如右、符到奉行

從四位下行兵部少輔泰連

朱イン  
アリ

正德四年十月廿九日  
十一カ本ノマ、

少錄

全御譜中

同年十一月二十九日 上使横田備中守來芝第一、賜廩

米三千俵、是依率三疏使於東武一也、

米 三千俵

正文在文庫

米 三千俵  
上包  
覺書

正文在文庫

正文在文庫

正文在文庫

なおく何もよろしく申せとの御事御さり、かしく、

御ふみ下されり、まつく

公方様

吉貴公御譜中

一位様御機嫌よくならせられ御めてたく思しめし被成りよし、さてハ此度りう球人めしつれらせり二付、きのふ上使横田備中守を以御米三千俵御拜領なされ、誠こかたしけなく思しめしなされり由、御禮仰上られ御文のやうひろういたしまいらせりへハ、御念入られり御事思しめしり、めてかしく、

朱力キ  
正徳四年十一月晦日

返事  
松平さつま守さま  
人、御中  
かよ

岩倉

お

同年十二月二日吉貴攜<sup>二</sup>兩琉使<sup>一</sup>登<sup>レ</sup>營、奉<sup>レ</sup>謁<sup>二</sup>家繼公<sup>一</sup>而著<sup>レ</sup>席、琉使勤<sup>二</sup>拜禮使職<sup>一</sup>獻品許多、自亦獻<sup>二</sup>數品<sup>一</sup>、家老島津久當奉<sup>レ</sup>拜<sup>二</sup>謁于御前<sup>一</sup>、同四日又攜<sup>二</sup>琉使<sup>一</sup>登<sup>レ</sup>營、琉使奏<sup>二</sup>音樂<sup>一</sup>備<sup>二</sup>台覽<sup>一</sup>、畢而賜<sup>二</sup>金銀之饗<sup>一</sup>應於吉貴及兩使<sup>一</sup>、島津久當<sup>レ</sup>肝付兼柄及琉使從者亦賜<sup>二</sup>饗膳<sup>一</sup>、同六日又攜<sup>二</sup>琉使<sup>一</sup>登<sup>レ</sup>營奉<sup>レ</sup>謁<sup>二</sup>家繼公<sup>一</sup>、阿部正喬在<sup>二</sup>御前<sup>一</sup>揆<sup>レ</sup>抄之<sup>一</sup>、賜<sup>二</sup>歸國暇於琉使<sup>一</sup>、且賜<sup>二</sup>數品於中山王及兩使從者<sup>一</sup>有<sup>レ</sup>差、同九日率<sup>二</sup>琉使<sup>一</sup>詣<sup>二</sup>東叡山<sup>一</sup>令<sup>レ</sup>拜<sup>二</sup>禮<sup>一</sup>

東照宮

同御譜中

正文在文庫

一先年中山王より

一位様は進上物目錄并箱書付等、皆くひら假字を用ひり、今度ハ書式相改眞字を用ひり、此儀ハこなたを奉敬りて、如此に外と相見えり、雖然彼國ハ薩州に属し外事に外上ハ、如此之事ハ日本御國風を用ひり事尤之儀に外間、自今以後

御女儀様に老前く之通ひらかな可然り事、

一老中に披露狀之内に

貴國 大君 台聽など申字有之り間申入候、貴國とは同輩之國にて、先を敬しり時に用ひり字に外敷、大君之義ハ前御代思召の子細りて朝鮮へも相達しりて改させ用ひすり、台聽の事此方にてハ貴ひり字に外へとも、異國にてハ少しにても敬ひり人ハ誰くも用ひり字に外故、是又前御代より此かた此方常之書通にも不用り、此等之事琉球にて心得り所、相違もなく不叶事に外間、よろしく相心得り様に可然事、

右兩條急度無之様に後々心得に罷成りため、内々を以て可被申付、以上、

朱カキ  
正徳四年 十二月

扣正文在文庫

覺

昨晚以御書付被仰渡趣、委細致承知、此等之御受申上、以上、

朱カキ  
正徳四年 十二月十日 御名

右御書付川上五後右衛門御使者より豊後守様へ被遣り處、被入御念御事、由御返答御座り、

一右御内意付るハ兩王子に内々より從豊後守様被仰越り、御書付之内、御尋之所何となしニ文字用ひ様之儀共委細相尋可申旨被 仰付、兒玉宗因・日高次左衛門に申聞、副使共は得と相尋り處左之通申出、尤豊後守様より御内意被仰渡り譯ハ不申聞、文言用ひ様之儀迄を相尋申り處左之通申、

大君 其國之大なる君と申て取持たる言葉にて、文の内時より主上のことをも可申詞ニ而候、此二字別ニ取替可申字存寄無御座候

台聽 台ハ三台星と申星をかたり三公に表し候、三公之耳ニ入候事を申候、此言葉を別ニ存寄無御座候

貴國 貴人高人と申言のことく其國をあかめて申なり、此言葉別ニ存寄無御座候

436 吉貴公御譜中

正文在文庫

明十五日五時登

城、加階之御禮可被申上、以上、

朱カキ  
正徳四年 十二月十四日

戸田山城守  
松平紀伊守  
久世大和守  
阿部豊後守  
井上河内守

松平薩摩守殿

437 吉貴公御譜中

正文在鶴田郡答院

知行目録

高貳拾石

薩州霧田之内

名寄帳別冊有

右南泉院爲末寺、今度就御再興候、爲寺領被寄付之訖、

全可有所務外、仍如件、

正德四年午十二月十六日

種 彈正 久基判

嶋 内記 久貫判

嶋 大藏 久明判

在月字通  
那答院

438 吉貴公御譜中

正文在文庫

今朝蜜柑二箱・炙鱗一箱被獻之外、遂披露外之處段々御  
仕合外、恐々謹言、

朱力キ  
正德四年 十二月十六日

信庸判

在口裏

松平紀伊守

松平薩摩守殿

439 繼豊公御譜中

正文在琉球國國司

爲改年之嘉儀垣花親方被差渡、殊目錄之表饋給之被入念  
外段令祝着外、猶期後喜之時外、恐惶不宣、

又三郎忠休

朱力キ  
正德四年 十二月十八日

謹上 中山王

440 全上

芳翰令披見外、其元爲繼目之御禮、金武王子被差上外付  
外、太刀・馬代并別錄之通被相贈之、入念儀過量之至存  
外、猶期後喜之時外、恐惶不宣、

又三郎忠休

朱力キ  
正德四年 十二月十八日

謹上 中山王

441 全上

芳札令披見外、

公方様御代替之爲御祝儀、與那城王子被差上外付外、太  
刀・馬代并目錄之通贈給之、入念外段忻然之至外、恐惶  
不宣、

又三郎忠休

朱力キ  
正德四年 十二月十八日

謹上 中山王

442 芳札令披見<sub>レ</sub>、其元弥安全之由跡重存<sub>レ</sub>、我等無吳事<sub>レ</sub>之條可易心<sub>レ</sub>、然者新筆之唐畫二枚、沈金唐臺一脚贈給之、厚情之至過分存<sub>レ</sub>、恐惶不宣、

又三郎

朱カキ 正徳四年

十二月十八日

忠休御判

中山王

回章

443 全上

芳札令披見<sub>レ</sub>、大清<sub>レ</sub>進貢・接貢料銀之儀、先年及訴<sub>レ</sub>之處首尾能被 仰渡<sub>レ</sub>、依之佐渡山親方被差渡<sub>レ</sub>付<sub>レ</sub>、目錄之通被相贈之、入念<sub>レ</sub>段過當之至存<sub>レ</sub>、恐惶不宣、

又三郎忠休御判

朱カキ

正徳四年

十二月十八日

謹上 中山王

444 吉貴公御譜中

同年十二月十八日、吉貴攜<sub>二</sub>嗣適又三郎忠休<sub>一</sub>、至<sub>三</sub>執政

松平信庸之第二、觀面而忠休告欲<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>謁<sub>二</sub>將軍家<sub>一</sub>、信庸頷<sub>レ</sub>之、然吉貴頃日依<sub>二</sub>咳嗽<sub>一</sub>綏<sub>二</sub>其事<sub>一</sub>、

445 正文在文庫

一昨朝御同姓又三郎殿私宅<sub>レ</sub>御同道、御目見願之儀被仰聞<sub>レ</sub>越各<sub>レ</sub>申談、何表被致承知<sub>レ</sub>、乍序申進<sub>レ</sub>、

(朱)

「正徳四年」十二月十九日

(朱)

「松平紀伊守様より御渡被成<sub>レ</sub>」

446 吉貴公御譜中

扣正文在文庫

一此節御返翰之儀<sub>レ</sub>以前<sub>二</sub>者相替、大命・有降・上眷杯と有之、御書留表相替、且又御宛所之譯表相替<sub>レ</sub>、此儀不足之様<sub>二</sub>被存<sub>レ</sub>段を申上置度儀と内<sub>二</sub>兩使者存候旨、副使より次左衛門・宗因迄囑申<sub>レ</sub>由<sub>レ</sub>付、其段<sub>レ</sub>心次第申出置<sub>レ</sub>様<sub>二</sub>と申聞置<sub>レ</sub>由、依之左之書付假屋守宮里八兵衛<sub>レ</sub>相附差出<sub>レ</sub>、

口上覺

私共儀今度從中山王使者申付罷下<sub>レ</sub>處、御返翰被成下候、先内<sub>二</sub>拜見仕<sub>レ</sub>處、御文章之様子先格<sub>二</sub>相替、大命・有



448

扣正文在文庫

中山王披露狀之内文字之儀付る、先頃御内意被仰聞趣御座外、其段いまた不申付外處、兩使より書翰文字仕之儀を私迄相尋申趣御座外、此段私家來此程琉球方は係置外者申付、御家來迄委細申達、御差圖を得申外様ニ仕度存

447

吉貴公御譜中

同年十二月二十一日疏使畢、事發ニ東武ニ赴ニ西薩ニ、家老肝付兼柄、側用人島津久置、表用人中神與五左衛門増武、側目付伊集院權右衛門久盛等護ニ送之、

朱力キ  
正徳四年  
十二月廿日

金武王子  
與那城王子

降・上簀杯と有之外、御書留も相替、且又宛所中山王と計有之外、然者古來琉球より書來り文言之内、大君・貴國・鈞命・台聽杯と仕來り儀、此度之奉對御返翰りる者、御無禮可有之哉と存り、此節之儀付る者、來年御老中様迄書翰差上申答ニ御座候、何様ニ相調成合可申外哉、奉得御差圖罷下、中山王に申聞度外條、此等之段申上外、以上、

450

全上

爲歲暮之賀儀小袖五重到來祝着外、委曲阿部豊後守可述之外也、

朱力キ  
正徳四年  
十二月廿七日



薩摩中將殿

449

吉貴公御譜中

正文在文庫

琉球琵琶首尾好遂披露外、此段爲可申進如斯御座外、以上、

朱力キ  
正徳四年  
十二月廿六日  
阿部豊後守

松平薩摩守様

朱力キ  
正徳四年  
十二月廿二日  
御名  
上包封外而豊後守様江被遣外